# 拝啓友人へ

Kl

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺の友人は今では知らない人の方が少ない有名作家だ。

この物語はオリジナル主人公、オリジナル展開、捏造設定などを含みますのでご注意下さい。

# 目次


第一話 1
第二話 8
第三話 13
第四話 19
第五話 24
第六話 29
第七話 36
第八話 44
第九話 50
番外編 57
第十話 62
第十一話 71
第十二話 76
第十三話 83
第十四話 89
第十五話 96
第十六話 104
第十七話 111
第十八話 120
第十九話 125
第二十話 131
第二十一話 138
第二十二話 147

# 第一話

食物連鎖の頂点とされる人を……。
〝食糧〟として狩る者たちが存在する……。
人間の死肉を漁る化け物として彼らはこう呼ばれる――――――
――――――「喰種（グール）」と。

「で、今日はどうしたんだ？」
目の前に置かれた焼き魚を突きながら目の前の人物に質問を投げかける。
「うふふ、用がないとキミの家には来てはいけないのかい？　それともあれかな？　彼女とよろしくしたいから急に来られると邪魔だということかな？」
すると、目の前に座るソイツは微笑みながらそう返した。その笑顔にはどこか含んだものがあった。
「別にそういうことではないが……。それに俺に恋人がいないのを知ってて言ってるだろ」
俺がそう返すとソイツは更に笑う。何の混じりけもない純粋な笑い声だった。
「あはははは、ごめんごめん。それよりも、どうかな、その焼き魚？　美味しい？」
一通りソイツは笑った後に腰まで伸びた癖のある髪を右手でいじりながらそう続けた。ソイツの前にあるのはコーヒーの入ったマグ

カップが一つだけ。ソイツ専用の赤いマグカップに入ったコーヒーはまだ湯気が昇っていた。それに対して俺の前には焼き魚に、味噌汁に、ご飯に、納豆、そして唐揚げに、サラダが並んでいた。何とも健康にいい選り取り見取りの晩御飯だ。

「……美味いぞ。とても」

箸でほぐした身を頬張り、そう応える。別にこれはお世辞でも何でもない、本当に美味しいのだ。くやしいことに。

――焼き加減といい、塩加減といい、完璧だな。どんどん料理が上手くなってるよなぁ、ほんと。

数年前まで魚を焼けば、炭になり、味付けをすれば塩や醤油が一本なくなるような魔のクッキングをしていた奴がよくぞここまで上手くなったものだと感心する。特にここ最近は料理を教えた俺よりも上手くなってきているかもしれない。味見もロクに出来ないと言うのに料理がここまで上手くなるなんて一体どういうことなのだろうか……。

「そう、それは良かった」

そう嬉しそうに目を細め、ソイツはマグカップに入ったコーヒーを一口啜る。

さて、ここらでいい加減俺と彼女との関係についてこたえておこうと思う。別にこれまでの会話を聞いて分かっているとは思うが、残念ながら俺と彼女は一緒に住んでいる訳でも恋人同士ということでもない。そう言うなれば腐れ縁や友人と言った言葉がしっくりくる関係だ。それに、もしも彼女と俺が同棲でもしていたのならこんなボロアパートではなく、まともな物件に住んでいるだろう。全くもって悔しいことに俺と彼女とでは収入に百倍以上の差がある。だからもしも俺と彼女が同棲するとなればもう少しましな物件になることは間違いない。少なくとも超危険地帯の四区のさらに人通りの少ない裏路地にあるボロアパートではないことは確かだ。

「ん？　どうかした？　私の顔に何かついてる？」

俺の視線に、彼女は首を傾げて微笑む。ヒスイ色の髪に、同じく翡翠色の瞳、顔は長年付き合っている俺のひいき目に見ても整っている

方であり、十人いれば八人は美人だと太鼓判を押してくれるだろう。本人には死んでも言ってやらないが、平均よりもはるかに美人なのがコイツだ。
「いや、何でもない」
そう言うと俺は再び視線を食卓代わりに使っているちゃぶ台に戻す。そして、唐揚げを一つ掴むとそのまま口の中に放り込んだ。
――うん、美味い。
そんな俺の様子を彼女はブラックコーヒーを片手に微笑みながら見ているのだった。

「で、今日はどうしたんだ？」
食事が終わり、暫くして再び彼女に聞いてみた。
「夕食を作りに来たんだよ。どーせ、ろくなものを食べていないと思ってね」
俺の問いかけに彼女は本日三杯目のコーヒーを啜りながら答える。
「そんなことはない。俺だって一人暮らしが長い分料理だってできるさ」
それに、お前に料理のさわりを教えたのは俺だろ、そう彼女に言うと、
「どーだか……大方、簡単な料理ですましてたんじゃないの。冷蔵庫の中身悲惨だったよ」
痛い所を突かれた。
「うぐ……」
「もう付き合い長いんだからそのくらいのことは分かるよ。それに、冷蔵庫の中身を見越してくる途中に結構買い込んで来たから、それなりに潤ってるよ、冷蔵庫」
夕食の時にやけに我が家に無いはずの材料で作って出来た料理が

あったと思ったら、どうやらいつも通り気を使って、来る前に買って来てくれたようだ。一応俺の方が歳が上だと言うのにこれではどっちがどっちか分からないな。
「すまない、お金は払うから……」
「いーよ、別にお金なんか。私の方が何倍も何十倍も稼いでいるんだし――」
「でも。これはそういうことじゃ」
「うん、そう言うと思ったから、貰うね」
「で、いくらだ――」
　ポケットに雑に突っ込んであった財布を取り出す。いつもなら心もとない財布だが、今日は帰る途中に、ふとＡＴＭに寄ってお金を下してきたため少し暖かい。恐らく食材費位はどうにか出せる筈だ。
　そう考えながら財布を開いた俺を、
「あーあー、別に現金で貰うつもりはないよ」
　彼女はそう言って制した。
「ん……？」
「現金じゃなくて別の対価を要求するって言ってるの！　今日、私がここにきた理由はこれだよ！」
　そう言って彼女はちゃぶ台の下に置いてあった鞄の中から、分厚い茶封筒を取り出した。丁度Ａ４サイズの紙が入る大きさのそれを手に取るとずっしりとした重みがあった。
「これは……？」
「いいから開けてみて……」
　そう言われるがままに封筒を開けると、そこには原稿用紙が束になって入っていた。
「黒山羊の卵？」
　原稿用紙の一名目その一行目にはそんな文字が躍っていた。
「うん。そーそー！　私の第七作目だよ！　夕飯代替わりに読んだ感想を教えてほしいな」
「七作目ってじゃあこれ新作じゃないか!?　また持ってきたのか」
　ここいらでいい加減彼女の正体について話して置くとしよう。俺

の百倍ちかく収入のある彼女は作家をやっている。ペンネームは〝高槻　泉〟。ちなみにいずみ、ではなくせん、と読むから間違えないように。

　高槻泉といえば、今や読書家の間では知らない人間はいないのではないかと言われるほどの売れっ子作家だ。本屋に行けば、大抵のところで目立つ場所に平積みされているし、今まで出した本は最低でも三十万冊は売れている、よほどの活字嫌いでもなければ高槻泉という名前は何処かで聞いたことがある、そんな作家が高槻泉という作家であり、今俺の目の前でコーヒーを啜っている女性だった。

「うん、そうだよ。昨日書き終わったんだ」

「……ということは」

「まだ誰にも見せていないよ。勿論、担当にもね」

　昔色々とあったからなのかそうのか、それは分からないが、彼女は書いた作品のほとんどを俺に初めに読ませてくる。今までも書き上がった原稿をそのまま俺の下に持ってくると言うことが何度もあった。

「いや、やっぱり俺じゃなくて担当さんにまず見せればいいんじゃないか？」

「いーの、いーの。どうせ担当に読まさせたところで面白いですね。じゃあこれで行きましょう！　ってなるだけだから……。それに、何か口出しされた所で直す気ないし……」

　彼女はそう言って笑いながら、さらに続ける。

「私の作品に口出し出来て手直しが出来る人は〝先生〟だけなんだから」

　――先生。

　彼女は時たま俺のことをこう呼ぶ時がある。その理由は、今ではもう昔の話になるため、今は割愛させて貰うが、出会って少ししてから彼女はときたま、俺の事をそう呼ぶことがあった。

　もちろん、俺も作家をやっているとか教師をやっているとかいう訳ではない。彼女が俺を呼ぶときのあだ名のような物の一つだ。それに今ではすっかり彼女の方が頭がよくなってしまった為、どちらかと

いうとからかいの意味も含んでいるような感じだった。
「別に俺が読んだとしても同じだと思うけどなぁ」
湯呑に入った緑茶を啜りながら言う。
――あぁ、やっぱり緑茶は熱いやつに限るなぁ……。
「いいから！　いいから！　私の作品を最初に読める幸福を味わいながら、感想を聞かせてよ」
ニコニコと笑顔で楽しそうにそう言われれば返す言葉は無くなる。人気作家なだけあって彼女の作品は面白い。
――うん、まぁろくに推敲も出来ないだろうけど感想だけでいいのなら……。
封筒から原稿用紙の束を取り出し読み進めていく。そんな俺の様子を彼女は満足そうにニコニコとただ見ているのだった。何がそんなに楽しいのやら、俺にもその楽しさの一ミリでも分けてほしいものである。

「ねぇ、どうだった？」
最後の一枚をちゃぶ台の上に置くと、すぐに彼女はそう聞いてきた。
「面白かった」
――そう、面白かった。
それが俺が彼女の新作「黒山羊の卵」を読んだ後の感想だった。
黒山羊の卵――黒山羊と呼ばれる殺人鬼の女性とその一人息子が主人公の話。それが、彼女が持つ巧みな表現や洗練された文体、緻密な心理描写、そして過激な残虐描写とで書かれていた、彼女の文章が十二分に生きた作品だった。
語彙力の少ない俺ではただ面白かった。それだけしか言えなかっ

た。そんな、俺のつたない褒め言葉でも、
「ふふ、そう？　貴方にそう言って貰えると嬉しい」
彼女はそう言って嬉しそうに目を細めるのだった。
「これって、小夜時雨が元になってるのか？」
読んでいて気になったことを聞いてみる。小夜時雨とは高槻泉の短編集である虹のモノクロに収録されている小説だ。
「おっ！　さすが、先生、よく分かったね」
「これだけ、似ていれば誰でも分かるよ」
「うんうん、さすがさすが」
彼女は満足げにそう頷いた。
――でも、と少し思う。
確かに彼女の新作は面白かった。
しかし、気になるところもあったのは事実。
黒山羊の卵にあったある一節。
『あなたの親は、あなたを育てるのに失敗した』
――愛支……キミは未だに……。
これがどういう意味を持つのか。結局俺はニコニコとほほ笑む彼女に聞くことは出来なかった。
最後に一つだけ伝えておきたいことがある。
俺の友人にして腐れ縁の彼女の高槻泉の本名は愛支（えと）――彼女は喰種（グール）だ。
季節は春、始まりと終わりの季節だ。窓から一つ、どこからか風に流されてきた桜の花びらが入って来た。

# 第二話

——であるというだけの理由で、彼らが悔い改めの時に着る荒布の質素な服を身にまとうのを期待することは、感情をもった——にできることではありません。しかしながら先人は彼らに容易ならざる遺産を残したのであります。

とある人物の演説より抜粋。

喰種というものについて時たま少しだけ考えることがある。そう、それはふとした時、例えば帰り道の信号待ちだったり、例えば喫茶店でコーヒーが出てくるまでの時間だったり、例えば、電車に乗って吊革に捕まっている時だったりだ。日常にあるふとしたそんな時に、俺は喰種について考えることがあった。

——喰種とは何か？

大学からの帰り道、赤信号で立ちどまっている最中にふと、そんなことが頭に浮かんだ。青すぎる空が目に入るそんな春の昼下がりのことだった。

——喰種。

それは小学生でも知ってる存在だ。人の世に紛れ人を食らう者。そして、戦闘を行う際や、食事の際には目が赤く染まることが特徴的で、戦闘の際には赫子と呼ばれる捕食器官を使い戦う化け物であり一般人では決して太刀打ちできない奴らだ。

そう、それが世間一般的な喰種の認識だ。小学校に上がる前の子供でも喰種とは人を食べる怖い怖い化け物だと言うことは知っている。

――もしも、喰種に襲われたら運が悪かったと諦めろ。
この言葉は誰から聞いたのだっけ……。同級生だった気もするし、後輩だった気もする、はたまた先輩だっただろうか、それともいつぞやの担任の先生の言葉だったかもしれない、いやその全員の可能性もある。そう、喰種とはそんな天災やら事故やらに近い一般人には抗い難いそんな存在だった。
さらに、俺は考える。
――喰種とは悪か……？
喰種は生きるために人を食らう必要がある。喰種は人以外の物を食べては生きていけない。
――自らが生きていくために他者を殺して何が悪い？
人間だって豚や牛を殺して、その肉を食らって生きてきた。喰種はその豚や牛の代わりに人間を食らうだけ……寧ろ人間の様に牛や豚を自ら管理して増やし、育てそして殺すような真似をしていないだけましではないだろうか。
喰種に恨みを持つものは多い。
大切な人を殺された人も多い。
そんな人たちにとっては喰種とは悪なのだろう。
でも、と思う。
――喰種に生まれてしまったら死ねということだろうか。
もしそうなら、そんな思想は正しいのだろうか……。
信号が青に変わった。通行人が行き交いだす。俺もその波に飲まれるように一歩ずつ足を踏み出すのだった。
空は相変わらず青かった。

「何だ、また来てたのか」
四区にあるボロアパートに帰ると部屋の鍵が開いていた。愛支が来ている時は勝手に鍵を開けるので何時ものことと、ドアを開けると玄関には見慣れた靴が一足行儀よく端の方に並べてあった。
「ん、おかえりー」
玄関の正面の部屋から声がした。その声はいつも通りの聞き慣れた友人の声だった。
「あぁ、ただいま」
リビングがてらに使っている部屋に入ると、このボロアパートには似つかわしくない見るからに高級なソファーに寝そべる愛支の姿があった。この高級感溢れる皮のソファーは数年前に愛支が高槻泉として書いたデビュー作「拝啓　カフカ」という作品の印税で買って、勝手にウチのリビングに置いていったものだ。それなりのお値段がするだけあって座り心地も抜群、寝心地も俺のせんべい布団の百倍はいい。ただし、難点が一つだけある。それはリビングの三分一を占めていることだ。お蔭様でちゃぶ台を出すと人が数人座ることができるスペースしか残らなくなってしまう。
「今日はどうしたんだ？」
寝そべりながら足をバタバタさせている友人にそう聞いてみた。
「んー、新作出して暫く休み貰ったから遊びに来た」
愛支はこちらを見ずに、手にもつ本のページを捲りながらそう応える。結構前から読んでいたのか、残りのページは僅かなようだった。
「そうか、それならゆっくりしていけ」
とくに何も言うことはないため、その言葉に軽く返し、そして部屋の隅に申し訳なさそうに置いてある座布団に座る。
「うん、もちろんそーするよ。あぁ、それと今日の夕食はまた私が作るから準備しなくていいよー」
「いや、流石にそう何度も作って貰うのは悪いし、今日くらいは自分で

……」
「いいの！　いいの！　私が好きでやってるんだから！」
彼女はこちらを見ずにそう言う。その声色は何時もより心なしか明るかった。どうやら、機嫌は良いようだ。
そして、彼女はパタンと本を閉じると勢いよく上半身を上げ、何時もどおりリビングの端に座布団を敷きそこに腰を掛けていた俺の方を向いた。
「んー、やっぱり斜陽は面白いね！」
どうやら、今まで読んでいた本は斜陽らしい。
彼女は昔から太宰治が好きだった。一通り純文学を読んでいた彼女のお気に入りの作家が太宰治だった。彼女の作品にも太宰の影響を受けたものがある、例えば「塩とアヘン」などは太宰の影響を受けている作品だ。本人には聞いていないが作品そのものを読むと分かる。
「斜陽ね……」
「人間失格ともまた毛色が違うしね。私は好きだよ。この作品」
愛支は笑いながら本を部屋の隅に申し訳程度に置いてる本棚の二段目に戻した。ボロボロの表紙からしてそうだろうと思っていたが俺の本棚から拝借した物らしい。
ちなみに本棚の一段目には高槻泉の前作が発表作品順に並んでいる。
「あぁ、そう言えば黒山羊の卵の試し刷りが出来たから本棚に置いておいたから」
愛支は何気なくそう言う。確かに本棚の一段目には昨日までには無かった表紙が一番右端に見えた。
「別にそんなことしなくても自分で買うのに……」
「いいの！　いいの！　高槻泉大先生に甘えておきなさい！」
「そうか、いつもありがとな」
「気にしないでいいよー！」
彼女はいつも通りの柔和な笑みを浮かべるとそのままソファーから立ち上がると、

「まだ夕飯には少し早いから、コーヒータイムでもしようか！」
そう提案するのだった。
「あぁ、それはいいな」
特に大きな事件も無く、こうしてある春の一日は過ぎていった。
最後に一つ付け加えるとするならば、彼女の料理は今日も美味しかった。どうやらまた腕を上げたようだ。

# 第三話

――トントン。

四区にあるボロアパートの一室にまな板を叩く軽快な音が響く。破格の安さと引き換えに立地最悪で、見た目はパッと見廃墟と見間違えそうになる位のボロアパートが我が家なのだが、部屋の中は頑張って荒隠しをしたためそれなりに見られる見た目になっていた。特に台所は力を入れて掃除をしているため、そこらの一般家庭並みの見た目になっている。

――外見はお化け屋敷だけど、中身はそれなりね。

とは、我が親友の言葉である。

――さて、と。後は切り出しをすればＯＫだな。とりあえず、今日は刺身で半身食べて、残りは明日にでも煮つけにするか。

そんな我が家の台所で、俺は魚を捌いていた。特に人様に誇れるような特技も趣味だってない俺だが、こと料理に関しては人並みにできる。それは、長年一人暮らしをしてきた恩恵でもある。まぁ、一人ぐらしをしていれば、誰しもが人並み程度には出来るようになるので威張って言えないことでもあるが……。人間というものは面倒な物で、何かを食べないと生きていけないのだ。

普段はあまり魚を捌いて食べる何て機会はないのだが、先日我が友人に食生活について痛い所を突かれ、さらに料理の腕前も教えた俺よりも上手くなりつつあるソイツに、少しだけ思う所があったため本日はいつもより手の込んだ夕食を作ることにした。

――うん、この油ののりで、この大きさ、そしてこの値段。これはいい買い物をしたな。

商店街の魚屋で買ってきたものなのだが、値段の割に油ものっていて、身も大きい。これはいい買い物をしたと、嬉しくなる。

いつもよりも軽快な動きで魚の切り出しを行っていた時だった。

――トントン。

表から階段を上る足音が聞こえたと思ったら、

――ガチャリ。

突然、鍵が開く音が部屋に響き、
――キィ。
錆び付いた様な音を立てて扉が開かれた。
「ん？　なんだ今日は帰るの早かったんだね」
そして何の躊躇も戸惑いも無く部屋に入って来た犯人は、玄関のすぐ横にある台所で魚を捌いていた俺を見るなり、そう言うのだった。癖のある腰まで伸びた翡翠色の長髪に、同じくヒスイ色の瞳。もはや言うまでもないと思うが、我が親友の愛支だ。手にはビニール袋が一つ提げられていた。
「お前、せめて初めにノックをするくらいしろよ」
いきなりやってきた友人に少しばかり呆れた口調でそう言うと、
「ん？　何で？」
首を傾げられた。
「何でってそりゃ、あれだ」
「どのみちキミがいてもいなくても部屋には入るんだ。キミがいなければノックは無駄に終わるし、キミがいてもキミがカギを開けに来る手間が省けていいじゃない？」
――何を言っているの？
そう言って一笑された。
「何を言っているの、は俺のセリフだ。プライバシーという言葉を知っているか？」
今日みたいに料理をしている最中なら問題ないが、もしもコトをしている最中ならどうする。友人であり、さらに年下の妹のような存在の愛支に見られた日には俺は自害する自信がある。
「プライバシー……もちろん知っているよ。私は作家、高槻泉だよ。馬鹿にしているの？」
「馬鹿にしているのは完全にお前の方だろ」
思わず頭を抱えたくなった。
そんな俺の反応を見て何か勘付いたのか、彼女はいつも通り口端を上げ、楽し気に笑う。
「あぁ、なるほどそういう事ね……。いいじゃないか別に減るもん

じゃないし。私は見ても全く気にしないよ。それに、見られることに興奮を覚えるという人間もいるじゃないか。意外とくせになるかもだよ」

何だか乙女としてはどうかと思うセリフを何の恥ずかしげもないように言い放つ友人。何だか風邪もひいていないと言うのに頭が痛くなってきた。

「お前が気にしなくても、俺がするの！　はぁ、まったく……。こりゃ強請られるままに合いカギを渡したのは間違いだったか……」

――とは、思ったものの、コイツなら……。

ため息とともに小さく漏れたその言葉に、

「ほう、なら今度は鍵を開けずに扉をぶち破ってこようか……」

そう楽し気に笑うのだった。

――あぁ、やっぱりお前ならそうするのな。

どうやら彼女には諦めて帰るという概念はないようだ。

カギだけは絶対に変えないようにしよう。扉を壊されたらかなわん。

「はぁ。まぁ、とりあえず、上がれよ。そして、これからは鍵を開ける前にノックしてくれ」

「うん、善処しよう」

それ、絶対にしないパターンだよな。

軽く彼女はそう言うと靴を脱ぎ、それを玄関の端に並べた。こういう礼儀はちゃんとしているのに、何でノックはしないんだろうか……。

「まぁ、キミの寝室を訪ねる時は必ずノックするから、大丈夫だよ――どーせ、ナニするのも寝室なんだろ？　ベッドの下という古典的な隠し場所はやめたほうがいいと思うよ」

――なっ、何でそれを。

男なら誰しもが持っているであろう秘蔵のコレクションの場所を当てられて動揺をしている俺を尻目に

「うふふふ」

彼女はそう楽しように笑うのだった。

ある意味妹のように思っていた友人にこんなことを言われた今の俺の顔は、きっと難しい表情をしてるはずだ。鏡を見なくてもそれはよく分かった。
「それよりも、だ。今日は一応みられるものを作るつもりなんだね」
「あぁ、一応な、帰りに市場によったらいい魚が売ってたもんでな」
「そーか、そーか。今日も夕食を作るつもりだったが、先を越されたね」
「いつもいつも作って貰ってばかりじゃ悪いからな、たまには自分で作るさ」
「そうか……。まぁ、とりあえず冷蔵庫借りるよ」
「あぁ、いいぞ。また何か持って来てくれたのか？」
「――あぁ、いい〝ワイン〟が手に入ったから、おすそ分けにね」
彼女はそう言うとそのままの足取りで台所の隅に置いてる冷蔵庫を開けると、手に提げていたビニール袋の中身を中にいれた。どうやら彼女が持ってきたものは〝ワイン〟のようだ。
「ワインって、〝どっち〟だ？」
「どっちってそりゃ〝両方〟だよ。たまには一緒に呑もうじゃないか。良ものだよどちらのワインも……それと、キミ用にさらに上ものの日本酒も持ってきたよ」
「そうだな。今日は飲むか。まぁとりあえずもうすぐ夕食出来るからそれまでのんびりしててくれ、お湯はケトルに湧いているからコーヒーでも飲みながらな」
友人の誘いに頷く。うん、今日の先ほどの会話を忘れるには酒の力を借りた方がいい。
――はぁ、にしても新しい隠し場所どうするかなぁ。
魚の身を切り出しながらそんなことを考えていた俺の内心を他所に我が友人は
「うん、そうさせて貰おう」
と食器棚に置いてあった赤色の専用のマグカップを取り出し、
「それにしても、キミはまた〝それ〟で料理しているのか……」
と少し諦め気味にそう言った。

「よく切れるんだよ、これ。俺が持ってる包丁よりも何倍もな」
俺が今、魚を捌くのに使っているのは包丁ではない。刃渡り十五センチほどのナイフを使って捌いている。護身用という名目で我が友人からもらったものの一本であるそれは、俺が出歩く時に必ず持ち歩いている物であり、料理の際に使っているものである。
その切れ味は凄まじく、大抵のものは一刀両断できる品物だ。力加減を間違えるとまな板まですっぱりと切ってしまう。何度か料理している内に慣れたが以前はよくまな板までぱっくりと切ってダメにしたものだ。
ちなみに彼女から貰ったものはそれ以外にも色々とある。ナイフのようにかわいいものならいいのだが、日本刀もどきをプレゼントされた時は反応に困った。彼女曰く護身用らしいが、持ち運ぶにも目立ってしょうがない。もしも、そのまま持ち歩こうものならすぐに職質され、銃刀法違反でしょっぴかれること間違いなしである。だから、殆どの場合、その日本刀もどきは鞘に入れられ部屋の隅にて物干しざお代わりになっている。今も、ほら今日の朝洗った物が掛かっている。
全く使わずに胸ポケットにしまっているだけよりは、料理にでも使った方がコイツも喜ぶだろ、と暢気に言うと。
「はぁ……全くキミという人間は……」
そうため息をつかれてしまった。
「包丁よりも何倍も切れる……？　そりゃそうだろさ、値段も質も包丁とは比べ物にならんよ」
そりゃそうだ。俺の安物の包丁じゃここまでの切れ味絶対に出せないもんな。刃物の価値は切れ味でも決まると言うし、やっぱり結構な価値なのだろうか……。
「ちなみに、もしも買ったらどれくらいの値段になるんだ？」
何気なくそう聞くと、
「うーん、そうだな……。正確な値段は分からんが、もしそのナイフを売るとすれば、間違いなく新車は買えるな」
スパン。

――あっ。
思ってもいなかった言葉を告げられたため、力加減を間違えた。魚の身と一緒にまな板の半分がすっぱりと斬れてしまった。
――このナイフで車が買えるのか……。と言うことは、このアパートなら何年暮らせるんだ、これ一本で!?
「えーっと、それ本当か？」
「勿論だとも、それにキミに嘘をついたところで分かるだろうに……」
「じゃあ、もしかして、部屋の隅にあるあれも結構な値段が……？」
「あぁ、物干し竿代わりにタオルが干してあるやつか……。ったく、〝私の〟を包丁代わりに使ったり、物干し竿代わりに使ったり、本当にキミは自由だな。そうだな、あれなら都内に家一軒立つんじゃないか？」
――あっ。
ガタンと鈍い音が響いた。
――まな板買い直さないと……。
綺麗に切れたまな板を見つめながら、今度からはもう少し大事に使おうと、静かに心に決めるのだった。

# 第四話

いきなりで悪いが少しばかり話を聞いてほしい。

――朝、目が覚めると目の前に美人の顔があった。

うん、どう思うだろうか。まるで、吐いて捨てるほどあるライトノベルやラブコメ漫画のワンシーンのようだろう。誰しもが一度はそんなシーンを見たり、読んだりしているはずだ。そして同時に主人公に対して羨ましいな、とか、生意気なとか僻みや、嫉妬を抱いたことが有る筈だ。

しかし、その状況を実際に体験してみると、いささか心臓によくはない。そうもうお分かりだと思うが、今の俺の状況がまさにそれだった。

鈍い頭の痛みと共に目を覚ました俺が、目を開けるとそこには我が友人の顔が目の前にあった。

――すぅすぅ。

幸せそうな寝息を立てて無警戒に眠るソイツとの距離は直線にして１０ｃｍもないだろう。まさに目と鼻の先だ。割れるように痛みを発する頭が覚醒するまでに要した時間は数秒だ。自分でもびっくりするほど一瞬で目が覚めた。

――これは、どういう状況だ。

目の間には、幸せそうな寝息を立てて眠る我が友人、そしてその友人と同じ布団に入って寝ていたらしかった俺。感覚からするに、いつも使っているせんべい布団ではない。俺の使っている布団よりはるかに柔らかく寝心地の良いこれは、リビングにあるソファー件、愛支のベッドだろう。そして、俺たちが入っている布団も何時もの俺の布団ではない、重くなく更に肌触りのいいそれは、我が親友が買ってきた高級布団で間違いないだろう。この部屋には色々と彼女が買ってきたものが多くあった。

さて、以上で現状確認は殆ど終わった。それから少しばかり何故そうなったか、昨日の記憶を探ってみる。

――確か昨日は愛支と一緒に酒を飲んでて……それで。
愛支が持ってきた美味いワインに美味い日本酒を結構飲んだまでは覚えている。
――あぁ、酔いつぶれたのか。
酷く痛む頭は二日酔いか……。すんすんと鼻を鳴らしてみればアルコールの匂いがした。
――何もなかったよな……？
そう自己暗示のように自分自身に問いかける。昨日の記憶が殆どないが、友人に手を出すようなことはしていないはずだ。もしも、我を忘れて友人に手を出していたのなら俺はその時点で首を括らなくてはいけなくなる。酒におぼれて我を忘れ女性に手を出すなんて最低な行為をしたのであれば俺は羞恥で生きてはいけない。
――まぁ、でもその場合は俺は既に死んでるか。
見た目の綺麗さとは裏腹に愛支は強い。酔った俺が間違って手を出しても彼女なら簡単に返り討ちにしてくれるはずだ。だから、俺がこうして無事に目を覚ました時点で手はだしていないことになる……多分。
――でも、だとすると何で俺は愛支のソファーで寝てるんだ？
確かに昨日はリビングで酒を飲んだが、愛支はソファーに座って飲んでたし、俺はいつも通り座布団に座って飲んでいた。だから、もしもそのまま酔いつぶれたとしてもそこらへんで横になっているか、それともちゃぶ台に突っ伏しているかの二つに一つだと思うのだが……。
そのあたりのことは昨日の記憶がさっぱりない俺には分からないし、二日酔いで頭がいたいため、考えるのを止めることにする。
――それにしても、こうして大人しいとやっぱり美人なもんだな。
目の前で無警戒に眠る我が友人の顔を見る。街中でも中々にお目に掛かれないほど彼女の顔は整っていた。なんせ作家の癖に、彼女本人の容姿のファンというやつも結構な数いるのだ。そこらの芸能人にも劣らないのが彼女だった。
今では口を開けば生意気なことを言うが、昔はこれでも態度も可愛

かったこともある。彼女にその話をすれば顔を真っ赤にして黒歴史だとか、早く忘れろとか言われそうだけどな。
そんな時だった。
ゆっくりと、彼女の目が開いた。綺麗な翡翠色の瞳が俺を映す。
「やぁ、おはよう。乙女の寝顔を盗み見る何てどうかと思うよ」
そしていつもと変わらぬ声でそう言った。
「おはよう、愛支。別に盗み見た訳ではないんだけどな……起きたら目の前にお前がいただけだ」
それよりも、と俺は続ける。
「昨日の夜に何があった？　日本酒を飲んでいたところまでは覚えているんだけどな……。迷惑をかけたみたいですまない」
「おや、昨日の記憶ないの？」
「すまん、さっぱりだ」
「それじゃあ、昨日の夜私を傷物にしたのも……」
声のトーンを落とし、まるで信じられないと言った表情をする我が友人、普通の人が見れば間違いなく騙されるだろう演技だ。無駄に演技が上手いのが我が友人だった。
「嘘は止めろ。お前を襲っていたら俺は今頃あの世で目が覚めていただろ」
「うーん、それは分からないよ……普通の有象無象なら兎も角、キミならね……」
そう意味ありげに彼女は微笑んだ後、
「それよりも、だ。気分の方は大丈夫か？　結構飲んでたけど……」
そう続けた。
「あぁ、最悪の気分だ。頭は痛いし、喉は焼けているしな」
二十歳を過ぎて酒を飲んだことがある人なら誰しも一度は体験したことがあるだろう。割れるような頭の痛みに、ガラガラの声、最低最悪の気分だ。
「うふふふ。辛そうだね」
「出来ることならもうしばらく、寝て過ごしたいね――」
――でも、流石に起きないとまずいな。色々とこの状況はな。

本当はそう続くはずだった言葉は俺の口から出ることはなかった。
何てことはない愛支がその先を口にする前に遮ったからだ。
「――じゃあ、もう少し寝て過ごそうよ」
そう言いながら彼女は布団から両腕を出し、俺の頬に添える。そして更に顔を近づけた。
「なっ……お前、服は?!」
彼女が布団から手を取り出すときに見えたが、布団の下の彼女は何も身に着けていなかった。驚きの声を上げた俺に対し、彼女は俺の顔にその華奢な両手を当てたまま、
「あぁ、あれか暑かったから脱いだだけだよ。最近は随分と気温も上がって来たし、二人で寝ると暑かったんだよ」
と、気にした様子もなく言い放った。その顔には何の羞恥の感情も見えなかった。その堂々とした表情を見ていると何だか裸程度で騒いでいる俺が間違っているような気がしてきた。
あぁ、ちなみに彼女は確かに何も着ていないが、俺の方はしっかりと服もズボンも着ているのであしからずに。これでお互いに裸だったのならこの対象年齢を少しばかり上げないといけなくなる。
「お前、暑かったからって……」
「うん? 実に合理的じゃないか。暑かったから服を脱ぐとは、子供でもやるぞ」
「いや、もういいや……」
堂々とした口調でそう言われ、俺はため息交じりそう返した。
「うふふふふ。それともあれかな? キミは妹のような存在である私に欲情するのかな?」
そんな俺を見て彼女は楽し気に笑う。何がそんなに楽しいのやら、出来ればその楽しさの一欠けらでも分けてほしいものである。
そしてその態度で分かった。彼女は俺をからかうだけの余裕があり、別にこの状況を何の気にもしていないと言うことが。
「馬鹿言ってんじゃない」
向こうが特に気しないのであれば俺も別に気にしないとばかりに目を閉じてもうひと眠りしようとした俺に彼女はいつもより少しだ

け真剣な声色で、
「ねぇ、先生。齧ってもいいかい？」
閉じかけた目を再び開ける。翡翠色の瞳が俺を映す。
「――――――」
「うふふふ、嘘だよ。先生は……先生は不味そうだ。本当に……」
お互いの顔と顔の距離が近いため、そんな呟きも耳に入った。
彼女の顔は真剣そのものだった。どこにも冗談の色は見えなかった。
――あぁ、そうかい。
それは何の特別な日でもないある休日の朝の出来事だった。

# 第五話

それはいつも通りのある春の夕方だった。たまには二人で料理でもしようと、提案してきた友人の案に乗り、二人揃って台所に並んで立っていた。うちのアパートの台所はボロアパートに相応しくそこまで広くはない。我が友人の家と比べたら、半分近く小さいのだが、どうにか二人並んで調理することが出来るくらいの広さはあった。

そんな中俺はいつもの如く例のナイフで鶏肉の切り出しをしながら、隣で煮魚の煮汁を作っていた友人に前々から気になっていたことを聞いてみた。

「なぁ、そう言えばお前、随分料理上手くなったけど、味付けとかってどうやって味見してんの？」

俺の横でコンロの前に立ち手慣れた様子で作業をしている彼女は人間ではなく喰種だ。喰種は人が食べるものを食べることは出来ない。味覚が人間と異なる彼らは人間の食べ物が不味くてしょうがないらしい。さらに、消化器官も人間と異なるため普通の食べ物を消化することが出来ない。喰種にとって人間の食べ物は毒である。

つまり、愛支はまともに味見ができないというわけだった。

しかし、まともに味見が出来ない割には彼女の料理は美味しい。そこいらの飯屋の下手な料理よりも彼女の料理の方が美味しかった。料理を教えている俺が言うのも何だが、どうしてここまで料理が上手くなったのか気になったため聞いてみたというわけだ。

「料理が上手くなったか……キミにそう言われると嬉しいね」

彼女はお玉で鍋の中を一周かき混ぜると、そうほほ笑んだ。

「味見か……」

「そう味見、喰種って人間の食い物はまずくてしょうがないんだろ？」

「うん、その通り。私たち喰種にとって人間の食べ物は毒でしかない」

彼女は淡々と流れるような動きを止めることはなく、そう言った。

「なら、どうやって味付けとかしているわけ？　一応レシピは調べれば出るけど、お前の料理はレシピ通りじゃないだろ？」

「おや……よく私がレシピ通りに味付けしてないと分かったね。さす

がキミだ」
「そりゃお前の料理をそれだけ食えば嫌でも分かるさ」
彼女の作る料理は少しだけ普通のレシピより味が濃い。俺はその味の濃さが好きなのだが、彼女に料理を教えた際は、レシピ通りに教えていたため彼女は自分でアレンジして普段の味付けを見つけたことになる。
「うふふふふ。そーかい、まぁ、味見の件に関していえば単純なことだよ。人間の料理は死ぬほど不味いけど味見は出来るからね」

「そりゃどういうことだ？」
俺の素朴な疑問に、
「うーん、まぁこういう事さ」
彼女はそう言うと鍋の中の煮汁をお玉で少し掬うと、いつも味見で使っている小皿に移し、俺へと差し出してきた。
差し出されて小皿を掴み一口含む。
――うーん、煮魚の煮汁にしては甘味が足りないな……。
俺がそんな感想を抱いていると、彼女は俺が手に持っていた小皿を奪い取り、まだ少し残っていた煮汁を自らの口へと運んだ。
「うん、甘味が足りないと思ったでしょ？」
彼女はうんと一つ大きく頷くとそう言った。
「あぁ、確かにそう思ったけど……」
「まぁ、それはそうだよ。まだ砂糖少ししか入れてないしね」
彼女はニコニコと笑いながら砂糖を手に取り、慣れた手つきで鍋へと入れていく。
そして、再び味見用の小皿に少しだけ掬うと今度は自分の口にそれを運んだ。
「うん、今度はばっちり、はい！」
うんうんと、彼女は満足げに頷くと、小皿を俺に差し出す。なされるがままに小皿を受け取った俺は、少しだけ残っていた煮汁を口に入れた。
――あぁ、今度は完璧だな。

少しだけ濃い味のそれは俺が好きな味つけだった。
「美味しいな……でも、どうやってこれを……やっぱり分量を記憶しているのか？」
「うーん、確かにレシピを記憶しているのは勿論だけど……大切なのはそれじゃないよ――私が覚えているのは、マズ味だよ」
「マズ味？」
「そう、マズ味。さっきも言ったけど私たち喰種は人間の食べ物の味は分からない。どれを食べてもとても不味く感じる、美味しくない。でも、不味いは不味いでも味の変化は分かるんだよ。俗に人間が言う甘さ、からさ、苦さ、酸っぱさ、えぐさ、などなど、私には全て不味いと思うけどそれぞれで微妙に不味さの方向性が異なるんだ。だから、それを記憶する。そうすれば、誰かが作りかけの料理でも完成させることが出来るんだよ。人間が美味しいと言った物を食べてそのマズ味を覚える。そうすれば後はどーとでもなるという訳さ」
彼女は流れるような手つきを止めることなく、そう言った。どこまでも普通な物言いで、まるでそれが当たり前だと言わんばかりの様子だった。
――どうして、君はそこまで出来るんだ？
彼女に初めて料理を教えた時の事は今でも思い出す。味見がてらに一口口に料理を運んだ彼女は、そのまま胃の中の物を全て吐き出した。
彼女は何気なく笑うが、喰種にとってのマズ味というのは、人間が考えているよりも遥かに壮絶なものだ。よっぽどのことがない限り、口にしたいと思わないものだろう。
「まぁ、私の場合確かに料理は出来るようになったけど、人前ではあまり出せないかもな」
「どうしてだ？」
「私の料理はある一人の人間が好む味付けになってるからね。少しばかり普通よりも味が濃い」
彼女は下準備を終えた魚の切り身を鍋に入れながらそう言った。
「それって……」

「教えて貰ったのが一般的なレシピだったからね、初めは本当に好みの味付けを探すのに苦労したよ。特に何を出しても美味しいとしか言わないしね……。初めは何度も何度も失敗した。でも、最近は完璧でしょ？　味付け」

彼女はそう言って柔らかく微笑んだ。その表情はとても優しく、人間の女性となんら変わらなかった。

「――あぁ、でもどうして分かったんだ？」

「それは色々と観察したからね。意外と分りやすいんだよ、キミ。例えば、料理の味付けが完璧だと、キミはご飯とおかずを殆ど交互に食べる。でも逆に味が濃いとご飯を食べる回数が多くなるし、水を飲む量も多くなる。逆に味が薄いとおかずの方に箸が伸びがちになる。そして本当に不味くて食べられたものじゃない料理が出てくると、食べた瞬間に右眉が少しつり上がる」

――どーだい、よく分かってるだろ？

彼女はそう言って笑った。

「――――――」

笑顔の彼女に俺は何と言葉を返せばいいのか、少しだけ考えた。

「まぁ、そんなことは置いておいて、さてもう少しで完成だからちゃちゃっと終わらそう！」

「あぁ、そうだな」

楽し気に笑う我が親友に俺はそんな事しか言えなかった。

最後に今日も今日とて彼女の料理は美味しかったと、とここに記しておこう。

おまけ　アイコントーク

なぁ、愛支。マズ味が違うって言ってたけど具体的にはどう違うの？

――うーん、私は実際に人間の料理の味を良く知らないから言葉にするのは難しいーよ

じゃあ、何となくでいいからさ。例えば、この煮魚とこっちの刺身ではやっぱり違う訳？

――まぁ、感覚でいいのなら……。煮魚と生魚の違いはぱさぱさの度合いが違うよ。言うなれば段ボールを食っているのか、紙粘土を食っているのかの違いだね。

それって両方、食い物じゃないぞ……。

――それに今のは触感の話ね。味の方は……捨てられて三日たった生ごみを食っているか、捨てられて一週間たった腐った生ごみを食べているのか、みたいな違いかな？

そ、そっか……。（おう、よくそんなものを毎回毎回味見できるな）

――うふふふふ。

# 第六話

喫茶店でコーヒーを待っている時にふと、昔の事を思い出した。
――ねぇ、先生。恋って何？
――いや、実は太宰治の斜陽を読んでてさ、その中に『人間は恋と革命のために生まれてきたのだと信じたい』って書いてあって、それで気になったの。
――え？　私はどう思うかって？　んー、人を好きになるってことだと思ってる。
――あぁ、そう言えば夏目漱石のこころだと『恋は罪悪ですか――罪悪です。たしかに』と書いてあった。
――ねぇ、先生。恋と愛との違いって何かな？

そう、それはある夏の日の記憶。うるさい蝉の声と、肌を焼かんばかりの鋭い日差しが辺り一面を照らしていたある夏の日のことだった。
今ではもう大分昔の話になるためその時に何と返したのか、詳しい事まで覚えていない。でも、最期の彼女の問いかけに何と答えたかは覚えている。そう、それは今でも変わらない。恋と愛との違いはきっと――――。

「お待たせしました、アメリカンのアイスになります」
そんな思い出に浸っていた時だった。注文していたコーヒーが運ばれてきた。ぼーっと夏の思い出に浸っていた頭が覚醒していく。店員の女性にお礼を言い一口コーヒーを啜る。
――あぁ、やっぱりこの店のコーヒーは美味い。
いつも通りの味に安心していた時だった。隣のテーブルに座っていた二人の青年の会話が聞こえてきた。
「というか、僕……喰種なんて一度も見たことないんだけど……本当にいるのかな？　人を食う怪物が」
人に紛れ人を食らう喰種は見た目ではほとんど分からない。ＣＣ

Ｇの本部や支局には、喰種の体内には他の人よりも数十倍多いとされるＲｃ因子という物質を検出して知らせる「Ｒｃ検査ゲート」があるが、それは一般には普及していない。

それに、喰種は天災に似たようなものだと言われるように出会うには時の運のような物が必要になる。喰種の数は人間の人口よりも圧倒的に少ない。だから、喰種に縁のない人間は喰種という存在をしらないまま一生を終える。そんな人たちにとっては喰種とは半ば都市伝説に近いものなんだろう。

「いるだろそりゃ……。ヒトに化けて潜んでいるって聞いたことあるし……意外に近くにいたりしてなー……」

「ヒトに化けるか……。でも、それって皆が言っているだけで半ば都市伝説みたいなもんでしょ？」

「うーん、まぁな……。あぁ、そう言えば都市伝説ついでに思い出したけど、何でも喰種の人権を訴える団体もあるらしーぜ。えーっと名前は何って言ったっけな……」

人間はどこまでも自分本位だとは誰かが言っていたが、それは人間の本質を実によく射抜いていると思う。人間というのは当事者になるまでは何も理解しようとしないし、何も動こうとしないものだ。

でも、俺にはそれが悪いことだとは思わない。きっと、俺もあの日、あの時、あの場所で、アイツに出会わなければきっと、彼らと同じく喰種とは架空の都市伝説の生き物だと思っていたに違いないのだから……。

幾ら勝手に聞こえるとはいえ、余り他所のテーブルの会話を聞くのは憚られる。なので、俺はカバンから本を取り出し、それを読むことにした。

大抵の場合、人と喰種の出会いはきっと悲劇を生むしかない。だから――

――願わくば、喰種と出会わないように。

隣に座る名もしらない二人組の青年のこれからを少しだけ思った。

――そうだ。たまにはアイツの家に遊びに行くか。
喫茶店を出て、ふとそんなことを思いついた。空はまだ明るく、日は高い。今日の予定は既に終えて後は家に帰るだけだ。それならそれでいいのだが、どーせ時間があるのだからたまには俺の方から友人の家に出向くのも悪くないと思いついた。
いつも持ち歩いているキーケースの俺の家の鍵の横には彼女家の鍵があった。「私だけ、キミの家の鍵を持っているのは不公平だ」とよく分からん理論で彼女が俺に半ば無理やり渡して来たものだ。
――うん、今日はこの鍵使ってみるか……。いつも向こうは勝手に入ってくるんだし、俺もたまにはいいだろう。
普段は使う事何てない鍵なのだが、今日は使ってみることにする。平素から向こうは勝手に我が家に入り好き勝手くつろいでいるんだ。俺もたまには意趣返しをしたいところだ。
――まぁ、もしも着替えとかの最中でもアイツなら気にせんだろうし。
我が友人との付き合いは、もう長い。お互い下の毛も生えそろわない内からの付き合いだ。今更お互いの裸や下着を見たところでどーってことないはずだ。愛支に関していえば先の一件もあるし、アイツは俺に羞恥心なんて持っていないに違いない。裸で同じ布団に入るなんてきっと愛支にとって俺はそこらに生えている雑草みたいな存在なのだろう。
こんな感じで脳内にて、女性の部屋に勝手に入る事への言い訳を考えながら、俺は彼女の家へと足を進めた。

――あぁ、そうだ。アイツの部屋に行く前にゴミ袋買っていかねーと……。

そんな暢気なことを考えていた俺だが、その暢気さに後悔するまでにそこまでの時間は要らなかった。

――よし、ゴミ袋も買ってきたし。他にいるものはないな。

都内にある高級マンションの一室の前で、右手に提げているビニール袋の中身を確認する。どーせ、ゲリラ的に遊びに行くのなら、掃除の一つでもしてやろうと思いついて買って来たものだ。

我が友人は壊滅的なまでに部屋の掃除をしない。たまに遊びに行くと山積みになった本が床一面に積まれ、いつ書いたかもわからん原稿用紙や何かのチラシがバラバラとそこら中にあるようなところだ。足の踏み場もない、半ばごみ屋敷に近い家が彼女の家だ。俺の部屋は勝手に掃除をするくせに自分の部屋になると途端に無頓着になるのが彼女だった。

恐らく前に遊びに来た時から結構な月日が経っているため、部屋の中は相当凄いことになっていそうだ。

――こりゃ、気合入れないとな。

腕まくりをしていざ、彼女の家の鍵を開ける。勿論、ノック何てしていない。オートロックも鍵で開け、今も勝手に合い鍵で部屋を開けている。

――あいつが普段どんな格好で家にいるのか知らないけど、流石に裸や下着姿ではないだろ。
それに、いきなり連絡もなしで来ているため彼女がいない可能性も十分にある。それならそれで勝手に掃除でもして待っていればいいし、居たのならいたでそれでいい。それに彼女がどんな格好でいようとも俺も彼女も気にしない。もしも、少しばかりセクシーな姿だったなら目の保養になって俺は少しばかり嬉しいね。本人には死んでもいってやらないが、我が友人はかなりの美形だ。
見た目からして高級だと分かる扉は、うちのボロアパートと違いさび付いた金切り声を上げることなくすーっと何の抵抗もなく開いた。
玄関には彼女の靴が脱ぎ捨ててあった。俺の家に来るときは毎回揃えて置いているのに、何で自分の家だと適当になるのかね。そんなことを思いながら、勝手知ったる他人の家とばかりに靴を脱いで入る。
――うわ、こりゃまた酷い。
玄関前の廊下にはよく分からん難しそうな本が雑に積んであった。部屋にはいる前の廊下でこれとなれば、部屋の中はさらにひどいことが予測できる。
玄関前の廊下の突き当りの部屋が彼女の家のリビングになっている。半ば足の踏み場もないような廊下をうまい具合に足を進めながら、扉の向こうに声をかける。
「おーい、愛支遊びに来たぞ！」
「ん!?　まさか……!?　ちょっと待って！　今は……」
目の前の扉から聞こえた声は何時もの友人の落ち着いた声ではなかった。少しばかりうわずり、焦っているようなそんな声。
――珍しいな、愛支がそんな声を出すなんて。
そう思ったがすでに手はドアノブにかけられており、扉も開き始めていた。もう、今更止めようがない。無情にも扉は開かれる。
そして、扉の向こうにいた彼女と目が合った。
――あ。
その声を発したのは俺なのかそれとも彼女だったのか……。

彼女の前には一枚の皿があった。そして、彼女の手にはフォークとナイフ。どうやら、彼女は食事中だったようだ。前にも話したと思うが、我が友人は喰種だ。喰種は普通の人間とは食べるものが違う。喰種が日常的に食すもの……それは人間。

つまり、いま彼女の前の皿に乗っているのは……。

赤く染まった彼女の右目。

――赫眼。

赤く染まるその目は喰種が食事や戦闘を行う際に見せるものだ。紅く光るその目が喰種である証明。

その目が真っ直ぐに俺を射抜く。交差したのは一瞬だった。

「あぁ……すまん」

そう言ってクルリと踵を返し、扉を閉める。まさか、よりにもよって食事中だとは思ってなかった。

はぁ、と一つため息をつく。

彼女は結局何も言わなかったが、長い付き合いだ。目線だけで彼女が何と言いたかったのかは十分に分かる。

――かくごしろよ♡

彼女の瞳はそう物語っていた。

あぁ、これからどうしようか……。

アイコントーク　その2

――はい、今日の晩御飯！

なぁ、愛支。この前は悪かったな。

――いいよ、別に気にしてないって言ってるじゃん！　残さず食べてね！
いや、お前明らかに怒ってるだろ。まぁ、飯はありがたくいただくけど……
――ううん、気にしてないよー。キミが女性の部屋に勝手に無断で入るような人だったとしても、そして、たまたま食事をしていた私を見たとしても全く、これっぽっちも、何とも思ってないよ。
いや、だからあの件はすまんと謝って……ブハッ!?　何だこれ!?
――うふふふふふ。今日の料理はキミの好きな濃い味付けにしてみました。具体的にはいつもより、塩分多め！　当社比でなんと普段より８０００パーセント増量です！
いや、これはあまりにも……
――愛情たっぷり入っているんだから、残さず食べてね。
いや、でもこれ料理じゃ
――残さず食べてね。
……これ食ったら多分死ぬぞ（ボソ
――んー、何か言ったかなー？
いえ！　何でもございません！　美味しくいただきます！
――うんうん、よろしい。
……（今度からはちゃんと前もって連絡して行こう）
――うふふふふふ。

# 第七話

――ねぇ、先生。私は諦めないよ。別に私がやらなくていいかもしれない。ほかの喰種がするかもしれない。でもね、それは逃げなんだ。

――私は逃げない。父のようには逃げない！

――だから、私がやるんだよ、先生。でもね、こんな私が言うのも何だけど……。

――先生。それは、先生がしないといけないことなの？　出来ることなら、先生には普通の人間として生きてほしいよ。

今は昔のとある日の記憶。

「ほらほら、早く早く！　時間は有限だよ！」

嬉しそうに彼女は笑いながら彼女は軽い足取りで足を進める。何がそんなに楽しいのか俺にはサッパリだが、彼女の機嫌はどうやら良いらしく、スキップに近い軽やかな足取りだった。

ある春の日、これ以上ないというほどに晴れた青空の下、俺は友人と共に繁華街へと来ていた。

特徴的な翡翠色の髪を春風に靡かせながらニコニコと笑う我が友人だが、何時もの家にいる時の恰好とは違う。頭にはキャップを被り、目にはサングラスを掛け、口元はマスクで覆っているという恰好だった。端から見れば怪しさ満点である。軽い足取りと口調からマスクの下は笑顔だと言うことは見なくても分かった。

高槻泉は有名な作家である。その実その人気は凄まじく、作品そのものだけでなく彼女自身のファンという者もいるくらいだ。だからこそ、彼女と外を出歩く時は彼女は毎回変装をしている。変装をした結果ただの怪しい不審者になっているのだが、素顔で歩いて人だかりができるよりは何倍もマシである。そこらの有名人よりもよっぽど有名なのが我が友人なのだ。

「で、何処にいくんだ？」
「んー、まずは服でも見に行こうかな」
　さて、ここらで俺と愛支が何でこんなところにいるのかを語っておこう。別になんてことはない。あの例の一件があった後、機嫌が最高によろしくない愛支のご機嫌を取るために来ているだけの話だ。昔から愛支の機嫌が悪い時は、下手なことをせずに、愛支本人の希望を聞いて機嫌を直して貰うのが吉だった。なので、今回も無駄な事をせずに直球に、どうすれば機嫌が直るか聞いた結果愛支の「じゃあ、二人で買い物でも行こうよ」という言葉をうけて今に至るという訳だった。
　男女二人で買い物というとデートと言う言葉を思い浮かべがちだが、愛支の場合は違う。毎回こういう場合は俺を連れまわすだけ連れまわし、荷物持ちをさせるだけだ。これまでもそうだったし、今日もそうだろう。きっと、コイツは荷物持ち兼、会話相手が欲しいだけだ。きっと、愛支にとって俺は体の良い召使いのような物に違いない。昔はあれだけ可愛かったと言うのに最近はすっかり横暴になってしまったものだ。まぁ、今回に限っては完全に俺が悪いため、サーヴァント（召使い）の地位に甘んじておこうと思う。
「ほら、行くよー！」
　四月にしては今日は気温が高い。バケツ一杯の水に絵の具を一本丸々溶かし、それを画用紙に思いっきりぶちまけた様な、空の下には何も日差しを遮るものがなかった。何もしなくても汗ばむような天気だった。そんな中、マスクにサングラスに帽子と端から見ても暑苦しい恰好をした愛支は暑苦しさを微塵も見せない足取りで、トントンと進むのだった。
「はぁ……そんなに張り切って転ぶなよ」
　機嫌がいいのは何よりだが、是非とも俺を連れまわすのはほどほどにしてほしいものだ。と、恐らく無駄に終わるであろう希望を心の中で抱きながら、その背中をトボトボと追うのだった。

「うーん、これはどうかな？」
愛支御用達の服屋にて、我が友人は服を体に当ててこちらを振り向く。淡い色のワンピースだった。飾り気のないシンプルな服装を好む我が親友らしいチョイスだった。
――さすが、よく似合うなぁ……。
我が友人は、顔も整っているがスタイルも良い。唯一の欠点とすればちっこいところだが、みる人が見ればそれもプラスの要素として働く。つまり、何が言いたいかと言えば、似合うのだ、何を着ても……。
――本当に羨ましい。
ヒトは中身が重要だとはよく聞く話だ。別にそれを特段否定するわけではないが、我が友人を見ていると美人は得だと思う訳だ。ヒトは確かに中身も重要だろうが、見た目もそれ並みに、いやそれ以上に重要だろう。中身がどうであろうと、見た目がよければ得をする場合が多いのだ。
「似合ってるよ、とても」
口下手なためそんな事しか言えない自分が少しばかり恥ずかしい。語彙能力がないと言われればその通りなのだが、実際に似合っている物はしょうがない。それに、もしも俺に半端がない語彙能力があったとしても、それを半ば妹のように思っている我が友人に対して言う度胸はないので、これでよかったのかもしれない。
「うふふふふ。そー？　じゃあこれも買おうかなぁ」
愛支はマスク越しに楽し気に笑うと、手に持つ服を俺のもつかごにいれた。既にかごの中身はそれなりに潤っていた。さきほどのやり取りも結構な回数を繰り返している。
女子の買い物は長いと言うが、その言葉は人間だけでなく喰種にも当てはまるようで、服屋に入ってから既にそれなりの時間が経ってい

た。もっとも、普通の女子とは違う点はなまじ財力があるあまり、何を買おうか悩むというよりは、どれが似合うのかを探してる点だろう。基本的にコイツの財力があれば服なんて何着でも買えるのだ。
「ねぇ、キミも私に合う服を探してよ」
「……とはいっても、ファッションとか分からないからなぁ。その辺りはお前の方が詳しいだろ」
女性もののファッション誌なんて生まれてこの方読んだ試しもないため、女性のファッションというのはいまいちわからん。そんな俺に頼むよりは、自分で好みの服を買った方が何倍もいいだろう。そう思って軽くあしらった俺に
「むぅ……。本当にキミは何もわかってないね」
我が友人は冷ややかな視線を飛ばしてきた。
――お前は俺に何を求めているんだよ……。
俺がファッションに疎いことなんてよく分かっているはずなのだが、愛支は不満に頬を膨らませた。
「いいから！　選んでよ！　どーせ、お金はあるんだしさ！　早く早く！」
いつもなら、文句を言いつつもそこで終る筈はずなのだが、今日の友人は一味違うらしい。
「……とは言ってもなぁ」
「今日はキミが選んでくれるまでは、この店から出ないからね」
どうやら、今日の友人は頑固なようだ。
――ここは折れておくか。
「センスないもの選んでも文句言わないでくれよ」
転ばぬ先の杖と、そう言った俺に、
「うん、大丈夫だよ。キミが選んだものなら私は何でも満足だから！」
我が友人は笑いかけるのだった。本当に機嫌が直ってよかったと思う。

「うーん、今日は楽しかったねー」
茜色に染まる空の下、我が友人はうーん、と一つ伸びをした。
マスクとサングラスで表情は読めないが、声色と動作で分かる。彼女の顔は喜色一面だ。
「そうか、それはよかった」
両手に大きな紙袋を抱えながらそう応える。両肩両手に大きな紙袋を下げた俺は端から見れば中々に面白いことになっていそうだ。唯一の救いは入っている物の殆どが衣類な事だろう。少々持ちにくいのは否めないが、見た目に反して重さは殆どなかった。
「うんうん、私は満足だよ！」
俺よりも２ｍほど先を歩いていた愛支はご機嫌な様子でくるりとターンを一つ決めた。淡い色のスカートがひらりと揺れた。来た時と服装が違うのは、例の服屋で俺が選んだ服をそのまま今着ているからだ。
自分なりにはそうとう悩んで愛支に似合うものを選んだつもりだが、それでもきっとセンス皆無の俺の事だ。見る人が見れば愛支の良さを引き出せてないとダメ出しを押されること間違いない頃合なのだが、それでも愛支は喜んでくれた。
例えそれがお世辞でも、美人に喜んでもらえたのならやはり嬉しいもので、悪い気はしない。▪
「そうか、喜んで貰えて何よりだよ」
「うふふふふふ。ねぇ、先生。今日はありがとうね」
「いいよ、気にするな」
そして、彼女の家まであと少しといった時だった。

「ねぇ、先生最後くらい手でもつなごうか」
彼女はいきなりそう言うと、トテトテと俺の横まで来る。
「何言ってんだ、急に？」
「いいじゃん、たまには手をつないで帰ろうよ」
「と言っても両手ふさがってるしな」
両手に提げた紙袋を掲げて肩を竦める。両手がふさがっているアピールだ。
しかし、彼女はそんな俺の主張を気にすることなく、近づくと、
「こーすればいいんだよ」
とそう言って俺が左手に持っていた紙袋の一つを奪い取る。止める暇もなかった、見事な略奪だ。
そして、彼女はそれを自らの左肩に提げると、空いた右手で俺の左手を握った。
「相変わらず、手、ちっこいな」
その手は小さかったが、確かな暖かさを持っていた。そう、愛支の手は人間と何ら変わりはなかった。
「――むぅ、それは身長が１４の時からほとんど伸びなかった私を馬鹿にしているの？」
「いや、そんなことはないよ」
「どーだか、自分だけずんずんと身長伸びたからね、キミは……」
顔を覗き無用に見上げてくる我が友人。俺と彼女の身長差は結構な物で頭一つ分は確実に違う。サングラス越しでも彼女の視線が俺の瞳を覗き込んでいることが分かった。
「別に馬鹿にしてないって。それにちっこい方が可愛らしくていいじゃないか」
「……むぅ。まぁ、キミがそう言うのならいいか」
何が楽しいのか俺にはさっぱり分からんが、彼女は楽し気に繋いだ右手を大きく振りながら足を進める。
「～～♪　～～♪」
鼻歌交じりの軽い足取りは機嫌が相当良い時の証だ。
「ねぇ、先生？」

「ん、どうした？」
「恋って何だと思う？」
「恋ねぇ……」
問われたのはいつかの問い。今は昔に確かに問われた問いだった。
『私は確信したい。人間は恋と革命のために生まれて来たのだ』
「斜陽か？」
彼女の口から出たのは太宰治の斜陽の一節。彼女が昔から太宰治を好んで読んでいた。
「うん、斜陽。……ねぇ、先生。人間が恋と革命のために生まれてきたのなら、私たち（喰種）は何のために生まれてきたのかな？」

『昨夜、都内にあるビルの屋上から鉄骨が落下、通行人が下敷きになる事故がありました。この事故の結果、男女二人の内、一人が死亡、一人が重体だと言うことです。警察は事故の原因を調べるとともに被害者の身元の確認を急いでおります。――』

おまけ　アイコントーク３

――ねぇ、先生。買い物に付き合ってよ。
買い物？　この前付き合っただろう。ひとりで行けよ。
――えー、そんな連れない事言わないで行こうよ！　ちゃんと変装していくからさ！
いや、そういう問題じゃないんだけど……。
――行ってくれないと……
行かないとどうなるんだ？
――また先生の晩御飯が塩分多めになっちゃうかも……てへっ
何がてへ、だ。歳を考えろよ……。
――先生、女の子の歳に触れるのはアウトだよ。
……分かった今回だけ付き合ってやるよ。
――うふふふふ、ありがとう。
……で、ここはどこだ？
――どこってランジェリーショップだよ？　今日は先生に選んで貰うまで帰らないから。私に似合うのを選んでね！
（頭がいたくなってきた……）
――うふふふふ。

■■■■■■

# 第八話

――先生、一つ聞きたかったことがあったんだ。

――ねぇ、先生。先生にとって私は何なのかな？　先生にとって、私はどんな存在なの？

――……いや、ごめん。やっぱり言わないで欲しい。知らないでいいことなんてないと思っていた。どんなに辛いことでも真実とは向き合うべきだと思っていた。

――でもね、そうじゃないこともあると思う。知らないでいいのなら知らないままの方がいいこともある。そう、忘れられる権利があるのなら、知らないでいい権利もあると思う。例え、先生の反応で全て分かってしまったとしても、言葉にして、声として聞きたくないんだ。

――だから、その先はまだ言わないでくれ。

いつかの日の話。

「えらい叩かれているねー。この先生」

いつも通りの昼下がり、ボロアパートの一室で、ボロボロの外見に似合わない高級ソファーに寝そべりながら我が友人は言った。機嫌はあの日以来すっかり戻り、平常運転に戻った友人は、平素と同じように暇をみては我が家に遊びに来ている日々が続いていた。

ちなみに、彼女が今言った「先生」という言葉は俺を差しているものではない。今彼女が言った「先生」と言う言葉が差している人物は「医者」である。我が友人が寝転びながら向ける視線の先には一台の大きなテレビがあった。先日、家に帰ると何故か勝手に備え付けられていたそれは最新型で超高性能、超画質の一品だ。もちろん値段の方もそれに見合う物があり、俺にはとても手が出ない物だ。

我が友人曰く、黒山羊の卵が好評らしく、その売り上げで買ってきたものらしい。「はした金で買ってきた」とは本人談だ。我が家のリビングは四分の三以上が彼女の物で埋まっていた。最早彼女の家と言っても過言ではないくらいに彼女の私物であふれていた。

勝手知ったる他人の家とは彼女によく当てはまる言葉だと思っていたが、もはやここまで来ると他人の部屋というよりも彼女自身の部屋になってきている。

まぁ、そんな雑談は置いておいて、彼女が言った先生という言葉の解説をして行こう。

彼女が見ているテレビでは最近連日連夜ワイドショーを賑わせているニュースが放送されていた。

――先日、都内で起こった事故。ビルの屋上から鉄骨が落下、その下敷きになった二人の若い男女。青年の方が重傷を負い、女性の方は死亡した事故だった。確かに不運な事故であったが、普段ならそこまで大規模な報道がなされることはなくいつの間にか消えていく事故になるはずだった。そうなるはずだったのだ。

この事故がここまで世間の注目を浴びるようになったのは、事故直後に青年が運ばれた病院で行われた一連の処置が原因だった。青年と、女性が運ばれた総合病院で、そこの院長である医師が死亡した女性の臓器を重体だった青年に移植した。これが問題としてマスコミに取り沙汰され、その結果連日連夜ニュースをつければその話題で溢れているという訳だった。

つまり、彼女が先ほど言った先生という言葉は、この手術をした院長である嘉納医師を指しているという訳だ。

「そうだな。大分叩かれているよな」

ちゃぶ台に置かれてたマグカップに入ったブラックコーヒーを啜りながら応える。テレビに映るのは毎日のように映されている嘉納医師の記者会見の様子だ。
「うーん、でも移植しなかったら青年の方も死んでいたんでしょ？それに女性の方は即死してたんだし、そう考えれば、いいんじゃないの人一人救ったんだし」
「そう考えれば確かにそうだが、この場合死んだ女性の意思が問題になってくるんだよな。ドナーカードとかでその女性が臓器移植に肯定的だったのならまだしも、それもなかったしね」
「すでに死んでしまった人の意思がそこまで重要かね……。それに、ドナーカードは持ってなかったけど、彼女が臓器移植に前向きだったかもしれないじゃん」
「確かにそうかもしれないけど、確かめる時間は今回なかったし、逆に臓器移植に反対な人だったかもしれない」
「功利主義の観点から言えば問題ないと思うけどね。ハリスの臓器くじみたいに健康な人を殺したわけじゃないし、死んでいたはずの人間を救うのが悪いとは思わないよ」
ハリスの臓器くじとは、哲学者のジョン・ハリスが提唱した思考実験だ。大まかな内容は、公平なくじで健康な人をランダムで選び、殺す。その人の臓器を全て取り出し、臓器移植が必要な人々に配る。臓器くじに当たった人は死ぬがその代わりに臓器移植を必要としていた複数の人は助かる。このような行為は正しいだろうかという問いかけをした実験だ。
「効用の増減だけで人の社会は回らないんだよ。面倒なことにね、人間という奴は本当に……。それが理論的に正しいと思っていたとしても感情がそうはさせないんだよ」
そうどれだけ効率がいいと分かっていても、逆にどれだけ効率が悪いと分かっていても人間というのはその通りに行動できないものなのだ。
「定言的に間違っているってやつだね……」
「カントの言葉を借りるとそうなるかな」

「全く面倒なもんだね。人の世は……」
ソファーに寝転びながら足をパタパタと動かしている愛支はどうでも良さそうな声でそう言った。
「人の世が住みにくいからといって越す国はあるまい」
「――あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の国よりなお住みにくかろう」
続く言葉を愛支に言われてしまった。
「よく覚えているな」
「キミが好きな本だからね。適当に何度か読んだだけだよ」
うふふふふ、と楽し気に笑いながら彼女は続けた。
「――それと私は画の中には入れないよ」
「カニじゃないからな」
「そう、私は喰種だ」
本当によく本を読んでいるなと感心する。彼女の膨大なまでの語彙能力はきっと彼女の勤勉さによって培われたものだろう。
「それにしても……ね」
彼女は意味ありげな瞳をテレビに向けた。そこには事故の被害者の二人の顔写真と名前が映されていた。
一命をとりとめて入院している青年の名前は、金木　研（かねきけん）。
――命を落とした女性の名前は、神代　利世（かみしろ　りぜ）。
「利世の臓器を移された青年か……。金木　研くん……。なんだか、面白いことになりそうだね。　〝先生〟」
彼女は口端を上げ、俺を見た。その視線は意味ありげなものを潜めていた。
「……」
そのセリフに何も応えず、テレビを見た。
金木　研。
――彼は英雄になれるのか……。それとも……。
もしも英雄になれないとしても、敵対はしたくはないな。
これから先、嫌でも舞台に上がってくるであろう青年の幸福を静か

に祈った。

おまけ　アイコントーク

なぁ、愛支。

――？　何かあった？

いやさ、前々から思っていたんだけど私物持ち込み過ぎじゃないか？　俺の家に。

――ん、そーかな？

いや、そうだろ。この部屋にあるの殆どお前のもんじゃないか。ソファーとかテレビとか布団とか……。

――これくらい別にいいじゃん。その分、キミのお手伝いしてるじゃないか。料理とか洗濯とか掃除とか。

まぁ、いつも飯作ってくれてありがたいけど、色々大変だろ。味見とか。

――気にしないでいいよ。たまに吐くけど……。

いや、それダメじゃないか。ってか思ったんだけどやけにお前の洗濯物が多い時があるんだけどどうして？

――あぁ、家でするのが面倒だから洗濯物を持ってくる時があるんだよ。

いや、掃除もそうだけど俺の家よりも先に自分の家のことをしろよ。

――うふふふふ。じゃあ前みたいに一緒に住めばいいよね。

勘弁してくれ……。てか、今でも勝手に泊まっていくときも多いじゃねぇか……。

――うふふふふふ。つれないねぇ、本当にキミは……。

# 第九話

『――――という訳でして――――で、やはり――――病院で――――』

喰種と人間との違いは何か。

――喰種。

人に紛れ人を食らう者。災害のような存在であり、普通の人ではとても太刀打ちできない存在。一般論を借りるとすれば喰種とは悪と断じることが出来るだろう。街行く人、十人に聞けば九人は喰種は悪だと断ずるに違いない。

「なるほど、彼はやっぱりそうなったか……。そちらの方はしばらく様子を見ていてくれ」

赫子という武器を使う彼らに対抗できるのは、クインケという武器をもつＣＣＧの人間のみ。ＣＣＧとは何の力も持たない一般人にとって善であり、喰種と対をなす存在だ。

『――――ええ――――それと――――２０区に――――』

――喰種は悪、ＣＣＧは善。

しかし、それは本当に正しいのだろうか。喰種は災害のようなものだ、そう言われるように普通に暮らしていて喰種に出会う機会は少ない。でも、それは本当はその当人が気付いていないだけで、本当は喰種と出会っている可能性もある。気付いていないだけで、例えば、いつも遊んでいる友人が……。例えばいつも行っている喫茶店のオーナーが……。例えば、恋人が……。

「２０区に……。珍しいな……。いや、そうか神代利世か」

自分の大切な人が喰種だったら……。

そんな時、人はまだ喰種を悪と断じることが出来るのだろうか。

『ええ――――。――――、――――』

人間と同じように、喰種にも感情がある。気持ちがある。喰種の中には喰種だからという理由だけで酷い生活を送らざるを得なかった喰種もいるし、親をＣＣＧに殺された喰種も多い。そんな喰種は人間を食料だと思うのと同時に人間に恨みを持つ者も多い。

人の中にも大切な人を喰種に殺され、喰種に恨みを持つ人がいる。
お互いに恨みあっているんだ。どうしようもなく。
――分かり合うって難しいなぁ。
「分かった。そちらも引き続き情報収集を頼む。特に白鳩の動きには注意を。何だか嫌な予感がする」
通話を切り、右ポケットにスマートフォンを突っ込み歩き出す。見上げた空はどんよりと重たい灰色だった。
――こりゃ、午後からは雨かな……。

「あっ！　お兄ちゃん！」
二十区を歩いていると後ろから活発な声が聞こえてきた。その声に立ちどまり後ろを振り向けば、そこには見慣れた人影が二つ。娘と母親、親子だった。
「こんにちは」
トテトテと歩いてきた少女の目線に合わせるようにしゃがみ、挨拶をする。ニコニコと笑いながら駆けてくる彼女はバイトがてらに行っている家庭教師の教え子だ。
「こんにちは、お兄ちゃん！」
「今日はお買い物？」
「うん！　お母さんに新しい本買って貰ったんだ！　ほら！」
嬉しそうに話す彼女の手には見慣れた書店のビニール袋が一つ。帰り道にあるチェーン店のものだ。
「そうか、よかったね！」
ポンポンと頭を撫でてやるとパァと花が咲く様な笑顔になる少女。何だかよく分からんが元気そうで何よりだ。
「こんにちは、ドクトルさん」

少女の後を追うように歩いてきた女性がこちらに小さく頭を下げた。少女のお母さんだ。
「こんにちは、それと、何度も言いますけど、僕はドクトルじゃないですよ」
「あら、でもやっていることは似ているんじゃ？」
「うーん……似ているのかなぁ……」
自分の事だと言うのに自信なさげに首を傾げた俺を見て、少女の母親は笑った。手を当てて口元を隠した上品な笑みだった。全くウチの友人とは違う笑顔だ。アイツの場合はこう、無邪気な子供の様な笑顔だからな。
「うふふふ。きっとそうですよ。それに似てなくても私たちにとってはドクトルみたいな存在ですから、貴方は」
「そ、そうですか。そう言ってもらえると嬉しいです」
何時も見る笑顔と違い落ち着いた大人の笑みに思わずタジタジになりながら返すと、ちょんちょんと服の袖を引っ張られた。視線を向けるそっぽを向きながら俺の袖を握る少女の姿があった。
「どうしたの？」
しゃがみこんで目線を合わせて聞いてみれば、
「……」
ジト目で見られてしまった。
「あらあら、拗ねちゃったみたいですね」
少女の母親は笑いながら少女の頭を撫でた。
どうやら少女は構ってほしかったみたいだ。何とも子供らしく可愛らしい少女だ。
思わず笑みが零れた。
「……むぅ」
口ではそんなことを言いつつも少女の口端は上がっていた。どうやら感情を隠すことはまだ出来ないようだ。本当に真っ直ぐでいい子だよなぁ……。
「お兄ちゃんはいっつもお母さんと話すと楽しそうにしてる……」
「そうかな……？」

確かに愛支なんかと違う大人の笑みに年甲斐もなくドキマギしてしまうことはあるが、まさかそれをこの少女に言われるとは思っていなかった。
「うん……私と話すときと違う……」
「そんなことないよ」
そう言って彼女の頭を優しく撫でてあげれば、
「えへへ……」
とすぐに花の咲く様な笑みに変わり、
「――はっ!? 違うんだから! そんなことしても、私は嬉しくないもん!」
と緩み切った表情をすぐに戻すのだった。全く顔色がコロコロと変わり見ていて飽きない子だ。なんだかこちらも面白くなる。
「あはははは。そうかそれは悪かったよ」
笑いながら手を引こうとすると、その手をがっちりと捕まれた。
「で、でも今日だけではもう少しだけこのままでいてもいいの!」
「そうかそうか」
そう言って暫く少女の頭を撫でていると機嫌もすっかり直ったのか、少女はいつも通りのニコニコとした優しい表情に戻った。
「あら、すみませんね。この子、ドクトルさんと家庭教師の時以外に会えて興奮しているんです」
「いえいえ、大丈夫ですよ」
少女の母親にそう返す。
「あっ! お兄ちゃん! そう言えばこの前借りた本全部読んだよ!」
「あぁ、虹のモノクロ?」
虹のモノクロは高槻泉が書いた短編集だ。その中には高槻泉の最新作である「黒山羊の卵」のプロトタイプである「小夜時雨」や、コメディ色の強い「ルサンチメンズ」などがある。虹のモノクロは少し前に国語の課題にと彼女に読むように言っていた本だった。
愛支の本は文学的な言葉をよく使うので国語の勉強にはもってこいの作品なのだ。ちなみに虹のモノクロの中での俺のオススメは「な

つにっき」だ。是非、本屋で見かけた際は買ってみてくれ。
「うん！　とっても面白かった！」
「そうか、それはよかった。何か好きな話はあった？」
「うーん、とね。私は『向日葵』が一番好きだった――」
――え？
思ってもいない題名が出たため思わず内心でそんなことを呟いてしまった。
「――何だか高槻泉先生の他の作品とこの向日葵だけは何だか違う様な気がして……。何というか雰囲気が優しいんだ。他の作品とは違ってこの作品だけハッピーエンドだしね！」
俺の内心を他所に少女はそうほほ笑んだ。その笑顔は穢れを知らない純白の笑みだった。
「――そうか……」
彼女の笑みを見ると俺はただそう呟くことしかできなかった。

「では、私たちはこれで失礼しますね。お引き止めして申し訳ありませんでした」
そう言ってゆっくりと頭を下げる少女の母親に、
「いえいえ、こちらも楽しかったですから」
そう返し、少女の頭を撫でる。柔らかい髪の毛が心地よかった。
「お兄ちゃん！　今度遊びに行く約束絶対だからね！」
何だかいつの間にか少女と遊びに行く約束を結ばされたのだが、たまにはそういうのもいいだろうと前向きに考える。たまには愛支とではなく、別の人間と出かけるのも悪くはない。少女と俺だと仲のいい兄妹に見えないこともないだろうから変な勘ぐりもされないだろ

うし。
「はいはい」
少女にそう返し、彼女の母親へと視線を移す。
――なに、少しばかり言っておかないといけないことを思い出しただけだ。
「リョーコさん、最近白鳩が２０区を重点的に調べているそうです。なるべく目立つ行動はお控えください」
「分かりました。ドクトルさん。いつもありがとうございます」

おまけ　アイコントーク
――ねぇ、先生。お願いがあるんだけど……。
？　お願い？　なんだ？　ちなみにもう下着屋には行かないぞ。
――別にそんなことじゃないよ。あぁ、もしかしてあれかな、先生が選んだ下着をちゃんと私が付けているのか知りたいの？　じゃあ見せてあげるよ。
お前……なんのためらいもなく服とズボンを脱ぐなよ。反応に困るだろ。
――乙女の下着姿を見てもこの反応とは先生枯れてるの？
枯れているんじゃなくて見飽きたんだよ。
――ちぇ、つまらない……。まぁいいや、それでお願いなんだけどさ、先生また物語書いてくれない？　今度短編集出そうと思うからさ。

それはもう勘弁してくれよ。俺には文才ないんだし。
――そんなことはないよ。先生は私の先生だし。私は好きだよ、先生の作品。
むず痒いから、そう褒めないでくれ。
――うふふふふふ。気が向いたらでいいから是非またお願いするよ。

# 番外編

## 番外編

ある春の晴れた日、彼女は何時ものようにある場所へと向かっていた。空は青く澄み渡り、どこまでも高く感じる見事な晴天だった。画に描いた様な春空とはきっと今日のような日の事をいうのだろうと、彼女は人知れず思った。

マイペースにゆっくりと青空の下を歩く。

――やっぱり東京は人が多いな。

大通りを歩きながら彼女はそんな事を思った。足早に多くの人とすれ違い、多くの人が彼女を追い抜いていく。すれ違う人に目をやりながら、彼女は考える。

――この人、一人一人に物語があるんだろうなぁ。例えば、あの人の場合はどんな物語があるんだろう。

一人の人の一生は一冊の本だ、とはとある青年が言っていた言葉だが、彼女もそう思っていた。一冊の本と同じように人の人生とは物語なのだ。

そして、彼女は考える。先ほどすれ違った女子大生くらいの歳の女性の物語を……。

――きっと、そこでそうなって、次は――。

小説のプロットのように断片的に物語を想像していく。そして、ある程度作ると満足したのか、よし、と小さく頷くと足の歩みを速めたのだった。彼女の足は目的地に向かうために大通りから裏路地へと入った。

――ん？　あれは？

裏路地に入ってしばらくすると目の前に見慣れた後ろ姿が目に入った。日本人の平均身長より拳一つ分ほど高い黒髪の学生服の青年だった。どこにでも居そうな雰囲気が後ろ姿からだけでも分かるような青年だ。しかし、彼女が見間違える筈はない。なぜならば、彼女が今向かっている場所こそ彼の家であり、そして彼こそが彼女の――。

「おーい、今帰り？」
彼女は先ほどよりも何倍も軽い足取りでトテトテと後ろから彼に近づくと背中越しに声を掛ける。
「ん？　その声は愛支か」
振り向いた青年は右手に水の入ったペットボトルを持っていた。どうやら飲みながら歩いていたようだ。
「そう、キミの愛支だよ」
彼女がそう言うと、
「何言ってんだ」
彼は笑いながらそう返した。
「むぅ……」
あしらう様な青年の態度に彼女は頬を膨らませる。
「何ふくれっ面してるんだよ」
無邪気に笑う青年に思わず釣られて彼女も笑顔になる。どうしても青年の笑顔を見ていると彼女は顔のゆるみが抑えられない。
「なーんでもない。それよりも水ちょうだい！」
「ちょっ、おい――」
返事を聞く前にペットボトルを奪い去る。彼女にとってはたやすいことだった。
そして、それを一飲み。何だか普段飲んでいる水と違う味がした。
「ぷはっ。ありがとう！」
「ったく、お前は本当に……」
彼はそう言うと彼女から返されたペットボトルをそのまま口に運ぶ。
「あー、間接キスってやつだね」
彼女がそうからかうと彼は、
「何言ってんだよ」
とあしらうようにそう言った。全く意識していない物言いだ。
――むぅ結構勇気出したのに……やっぱりこの反応か。
芳しくない反応に彼女は内心で少しだけ肩を落とす。
――分かっていた……分かっていたよ。

青年が彼女のことをどう思っているのかなんて分かっていた。青年が彼女を見る眼差し、言動、行動、その全てが物語っていた。普通の人から見れば何気ないしぐさでも彼女からすればそれが何かを示しているのか分かってしまう。何故なら彼女は――

――こんなことなら作家になるべきじゃなかったかな……。

そう彼女は作家だから。分りたくなくても、分かってしまう。

彼女はふと、ある小説の一節を思い出した。青年が好きな作家の代表作の一節だった。

――『あなたもご承知でしょう、兄妹の間に恋の成立した例のないことを』か……。

なるほど良く言ったものだと感心すると同時に続く言葉を思い出す。

――『香を嗅ぎ得るのは、香を焚きだした瞬間に限る如く、酒を味わうのは酒を飲み始めた刹那になるが如く、恋の衝動にもこういうきわどい一点が、時間の上に存在しているとしか思われないのです』それを過ぎれば慣れれば慣れるほど、恋の神経はマヒしていく一方か……。

本当に良く言ったものだと、彼女は乾いた笑みを浮かべる。

その笑みに前を歩く青年は気付かない。

――もしも、私が彼にこの思いを伝えたらどうなるだろうか。

彼女はその後の事を考えて、首を横に振った。

――そうだ、この関係でいいんだ。離れずにすむ理由になるのならそれでいい。

作家だからこそ分かってしまう。自らの思いを伝えた時の彼の反応が。であるのなら、これでいい。今のままでいい。まるで自分自身に刷り込むようにそう呟いた。

「おーい愛支、そんな所に立ちどまって何しているんだ?」

青年の声が聞こえた。ハッと気づけば結構な距離が空いていた。

「いいや、別に何でもない。それよりも早く行くよ!」

彼女はそう言って、駆けだす。様々な思いをかき消すように、彼女は足を進めた。

――あぁ、これでいいんだ。

「――ん……」

目を覚ますと見慣れた風景が目に入った。少し変色した壁紙に木製のちゃぶ台。何時も行っている彼の家だ。どうやら机に突っ伏して寝ていたらしい。

「起きたか」

声の方角に目をやればマグカップを手に持っている彼が目に入った。

「ん、私寝てたの？」

「あぁ、どうやらお疲れの様だな」

「上着ありがとう。キミが掛けてくれたんだよね？」

いつの間にか彼女の方には男物上着が掛けられていた。こんなことをするのは彼しかいない。

「気にするな」

彼女の問いかけに彼はそう返すと「コーヒーでも入れてくるか待ってろ」そう言って立ち上がろうとする。

「いい。これ飲むから」

しかし、彼女はこれを制し、彼の目の前に置かれていたマグカップを手に取り口に運んだ。予想通り、中身はブラックコーヒーだった。ほろ苦さが口の中に広がる。

――あぁ美味しい。
彼女は一口で満足したのかマグカップを青年の下に返す。
「お前……人のものを勝手に飲むなよ」
彼は呆れ半分でそう言うとマグカップを手に取りコーヒーを啜った。
「あっ、間接キス」
「何言ってんだよ」
彼はそう言って笑った後に、
「そう言えばぐっすり寝てたけど何か夢でも見たのか？」
そう続けた。
「覚えてないけど、何か昔の夢を見ていたような気がするよ」
その問いかけに彼女はそう返すのだった。

# 第十話

それは春も半ばに迫ったある日のことだった。空は重い曇天が覆い、青空はどこにも見えなかった。午前中はあれほど晴れていたというのに、午後に入った途端、雲がどこからか湧き出し、すぐに青いキャンパスを灰色に染めていった。

――こりゃ、一雨降るかもな。

何時、雨が降り出してもおかしくない天気の下、傘を一応は持って来ておいてよかったと安堵する。朝の天気予報では午後から天気が崩れにわか雨がぱらつく可能性もあると言っていたため念のために持って来たものだった。家を出る時はこれでもかという快晴だったので、半信半疑で手に取ったのだが、天気予報もたまには当たるときはあるみたいだ。

信号待ちをしながら、曇天の空をぼんやりと視界に入れていた時だった。聞き慣れた電子音が聞こえてきた。携帯の着信音だった。

胸ポケットに入れていた携帯が音と振動を鳴らし、存在感を伝えてくる。

――一雨が来そうなこの空に、この着信音。嫌な予感がするな。

今までの人生を思い出すと、善くないことが起った時は大抵の場合雨が降っていた。

――あの日も雨だったな。

そう、俺の人生が変わったあの日。その日も今日のように快晴の陽気から、天気が急に崩れ雨が降ってきた。

急に降り出す雨の事を驟雨（しゅうう）と言う。そう、何時だって驟雨は良くないことの前触れだった。

――白鳩の最近の動きに神代利世。そして、二十区。

祈るような気持ちで通話ボタンを押した。

「――――あぁ、そうか」
少しばかり、昔の事を思い出す。俺が決意を決めた時のことだ。
「――なるほど、動きがあったか。――――捜査官が墓を掘ったか――――」
そのことを胸に決めた時から分かっていた。俺自身がやろうとしていることは、どうしようもなく無謀な事だと。俺のような凡人にはどうしようも出来ない事だと。
そんなことは分かっていた。でも、諦めることは出来なかった。
「――――今、動ける人員は？」
そんな俺を彼女は馬鹿だと言って笑った。そして、大馬鹿だと言って歪んだ笑みを見せていた。
しかし、俺は彼女一人に全てを任せておくことは出来なかった。
「――――人員、――――を――――」
喰種と人間との物語。それは大抵の場合において〝悲劇〟しか生まない。
「――――分かったなら、――――で行こう」
どれだけ、ハッピーエンドを望んでも、喰種と人間の物語はバッドエンドしかない。出会ったこと、それ自体が既にもう悲劇なのだ。
それでも俺は足掻くしかない。終わりが決まっている物語の結末を変えようとすることほど、滑稽な物はない。

通話を切った時には既にポタポタと雨が降って来ていた。手に持っていた傘を差し、横断歩道を渡る。雨はすぐに勢いを強め、横断歩道を渡り切る時には既に本格的に降り注いでいた。横断歩道の向こう側、赤い傘を持つ人とすれ違う。その時だった――

「やぁ、こんな所で会うなんて奇遇だね」

声を掛けられた。赤い大きな傘をさしているため相手の顔は見えなかったが、声だけでも分かった。

聞き間違える筈もない声。聞き慣れた声だった。我が友人である愛支だ。

その声に足を止める。雨が傘を叩く音がやけに大きく聞こえた。

「こんな所で会うなんて奇遇だな」

「うふふふふ。運命というやつかも知れないね」

「運命ね。この場合は違うだろうに……。偶然でも何でもなく、必然だろ」

冗談を込めながら薄い笑いを浮かべると、

「うふふふふふ。いやいや、運命かも知れないよ。いや、運命と考えた方が面白い」

そう笑いながら軽くいなされた。

「お前は作家だからな」

「そう私は作家だ。だから、分かってしまう」

彼女の声は傘を叩く雨音をかき消すように俺の耳に残る。

「なるほどな……。ここにお前が来たということはつまり、そういう事か」

彼女がここに現れた意味は恐らくそういう事だろう。

「よく分かっているね、さすが先生だ」

「別に褒めても何もでねぇよ」

「うふふふふ。別に何か欲しいわけではないよ。先生に褒められただけでも嬉しいものさ。まぁ、雑談はこれくらいにしようか――」

彼女の声色が変わった。

「――悪いけど、ここから先にキミを進ませるわけにはいかない。大人しくしておいてくれないかな？」

――やはり、彼女は情報を掴んでいたか。
きっと、今の俺の顔は何とも言えない顔になっていることだろう。
「優秀な部下を持っているようで羨ましいよ」
そう軽口を叩いてみると、
「いやいや、キミには負けるよ」
軽くいなされた。そして、彼女は続ける。
「――真戸呉緒。件の件で動いている白鳩の名前だ。位は上等捜査官だが、その実力は折り紙付き。特にクインケの扱いはＣＣＧの中でも上位十人には軽く入るだろう。出世を断らなければ間違いなく特等になっていた人材だ。そんな人間の下にキミを向かわせるわけにはいかない。悪いがあの親子には死んでもらう。真戸呉緒は喰種に恨みを持っている。彼の捜査を邪魔すれば最悪逆鱗に触れ、殺さるかもしれない。別にいくら人間が死のうが私には関係ない。でも、キミは別だ」
彼女はここで一旦言葉を区切った。間にすれば本当に瞬きする程度の時間だった。でも、俺には分かった。彼女は逡巡していた。そして彼女は言葉を紡ぐ。
「――〝友人〟であるキミをそんな危険な場所に向かわせるわけにはいかない」
結局のところ、なんで彼女が逡巡したのか俺には分からなかった。そこにどんな思いがあったのか、結局のところ作家でも何でもない俺が分かるはずもなかったんだ。
「――心配してくれてありがとう。でも大丈夫だよ」
赤い大きな傘を差しお互いの表情は見えない。でも、付き合いの長い友人相手だ。顔を見なくてもお互いがどんな表情をしているのかくらいは簡単に分かる。
「――真戸呉緒は強い。そんなことは分かっている。だから、今回は心強い部下に行ってもらっている」
恐らく疑問の表情を浮かべているであろう友人に説明をしておく。人を食料としか思っていない喰種ならどうでもいい。でも今回は笛口親子だ。彼女たちをみすみす見殺しにすることは出来ない。ここ

で見殺しにするのなら〝俺たち〟の存在意義は無くなる。
――悪いが今回ばかりはキミの上を行かせて貰うよ、愛支。

喰種捜査官真戸呉緒の実力は確かだ。彼は今まで数えきれないほどの喰種をその手で葬ってきた。そして、それは今日も同じだった。二十区で見つかった喰種を抹殺する。相手は喰種の中でも力のない方。呉緒にとっては簡単に抹殺出来る相手だった。
「――残念時間切れだ」
真戸呉緒にとって、喰種とは憎悪する存在だ。妻を喰種に殺された彼は、喰種を許しはしない。
――喰種は悪。
それが彼の哲学だった。そこに人格や、パーソナリティーが入り込むスペースはない。彼にとっては喰種とは皆等しく絶対悪なのだ。
辞世の句を聞くまでもないとばかりに彼は得物を振るう。彼が愛

用しているクインケである「フエグチ壱」。奇しくもそれは、彼が今殺さんとしている女性の喰種の夫の赫子から作ったクインケだった。
――ハハハハハハ、これで終わりだ！
呉緒は確信していた。この一撃で目の前の喰種の首を刎ねることが出来ると。
笛口リョーコは、諦めている。だからこそ、簡単にその首を取れるはずだった。
「――なッ」
カンと甲高い金属音が雨音をかき分けて辺りに響いた。必殺の一撃は笛口リョーコに届くことはなかった。
呉緒と笛口リョーコの間に急に現れた人物によって呉緒の一撃は止められていた。
黒いローブを身に纏い、深くフードを被る人物。その顔には木製のお面が張り付いていた。黒い手袋に黒い靴、全てが黒で統一されていた。身長以外には何も特徴が分からない。そんな人物だった。
その人物の手には一振りの刀。怪しく光るその刀が呉緒の一撃を確かに受け止めていた。
「誰だお前は!?」
呉緒の後方にいた部下の亜門が声を出す。
「その質問に応える必要があるか？」
仮面にボイスチェンジャーも仕込んであるのか、その声はやけに低かった。
「いや、必要ないぞ」
その返しに答えたのは呉緒だった。
「貴様が何者かは知らんが邪魔をするのなら死んでもらうぞ！」
返事を聞くまでもなく、呉緒はクインケを振るう。彼にとってはその黒づくめの男が何者か、なんていうのはどうでもよかった。彼にとって重要なことはただ一つ。彼の喰種への復讐を邪魔した、ただそれだけの理由で、彼が得物を振るうのには十分だった。
「――ほう、少しはやるな」
しかし、二の矢も軽く防がれる。

――中々の使い手だ。
口端が上がるのを呉緒は自覚していた。
「笛口リョーコだな。逃げろ、ここからすぐに。コイツは俺が引き受ける」
そんな呉緒を意にも介していないかのように黒づくめの人物は地べたにへたり込むように座っていた笛口リョーコに声を掛けた。
「私がそんなことを許すとでも？」
「……」
そんな呉緒の問いかけにローブの人影は何も言葉を発せずにただ、手にもつ日本刀を握り直すことで応えた。
「で、でも……」
いきなりのことに戸惑いを隠せない様子の笛口リョーコ。
「いいから行け！　まだ死ぬわけにはいかないだろ、お前は！」
しかし、その声でハッと我に返ったのか、立ち上がり駆けだす。
「ほう……面白い。亜門くん、二人を引き連れて笛口リョーコを追ってくれ。なに、手負いだ。キミならば簡単に仕留められる」
その動きをうけ、呉緒は後方に控えていた部下の亜門らに声を掛けた。
「しかし、それでは……」
「コイツは強い。だから相手は私に任せてくれ」
「しかし、真戸さんッ！」
「私の実力では不満かね？　亜門くん？」
「そ、そう言う訳では……！」
「では行きたまえ、亜門くん」
その命令を受けて亜門は動き出す。
「中島さん、草場さん、行きましょう！」
全ては喰種を葬るために。
笛口リョーコを追うために亜門たちが走り抜けた後、呉緒は再び目の前の謎の人物に声を掛けた。
「良かったのか？　亜門くん達を素通りさせて？」
目の前の人物がどういう人物かは謎だが、その目的ははっきりして

いる。笛口リョーコを助けること、それがこの人物の狙いだろう。だからこそ、目の前の人物が、笛口リョーコを追うために駆けだした亜門たちに目もくれなかったことに驚いた。呉緒としては、亜門たちを足止めしようとしてできた隙に刺そうとしていたため、思惑が外れたことになる。

「あぁ、問題ない。真戸呉緒、お前の力を過小評価はしない。お前を含めた四対一で勝てると思うほど俺はうぬぼれてはいないのでな」

「クックック、冷静な所もあるじゃないか。面白い」

無駄話は終わったとばかりに呉緒はクインケを振るった。

降りしきる雨はその勢いをさらに強めるのだった。

結局、その日呉緒たちが笛口親子を仕留めることはついになかった。笛口リョーコを追った亜門は目標を見失い。呉緒は謎の人物を後少しのところで取り逃がすのだった。亜門からの報告を受けた呉緒は、ただ小さく「そうか」とだけ呟いたのだった。

これは余談になるが、呉緒も亜門も目標を取り逃がす過程で、一般人とぶつかったり、一般人に助けを乞われたりして取り逃がしてしまったのだった。

おまけ

アイコントーク

――ねぇ、せっかく会ったんだしたまには一緒に帰ろうか。

お前、返事も待たずに勝手に俺の傘に入ってくるなよ……。

――いいじゃん、別に減るもんじゃないんだし。

いや、そういう問題じゃないだろ。それに、お前自分で傘持ってるじゃんか。わざわざ畳んでまで俺の傘に入る意味ないだろ。

――いやいや意味はあるよ。

……？

――はぁ、やっぱり先生はそういう人間なんだね。

何か言ったか？

――いーや、何にもないよ。それよりも雨に濡れちゃう！

お、おい急に抱き着くなよ！　濡れるのがいやなら、自分の傘を使えよ！　その傘、俺と変わらんくらいの大きさだろ！

――うふふふふ。こうして先生の腕に抱き着いていれば、濡れないし安心だね。

……はぁ。お前人の話を少しは聞こうぜ……。

# 第十一話

久し振りに天気がいいある日のことだった。昨日までは三日連続の雨模様で傘が手放せない日々が続いていたが、今日は昨日までと打って変わっての快晴となった。澄んで高い青空が頭上を覆い、雲は申し訳なさそうに小さく泳いでいるだけだ。そんな快晴の下、帰路につきながら、少しばかり考えてみた。

俺と彼女について。親友である彼女について考えてみる。

彼女との出会いと、これまで過ごしてきたことを思い出す。

一般人である俺と有名作家である彼女。男である俺と、女である彼女。何も取り柄のなかった俺と、強くて頭のいい彼女。そして――

――人間である俺と、喰種である彼女。

ずっと昔から、それこそ出会ってすぐから分かっていた。俺と彼女は決定的なまでに違っていることを。職業でも、性別でも、年齢でも、そして、人間か喰種かの種族の違いなんかよりももっと根本的な部分で俺と彼女は違っている。正反対と言ってもよかった。

しかし、だからこそ俺と彼女はここまでの関係になりえた。親友になりえた。違うということと、馬が合わないということは異なる。根本的な部分が異なっていても、その存在の在り方が違っていても、友人にはなりうる。親友にはなりうる。でも――。

――でも、そこまでなんだ。そこ止まりなんだ。

どう足掻いても、どう頑張っても埋まらない差がある。変わらないものがある。俺も彼女もその根本が変わらない。なら、きっと俺と彼女の関係もそのままだろう。

どこまでもいっても俺と彼女の関係は、〝友人〟のままだ。

――そう、それでいいんだ。

心の中で小さくそう呟く。

――アイツは友人で、手のかかる妹のような奴だ。それでいい。

彼女が彼女〝らしく〟あり続けてくれるのであれば、俺はそれ以上に望むものはない。

それは帰り道のことだった。考え事をしながらぼんやりと歩いていると、目の前に見知った顔が歩いてくるのが目に入った。
「――げっ！」
あまり会いたくない顔だったため思わずそんな声が出てしまった。きっと、顔の方も何とも言えない顔になっているに違いない。
「いきなり、げっ、とは失礼しちゃうなぁー」
相手は俺よりも先にこちらに気付いていたのかニコニコと楽しげな笑みを浮かべながら近づいてくる。絹のように艶のある綺麗な茶髪が風に靡いてサラりと揺れる。距離があっても分かるスタイルの良さ、身長は女性にしては高い方で我が友人とは顔一つ分高い。
「なんでこんな所にいるんだよ、お前が」
まさか四区で出会うとは思ってなかった。いや、別に四区にいること自体はおかしいことでも何でもないのだが、自分の店がある十四区に引きこもっているイメージが強かったため、少しばかり面を食らった。
「なに、私が四区に来ちゃいけないわけ？」
手を振りながら俺の前まで来ると彼女はわざとらしくその頬を膨らませた。どう見てもあざといその行為だが、彼女がやるとそれなりに絵になった。美人は得だというわけだ。
愛支とはまた違った方向でソイツは美人だった。愛支もこいつも顔は非常に整っている。両方とも間違いなく美人といえるだろう。しかし、その方向性が異なっている。愛支の顔を若干、可愛げのある美人とするならば、コイツの顔は凛とした美人という風に評することが出来る。愛支と違って語彙能力がいささかない俺にとっては愛支

もこいつも同じく美人と書くしかないのだが、コイツの場合はキリッとした目元に高い鼻、まるで西洋人のような日本人離れした美人だった。見た目からして気の強そうな美人とでも言っておこう。
　ちなみに性格も若干の可愛げもない。飄々とした笑みの下で何を考えているのか分からない奴だった。愛支ならきっとその顔面の下の本音まである程度は見通せるのだろうが、生憎凡人の俺にはさっぱりだ。
「いや、別にそういうことではないが……。お前がここにいるのが意外でな」
　俺のその言葉にそいつは含んだ様な笑みを浮かべる。もう、既に嫌な予感しかしない。
「うふふふふふ、キミを待ってたんだよ、って言ったらどーする？」
「……」
「そー警戒しなくても大丈夫だって！　ちょっと、散歩をしてただけだよ。久し振りに天気がいいしね。それにしても、久しぶりだね。最近めっきり店来てくれないから寂しかったんだよ！」
　明るい底抜けの表情で彼女は言う。その笑顔は本当に裏表がないように見えた。
　しかし、彼女の狸っぷりは良く知っている。付き合いも伊達に短くない。
「そうか、それは悪かったな。最近色々忙しくてな。それじゃあ、また会おう」
　このまま話し込んでいてもあまりいい予感はしないため、さっさと別れようと無理やり話を終わらせ、彼女の横を通り過ぎようとした時だった。
「ちょっと、待ってよ」
　ガッチリとすれ違いざまに手首を掴まれた。
「いや、悪いが今日は用事があるんだよ」
　特に何も用事はないのだが、この場を終らせるための方便として言っておく。
　しかし、ソイツは俺の言葉をまるで聞いてもいないかのように、

「せっかく会ったんだし、店まで遊びに来てよ。貸し切りにしちゃうよ」
「いや、だから用事が……」
そう言って先を急ごうする俺の腕に彼女は抱き着き、自身の豊満な胸を押し付ける。そして、背伸びをして俺の耳元に口を近づけると、
「金木研くんについて知りたくない？　彼、月山に付きまとわれているみたいだよ」
耳元で囁いた。
その声をうけ、動きが止まった。
「……どういうことだ？」
「うふふふふふ、情報を知りたいのなら対価が必要だよね？」
何が楽しいのか彼女は楽し気に笑う。少しはその楽しさを分けてほしいものだ。
「……金か？　情報か？」
「ざーんねん。そのどちらでもないよ。今日一日私の飲み会に付き合う事、それが条件だよ」
「……」
どうやら、俺に端から拒否権はなかったようだ。
最後に一つ、彼女の事について伝えておこう。彼女の名前はイトリ。十四区に自分の店であるＢＡＲ『Ｈｅｌｔｅｒ　Ｓｋｅｌｔｅｒ』を開いている女性である。そして、彼女もまた喰種だ。
俺とイトリとの関係は何だろうか……。自問自答してもその答えは分からなかった。
「そんな怖い顔しなくてもいいじゃん！　今日は朝まで二人きりで過ごそうじゃないか！」
唯一分かること、それは、俺はイトリが大の苦手だと言うことだ。

おまけ　アイコントーク

あぁ、頭がいてぇ……飲み過ぎた。

――やぁ、お帰り。

なんだ、泊まっていたのか？

――いや、キミが帰って来るまで待っていようと思ったんだけど、結局帰ってこなかったからね。まさか朝帰りだとは思ってなかったよ。

あぁ、悪い。少し、用事があって飲んでた。

――スンスン。

おい、急に近づくなよ。

――酒の匂いに交じって、香水の匂いと、これは……ワイン？

……先生、大人の階段上った？

何馬鹿な事言ってんだよ。

――うふふふふふふ。

何だ、その怪しげな笑みは!?

――いーや、何にもないよ。ただ、今度飲みに付き合ってね。

（何、怒ってるんだ？　あいつ）

# 第十二話

――それで話というのは――、――？
――それをどこで――？　自分で――？
――今まで――、まさか――。でも、――。
――なるほど、友人がね……。――本人は隠している――？
――君の事情はよく分かった。
――木君……。なるほど、か――彼の友人だったか。
――ごめんごめん、何でもない。気にしないでくれ。
――では、一つだけ聞きたいことがある。
――『――のために、キミは――？』質問はたった一つそれだけだ。
――あはははは。まさか、即答とはね。分かった。――はキミを歓迎しよう！
――これからよろしく頼むよ、――君。

雨が降っていた。昨日はあれだけ快晴に恵まれたというのに今日は朝方から空を曇天が覆い、そして、俺が少し遅い朝ご飯を食べる頃にはポツポツと降り始めた。降り始めた雨はそのまま勢いを弱めることはなく、その勢いを徐々に強め、今では結構な勢いで降っているようだった。ボロアパートの屋根を叩く雨音は大きい。先日、とうとう雨漏りをし始めた台所横を修理し終ったばかりのため、どうにかまたどこか雨漏りをし始める前に雨の方には止んでいただきたいのだが、俺がそう願ったところで降るものは降るし、降らないものは降ら

ない。一人間の力でどうこう出来るものではないので、ここは開き直っておくことにする。

さて、そんな雨模様なのだが、今日は休日だ。最近なんだかんだで忙しかった為久しぶりの休日となった。折角の休日なのに雨、と捉えるか、休日のため雨でも何処かへ行かなくてもいいと捉えるのか、それは人次第だろうが、俺は後者としてこの雨を考えていた。たまには何もしない休日も悪くはない。

そんな雨模様の空の下、普段のようにボロアパートの一室にて、俺は本を読んでいた。暇つぶしも兼ねて適当に本棚から手に取ったものだ。

『虹のモノクロ』

我が友人が書いた短編集であり、俺のおススメの一作である「なつにっき」が収録されている一冊だ。結構な回数を読み返したため、既に頭にストーリーは入っているのだが、それでも何度読み返しても面白い。さすが、高槻泉の作品だ。ストーリーも良いが何よりも文章が上手い。何度読んでも感嘆する表現をしている。故に飽きることがない。

――こりゃ売れる訳だ。

最早言うまでもないと思うが、我が友人は作家だ。それも只の作家ではない。有名作家であり売れっ子作家だ。高槻泉の作品の良さとして、文章という単語を上げる人間は多いが、俺もその通りだと思う。言葉選び、言い回し、比喩表現、その全てにおいて高槻泉は一流だった。洗練された言葉選びが彼女の持ち味だった。

そんな風に人知れず、作家高槻泉について思考していた時だった。

「先生、本当にそれ好きだよね」

そんな声が雨音をすり抜けて聞こえてきた。琳琅璆鏘となるような綺麗な声だ。もう、言うまでもないと思うが、我が友人である。俺の物よりも彼女の荷物の方が倍以上ある居間にて彼女は我が物顔でソファーに寝転んで本を読んでいた手の動きを止めるとこちらを見た。

何時もは夕方にやってくるのだが、今日は俺が休みなことを知って

いたためか、彼女は早い時間帯にやって来たらしく、俺が普段よりも二時間程度遅く起床した時には既に部屋にいた。ちなみにその時すでに彼女は俺の朝食を作り終わっていたらしく、机の上には出来立ての和風献立が並んでいた。味噌汁に、焼き魚、それに卵焼きにキュウリの漬物。これぞ、日本の朝ご飯といえるメニューが居間のちゃぶ台の上で湯気を立てていた。

朝の挨拶もそこそこに、よく起きる時間が分かったな、と友人に聞けば、キミが休日にいつもより二時間遅く目覚まし時計をセットしていることくらい知っているよ、と笑顔で返された。まぁ、別にそれが本当だろうと嘘だろうとどっちでもいいため、適当にお礼を言うと、ありがたく朝食を戴いた。

そして、そのままなし崩し的に今に至るという訳だ。ちなみに朝食の方は美味だったと記しておく。

「あぁ、お気に入りだしな、これ」

友人の問いかけにそう応える。高槻泉の作品はそのどれもが面白いが、俺の中で、虹のモノクロは

三本の指に入るお気に入りだ。

「そう、それは嬉しいこと言ってくれるね」

彼女はそう楽し気に笑うと読んでいた小説をパタンと閉じる。漱石のある作品だった。そして、彼女はそのまま、上半身だけ状態を起こすと続ける。

「私も好きだよ、それ」

彼女はソファーから立ち上がり、本棚の前まで足を進める。

「へぇ、そうなのか」

彼女は持っていた小説を本棚の二段目に直すと、今度は三段目の右端から本を一つ抜いた。太宰治の作品だった。

ソファーに戻りながら彼女は口を開く。

「うん、特に『向日葵』も入っているしね」

そう言って彼女は楽し気に笑った。

「からかうのはやめてくれ」

ちゃぶ台の上で湯気を立てていたブラックコーヒーが入ったマグ

カップを一啜りしながら友人に対して抗議する。
「別にからかってはいないよ。本当にそう思っただけ。それと、先生考えてくれた？　短編の物語を書いてくれること」
「いや、だから、あれは……」
「別に今じゃなくてもいいよ。気が向いた時でいいから書いてくれると私は嬉しい」
　彼女は本に落としていた視線を上げた。綺麗な翡翠色の瞳と視線が合った。
「……まぁ、気が向いたらな。善処するよ」
　その要望に応える気はさらさらないので、とりあえず曖昧に応えて濁しておく。
「うん、よろしく頼むよ」
　彼女だって俺の言葉がどういう意味か分かっているはずなのだが、それでも彼女はそう言って優しげにほほ笑むのだった。
　それからしばらく会話が途切れた。
　ペラペラとページをめくる音と時たまコーヒーを啜る音、そして屋根を叩く雨音だけが辺りに響いた。
　会話はない。でもそれは気まずい沈黙ではなかった。言うなれば心地の良い沈黙だった。お互いに分かり会っているからこその沈黙。無理に会話をしようとしなくても、気を使うことをしなくてもいい、間柄だからこそ生まれる沈黙だった。
　結局、俺と彼女はそのまま言葉を交わすことなくお互いにのんびりと過ごすのだった。

　あれからどれくらいの時が立ったのだろうか。俺が虹のモノクロを読み終える間際のことだった。ソファーで寝そべりながら横になっていた友人がむくりと起き上がり何処かへ消えた。
　そして、すぐに帰ってきたと思ったら、彼女は急にこんなことを言い始めた。

「――ねえ、今日はもう飲もうよ」
そう言った彼女に視線を向ければ、ワイン瓶を二本、その小さな手に持つ姿が目に入った。
「飲もうって言ったってまだ昼間だぞ」
生憎の空模様だが、まだ外は明るい。壁に掛かっている時計は未だに昼間を指していた。
「たまの休みくらいいいじゃないか。昼から飲める幸せなんて休みの日にしか味わえないよ。それに、今日はもうこんな空模様だしね。どこにも行かないでしょ？」
「……うーん、確かにどこにも行きたくはないけど、晩飯がなぁ」
確か昨日の夜の段階だとそろそろ買い出しにいかないと行けない頃合だった。冷蔵庫の中身が心もとなくなっていたことを思い出す。
「うふふふふふふ。大丈夫だよ。そんなこと見越して来るときに色々と買ってきているから」
――もしかして、最近は愛支の方が俺の家の冷蔵庫事情詳しくないか……？
「それにこの前約束したじゃん。飲みに付き合ってくれるって！　上物のワインがゲットできたんだ！　だから、これは飲むしかない」
そう言えば、そんな約束を半ば無理やり結ばされたことを思い出す。別に俺は何も悪いことをしたつもりはないのだが、愛支の機嫌がよろしくなかったので機嫌を直して貰うために折れたのだった。
窓の外を見る。雨は未だに降りしきり、その勢いは弱まる兆しを見せない。
「まぁ、たまにはいいか」
何もせずに友人と昼間から飲む休日も悪くない、と愛支に笑いかける。
「うん、今日はゆっくり楽しもうよ！」
愛支も楽し気に笑うと、台所からワイングラスを持って来て、中身を注ぎ始めた。俺もそれに習いコルクを開け、グラスに中身を注ぐ。
そして――。
「それじゃあ、乾杯！」

「乾杯!!」
グラスを合わせるような真似はせず、お互いにグラスを軽く傾けるだけの乾杯。
――たまには、こういう休日も悪くない。
こうして、まだ太陽が高いうちから二人だけの飲み会が始まった。

おまけ
アイコントーク
……。
――ちょっと、会っていきなり目を逸らすのはひどくない？
何でお前がここにいるんだよ、イトリ。十四区に大人しく籠っておけよ。
――第一声がそれとはずいぶん酷くない？　この前も一緒に一晩明かした関係なのにさ。
何が一晩明かした関係だよ。ただ飲みに付き合わせただけだろ。それに、お前のおかげでどれだけあの後大変だったか……。
――おやおや、私のような美人とお酒を飲めたのに、文句があるの？
誰が美人だよ。鏡を見てこい。
――鏡なら毎日見ているけど、美人が映っているだけだよ。
……はぁ。
――ちょっとため息は酷くない？　この前も情報教えてあげたって言うのにさ！
その点は感謝している。
――なら、今度もまた付き合ってよね！

……。

――今度飲むときは昔の話でもしようよ。ほら、あの四区での、ね。キミがまだ初々しかった時の話をね！

……その話をするなら、もう絶対お前の店には行かない……。

# 第十三話

それはある秋の夜のことだった。雑踏の中を人の流れに流されるように、ゆっくりと歩く。行き交う人たちの表情は笑顔。子供がいれば、大人もいた、女性もいれば、男性もいた。老若男女様々な人たちがいた。四区にある神社、そこで行われている秋祭り。そこに俺はいた。境内には多くの出店が立ち並び、多くの人で賑わっている。夜の帳が降りきっても、出店の照明にて辺りは眩しいまでに照らされ、どこか幻想的に感じられた。

――何がそんなに楽しいのやら。

祭囃子を聞きながらのんびりと歩く俺の隣には我が友人の姿。何時もの服装と違い淡い色の浴衣に身を包んだ彼女なのだが、その頭には黒いキャップを深く被り、顔には大きなサングラスが掛けられていた。折角の浴衣が色々と台無しな格好だが、彼女の有名人ぶりを思えば仕方がないのかもしれない。何せ、彼女は有名作家、気軽に人が多いところを歩くことはできないのだ。

キャップを深く被り更にサングラスまでした彼女の表情はあまりよく見えない。でも、その表情を見なくとも動きと声色でどんな顔色をしているのかは手に取る様に分かる。彼女は今、楽し気に笑っている。

――まぁ、いっか。理由は分からんが、機嫌がいいようで何よりだ。

何がそんなに嬉しいのか、はたまた楽しいのかは分からないが、理由は何であれ、我が友人の機嫌がいいのは何よりだ。愛支に誘われるがままにとりあえず、この祭りに来てみたのだが、愛支が楽しんでくれているのであれば来た甲斐があったという訳だ。

「ねぇねぇ、先生。ちょっと待ってて」

何かを思いついたのか、彼女は人ごみをかき分けて何処かへと消えていった。

人の波に消えていった彼女の背中を見送った後、空を見上げる。東京の夜は明るい。その言葉の通り、星も月明かりも申し訳程度にしか見えなかった。下弦の月を見上げながら少しばかり考える。

――隻眼の喰種か……。
今、喰種の間で話題になっている隻眼の喰種と呼ばれる喰種のことを。
――金木研……。キミは英雄たりえるか？
そんな呟きは祭りの雑踏にかき消され、誰の耳にも届くことはなかった。
それからしばらくして、愛支が帰ってきた。
「ごめんごめん。これを買ってきてね」
そう言う彼女の手にはビニール袋が二つ提げられていた。
「はい！」
彼女はその内の一つからラムネ瓶を取り出すと俺へと差し出す。
「あぁ、ありがとう」
「うふふふふ、どういたしまして」
彼女はそう言って笑うと、さらにビニール袋の中からもう一本ラムネの瓶を取り出した。
――ん？　もう一本？
俺の疑問に目もくれず、彼女はラムネ瓶を開けるとこちらに差し出す。
「？」
「乾杯しようよ、先生」
差し出された瓶の意図が分からず首を傾げた俺に彼女は笑いながらそう言った。
――ラムネなら大丈夫なのか？
喰種は基本的に人間以外の物を食べない。唯一の例外としてコーヒーと水があるが、それもコーヒーはブラックだけの例外で砂糖やミルクが入ると体が受け付けなくなる。それを考えるとラムネなら大丈夫だとか、そんな筈はないと思う。
しかし、ラムネを持つ彼女の笑顔には何の憂いも心配も感じられない。
「あぁ、分かった」
とりあえず、言われるがままに瓶の封を開け、彼女のラムネ瓶と合

わせる。
「「乾杯」」
――チン。
瓶と瓶が軽くぶつかり甲高い音を立てた。
「ごくごくごく。ぷっはー！一度は飲んでみたかったんだ、これ！」
彼女は豪快にラムネを飲むとそう、笑顔で話す。
「そうかい、それはよかった」
彼女にそう返して、俺もラムネを一口口に運んだ。冷えた炭酸が食道を通り胃まで届く感覚が感じられる。
――あぁ、祭りといえばやっぱりこれだな。
ビールも悪くはないが、祭りと言えばやはりラムネだろう。この甘さも炭酸もその全てが祭囃子をＢＧＭに引き立てられ美味しく感じられた。
「しかし、美味いのか？　それ」
横でチビチビとラムネを飲んでいる友人に聞いてみる。
すると、ソイツはあっけらかんと
「凄く不味いに決まってるじゃん！」
当たり前とばかりにこう返した。その態度に面を食らっていると、彼女が俺の方へと腕を伸ばしてきた。
「先生、ちょっとこれ持ってて！」
そう言って差し出してきたのは彼女が今まで持っていたラムネ瓶。
「あぁ、分かった」
「はい、先生。これも食べよう！」
言われるがままに瓶を受け取ると、横を歩く彼女はもう一つのビニール袋から白いパックを取り出し、その蓋を開けた。中身はたこ焼き。白い湯気を立てて美味しそうな匂いを出しているその一個に彼女は爪楊枝を刺すとそれを俺の方へと向けてくる。。
「はい、どうぞ！」
「あ、ありがとう」
楽しそうに笑う彼女に何も言えなくなり、俺はぱくりと、そのたこ焼きを咥えた。

「どう？　美味しい？」
「あぁ、美味いな」
「そう、それは良かった！」
彼女はそうほほ笑むと、手にもっていた爪楊枝でパックの中のたこ焼きを刺し、自らの口へと運んだ。
――あ。
止める暇もなかった。
「うんうん、美味なり美味なり！」
前にも少し話をしたと思うが、喰種にとって人間の食べものは毒である。消化器官が人間と異なる喰種では人間の食べ物は消化できない。また、出来たとしても長い時間がかかってしまう。
それに味の方もとてつもなく不味く感じるらしい。それは喰種の生存本能でもあり、その不味さは言葉に表すことは出来ないレベルだとか。彼女に昔、料理を教えた時に一口料理を口に運んだ彼女は胃の中の全ての物を吐き出した。喰種にとって人間の食事を食べることはそれほどのことなのだ。
しかし、たこ焼きを頬張る彼女の顔は笑顔だった。でも、やはりしんどいのか、少しばかり顔色が悪くなっていた。些細な変化だが俺には分かる。彼女は無理をしている。
――どうして？
思わずそんなことを聞きそうになった。
「ねぇ、先生」
俺の思いをかき消す様に彼女は先に口を開く。
「――祭りって楽しいよね。今日は先生と一緒にこられて良かったよ」
彼女はそう言ってほほ笑んだ。
――……愛支。
その笑顔に俺は言葉をなくした。
「うふふふふふふふ。今日はとりあえず祭りを楽しもうと思うんだ。きっと、これから先忙しくなるからね」
彼女はそう言うとたこ焼きをもう一つ口に運ぶ。

――これから先忙しくなるか……。
ＣＣＧにアオギリの樹、嘉納明博にピエロ……そして金木研。
彼女が言うようにこれから先、どんどん忙しくなっていくだろう。喰種と人間との関係。東京という街において、その関係が変わろうとしている。そして、そんな好機を逃がすようなことを彼女はしないだろう。
切っ掛けはなんだったのか、それは分からない。しかし、このまま平凡に時が過ぎるなんてことはない。
賽を投げたのは誰なのか、それは分からないが、賽は既に投げられた。物語は既に始まったのだ。
「ほら、先生も食べよ」
そして、また俺にと爪楊枝を差し出してきた。再び、差し出されたたこ焼きを口に運ぶ。カリカリの皮にトロトロの中身。
――あぁ、美味いな。
「ねぇ、先生。来年も来られたらいいね。ここに」
「……そうだな」
美味しそうにたこ焼きを頬張る彼女の問いかけに俺はただただそんな相槌を打つのが精一杯だった。
喰種と人間との物語は悲劇しかない。しかし、物語自体は悲劇だったとしてもその登場人物一人一人に焦点を当てれば幸福だった人間も、喰種も、いるに違いない。
俺の望みはただ一つ。
――願わくばキミに幸あれ。
幸せそうに横を歩く友人のこれからの幸福を静かに祈った。

おまけ

アイコントーク

――……迷惑かけてごめんね。

別に気にするな。何とも思っていない。それに、お前は軽いしな。背負って帰るくらい訳もない。

――うぅ……まさかあれくらいでここまでになるとは……情けない。

いや、俺はイマイチよく分からんが、あれだけ食えばそりゃそうなるんじゃねーのか。確か、ラムネにたこ焼き、イカ焼きに、はしまき、それにリンゴ飴に綿菓子……人間でもそんなに食べないぞ。

――せっかくのお祭りだからね。去年は来られなかったし、今年は目一杯楽しもうと思ったんだ……。

別に俺に合わせて食わなくても、楽しめたろうに……。

――そう言う問題じゃないのさ。

そう言うもんかね？

――そういうものさ。……うっぷ、気分が悪い……吐きそう。

お、おいちょっと今は勘弁してくれ。背中で吐かれるなんて、御免被るぞ！　ちょっと待ってろすぐにコンビニの便所でもつれて行ってやるから！

――先生、早く……。

あぁ、分かった。全身全霊で頑張るから、お前も頑張れ！

――うっぷ、もう、もう無理かも……

耐えろ！　耐えるんだ！

# 第十四話

――ねぇ、先生。
――この物語の主人公は最期、ヒロインを救って死んじゃったね。
――うん、まぁ面白かったよ。退屈しのぎにはなったかな。
そう、それは今は昔の夏の日の話。
――ねぇ、先生、もしも私が悪者に殺されそうになったら……。
愛支は読んでいた小説をパタンと閉じるとこちらを向いた。ふいにその右目が血の様に紅く染まる。
――その時は先生は〝何か〟を犠牲にしてでも助けてくれる？
愛支が読んでいた小説はファンタジー小説だった。随分前に買って本棚に突っ込んであったやつを愛支が文字を読む勉強として読んでいた。俺が読んだのは随分と前のことだったので話の詳細は忘れたが、確か異世界の剣と魔法の物語だったはずだ。そして、主人公の剣士は物語の最期に魔王に攫われたヒロインを助けに行き、そこでヒロインを逃がすために死んでしまう、そんなありふれた物語だった。
――えー、私が悪の組織に捕らえられるイメージが湧かない？　うふふふふふ、確かに私は強いけど、世の中には悔しいことにこんな私よりもちょっぴり強い人間がいちゃうんだよね。それに、これはもしもの話だよ。だから、先生の思うがままに言ってもらえたらいいかな。
――もう一度聞くよ。もしも私が悪者に殺されそうになったら、先生はその時〝何か〟を犠牲にしてでも助けてくれる？
愛支が何故急にこんなことを聞いてきたのか、それは分からないが、俺がなんて答えたのかだけは覚えている。
俺はその物語の主人公の様にヒロインに愛だの恋だのをはっきりと口に出したりは出来もしないし、口に出したとしても似合いもしない。そうじゃなくても、命を賭けて救うなんて、そんなカッコいいセリフを吐くなんて恥ずかしくて出来やしない。それに愛支は妹のような娘のような存在であり、ヒロインでも何でもない。
だから俺は、

『そうだな、命を賭けてなんて、臭いセリフは似合わないだろうし……。うん、そうだな、もしもそんな場面があったとしたら――――腕一本、利き腕一本だけならくれてやってもいいかな』

その答えに愛支は、

――そう、それは嬉しいね。

そう言って楽し気に笑った。

「ふむ、そうか報告ご苦労だった。下がっていいぞ」

部下からの報告を受け、真戸呉緒は考えを巡らした。

――あの二人組の怪しげな高校生の情報提供以降、フエグチ親子に関する情報はなしか。

あの木製の面を被った人物にフエグチ親子の逮捕を邪魔され、親子に逃げられて以降、この件は全く進展していなかった。いや、進展はあったのだが、それはフエグチ親子と直接関係することではなく、怪しげな高校生の男女二人組がイラストに似た親子を二十区の外れにある重原小学校辺りで見たという情報提供があっただけだ。

――あの二人組を取り逃がしたのは大きいな。

マグカップに入ったコーヒーを啜りながら呉緒はあの時のことを思い出した。

その情報提供があった時にたまたまその場に居合わした呉緒は怪しげな男子高生の方をＲｃ検査ゲートに通して見たのだがゲートは反応しなかった。そこで呉緒はその二人組を解放したのだが、後でそ

の二人が語っていた身元を調べて見るとそれは出鱈目であり、一応とばかり捜査をした重原近辺では何もフエグチ親子に関する情報を得ることは出来なかった。
出鱈目の身元を語り、出鱈目な情報を流す。この事から考えられるのは、二つ。悪戯か情報をかく乱させるかだ。そして、呉緒の直観は後者を指していた。
――情報のかく乱が目的だとすれば、あの二人は間違いなくフエグチ親子を知っていることになる。やはり、あの時自分の直感を信じてもう少し引き留めておくべきだったか……。
Ｒｃゲートに通したのは、男子のみだった。女子の方も通しておけば結果はまた違っていたかもしれないと遅い後悔をする。呉緒の読みが正しければあの二人はフエグチ親子を庇おうとしている。
――それにラビットの動きも気になる。
ラビットとはウサギ型のお面を被った喰種の通称のことであり、ここ最近動きが活発化している喰種だった。東京の様々な場所に現れては捜査官を襲っていた。
――ラビットによる被害の頻度は多いが、殺されたのは中島くんだけか……。
ラビットが襲った捜査官は多数いたが、その殆どが軽い戦闘をしての離脱であり、その襲われた多くの捜査官が無傷、もしくは負っても軽い怪我だけだった。
――ラビットは無差別に捜査官を襲っているように見えるが、それはカモフラージュであり、本当の目的はそれらの捜査官ではなく、二十区にいる捜査官を殺すことだったら？
呉緒の直感がささやく。ラビットの目標は私たちではないか、と。
――もしも、それが正しいのであれば、その狙いは口封じ。私たちを殺してしまえば写真も映像も残っていない以上捜査は難航する。
母の方はともかく、娘に関しては写真も映像も全くなかった。あの日、フエグチ親子の姿は〝何故か〟どの監視カメラにも映っていなかった。つまりあの場にいた捜査官を全員殺すことが出来れば、娘の方を掴まえることは厳しくなる。

――それが本来の狙いであれば、ラビットこそフエグチ親子につながる手掛かりになる。
呉緒の考えがここまで達した時、ふいに声を掛けられた。
「真戸さん、どうしたんですか？　難しい顔をして、何か考え事ですか？」
声の方に目をやれば、部下である亜門が少し心配そうに顔色で呉緒の方を見ていた。
「あぁ、少しな」
「もしかしてあの木製の面をした謎の男の事ですか？　あれ以降目撃情報もありませんよね」
「ふむ、その件もある」
呉緒はふぅ、と一つ息を吐くと窓の外を見た。外は曇り、午前中はあれだけ青空が広がっていたというのにいつの間にかいつ雨が降っていてもおかしくない空模様となっていた。
「そう言えば今日は急な雨が降るかもと天気予報で言ってましたね。これは今にも一雨来そうです」
亜門の何気ない会話を聞いて呉緒は思い出す。
――そう言えばあの時も急な雨が降って来たな。
驟雨。
この言葉が呉緒の頭に思い浮かんだとき、閃いた。
「亜門くん私はこれから出かけてくる！」
「ちょっと！　真戸さん!?　どうしたんですか、突然!?」
呉緒の直感が告げる。今、二十区にいけば、あの木製の面を被った人物と出会えると。呉緒がＣＣＧ支局を出た時、雨はまだ降っていなかった。

「もう大丈夫ですよ。捜査官の目は撒きました」
「そうかい、ありがとう。本当に助かったよ。あのままじゃ、白鳩に殺されていたよ」
「いえいえお気になさず。お婆さんにはいつもためになる知恵とかを教えて貰っていますからせめてもの恩返しです」
目の前の腰の曲がった老婆にそう言って笑いかける。
「亀の甲より年の劫。ただの悪運強く生き残ってきた年寄りの知恵なだけだよ」
「それじゃあ私は色々とありますのでこれにて失礼します。これからは本当に注意して行動してくださいよ。偶々今回は私がいましたけど、それは本当に運が良かっただけですので」
急な出来事だったため事前の準備が出来ず、服装は普段着であり武器は懐に忍ばせた包丁代わりのナイフが一本だけというありさま、そしてとりあえず顔を隠すために鞄に入っていた木製のお面を顔につけている。以上が俺の今の姿だった。どう見ても怪しさ満天の格好だが、しょうがない。こんな有事に遭遇すると分かっていたのなら、部屋においてある物干し竿代わりの一品とローブも持ってきたのだが、それは無理な注文だった。
ふと、空が目に入った。
――嫌な空模様だな、今にも雨が降りそうだ。
驟雨とは急に降り出す雨の事を言う。いつだってそれは俺にとって良くないことを運んでくる。生まれてからこれまで、まだまだ短いといえる間だが、それでもよくないことが起った時には必ずと言っていいほど驟雨が降っていた。
「本当にありがとうね、今日は。お礼はまた今度かならず」
そんな言葉と共に去っていく老婆の後ろ姿を見送るっていた時だった。

ポツリポツリと空から雨粒が降って来たと思ったら、雨はその勢いを強め、すぐに傘が必要なほどの勢いになった。
――やっぱり降ってきたか……。何も起きないといいが。
心の中で嫌な感情を吐露して、もう必要ない仮面を取ろうとした時だった。後ろに急に人の気配を感じた。
「久しぶりだな、木面男」
慌てて振り向いた先にいたのは一人の男。痩せた男だった。雨が降り始めたにもかかわらず傘も差していない男の特徴的な白髪から雨水が垂れていた。そしてその手には傘の代わりにアタッシュケースが握られている。
――最悪だ。あぁ最悪だ。
彼の事は知っている。実際に合うのは初めてだが資料として情報として知っている。彼の強さは本物だ。並みの喰種捜査官ではない。
そんな彼に対して俺の手にあるのは包丁代わりのナイフが一本。思わず現実逃避をしたくなる。
「クク……あの時はよくも邪魔してくれたな。その代償しっかりと払って貰うぞ！」
――あぁ、やっぱり驟雨は嫌いだ。
もしもこうなることが分かっていたのなら、もっと打つ手はあったのに……そんな遅い後悔をしながら、雨の中俺は喰種捜査官――真戸呉緒と対峙した。

おまけ。　アイコントーク

――いぇい！

声を聞くだけでこの場から立ち去りたくなったよ。何故ここに居る、イトリ？

――いやぁ、少し気になる情報を聞いてね。それでキミを探してたのよ。

帰り道に待ち伏せ何てたちの悪い事しやがって……。

――相変わらず私の扱い酷いなぁ……私はキミを心配してきたのに。

心配？

――そうそう小耳に挟んだけど喰種捜査官とやりあったんだって？

……（いつも思うけどどうやって情報集めてるんだお前らは……）

――まぁ、見た目心配要らなそうでよかったよ。よかったよかった！　じゃあそれじゃあキミの無事を祝して私の家で飲もうか！　もしかしたらイイコト……あるかもよ。

# 第十五話

――はぁ。

男と対峙しながら、内心で大きなため息をつく。まったくどうしてこうなったと言いたくなる状況だ。急に降り出した雨模様と同じく、俺の気分はどんどん沈んでいく。目の前に立つ男を観察する。資料や写真などの情報でよく知っている男だった。やせ形というよりかはやせ過ぎた体つきに白髪。写真や映像で見た限りでは生気が感じられず、どこかしら死神という二文字を思い起こさせるような男だった。

しかし、実際に対峙して見ればどうか、

「よくも先日は邪魔してくれたな。お陰様でフエグチの屑を仕留めそこなってしまったではないか」

大きく見開かれた眼球からはありありと情が浮かんでいる。その感情を言葉にしたのなら情熱、激情、憤怒のどれが当てはまるだろうか……いやもういうまでもなかったな。憤怒と怨嗟と殺意この三つに違いない。

刺々しい言葉を吐きながらも男の口端はニヤリと持ち上がった。俺としてはどうにかして穏便に済ませたかったのだが、彼の様子を見るにそれはもう過ぎたる望みだろう。彼を支配している感情は怒り、恨み、そして敵意。その三つが支配している相手を前に話し合いで済むなんてことはありえないと古今東西、どの小説でも相場が決まっている。勿論、この世界は小説でなく現実だが、こればかりは小説も現実も同じような物でもう戦うしか道は無いだろう。

雨に濡れ衣服が肌に張り付き不快な気分になる。

そして、雨とは別に背中を流れる汗が否が応にも今置かれている状況の不味さを物語っている。

「そうか、それはすまなかったな。こっちも色々事情があってね、許してくれると嬉しい」

内心を声色におくびにも出さずに、軽口を叩きながら考える。

――さて、どうするか。

対峙する男の情報を整理する。名は真戸呉緒。ＣＣＧ本局所属の上等捜査官。誕生日は一月二十四日。血液型はＡ型。身長は１７７ｃｍで体重は４７ｋｇ。趣味はクインケ集め。以上が彼の簡単なプロフィールだ。

上等捜査官というと准特等捜査官や特等捜査官と比べると戦闘力は劣っているというのが一般的なのだが、真戸呉緒の場合は違う。真戸呉緒は前線に立ち続けるために昇進を断っているため上等捜査官という地位のままなのだ。実質的なその実力は准特等捜査官どころか特等捜査官にまで迫るという。特にクインケの扱いは目を見張るものがあり、その実力はＣＣＧ内部でも十本の指に入るとか何とか。

さて、以上の情報と俺の今の状況、さらに周りの状況とを全て加味して考える。現状において真戸呉緒と戦って勝機があるか？

――無理だ。絶対に俺は真戸呉緒には勝てない。

出た結論はそれだった。水が高い所から低い所に流れるように、歴然とした事実として俺は真戸呉緒には勝てない。真戸呉緒がクインケを持っていないのなら勝機の一つもあったかもしれないが、残念なことにそんな有り得ないことがある訳はなく真戸呉緒の右手にはアタッシュケースが握られていた。後はそのケースの中身が空であることを祈るしかないが、それは望みがないにも程があるだろう。

さて、戦闘をすれば殺される未来が判明した以上俺が取れる手段は一つだけ。

――どうやって真戸呉緒を撒くかだな。

勝てないなら逃げるしかない。装備も心もと無い今、それしか生き残る手段はないだろう。先ほどからの真戸呉緒の様子を観察するに動きにも言葉にも殺気が痛いほど見て取れる。今にも俺を食い殺さんとするばかりだ。訳あって喰種と接する機会が多い俺でもこの純度の高い殺気に思わず呑まれそうになる。もしも殺気に呑まれたらどうなるか……。

――それはそれで楽そうだな。

もしも俺が真戸呉緒の発する殺気に少しでも呑まれたり、気圧されたりしたのなら、きっとその瞬間が俺の死に際だろう。その時はこの

窮地からどう脱するかを考える必要はなくなる。強制的に窮地からあの世へ強制送還だ。
――それは少し困る。
そう、今死ぬのは少しばかり困る。俺にはまだやり残したことがあり、見届けなければいけないことがある。
――彼女の決断を、彼女の行きつく先を。
だからこそ、ここで死ぬわけにはいかなかった。少なくとも彼女が選んだ選択の先に辿り付いた結末を見届けなければいけない。それが俺に残された使命だ。
「私が許すとでも思うか？」
「アンタは喰種捜査官だろ？　俺は人間だ。だから、管轄外と言うことで見逃してはくれないかね？　ほら、喰種対策法にも『人民の命は最優先されるべき』ってあるしさ」
「屑を庇っておいてよくそんな口が利けるな。愉快で思わず笑ってしまったよ。人民というのならまずその薄気味悪い仮面を取ったらどうかね？　その恰好では喰種と間違えられて殺されても不可抗力だろう」
「まぁ、俺もこんな仮面取りたいんだけどさ。そうもいかないんだよね。これは俺にとって命綱だし」
顔を見られた時点で俺の人生は終わる。これまでの会話で真戸呉緒の俺に対する執着は相当の物だと言うことが分かった。顔を見られたら最後、真戸呉緒は執念で俺を見つけ出すだろう。そうなれば俺は喰種を保護した奴としてＣＣＧに身柄を拘束され、そのまま処刑台まで一直線だ。
――はぁ。何だか笑えて来るな。
死亡フラグが満載の状況にため息と笑いが一緒に出てきそうだ。しかし、弱音は言ってられない。真戸呉緒と会話を続けながら俺はナイフを握っていない左手の指先をズボンのポケットに入れた。直ぐに指先が固い感触とぶつかる。ナイフと同じく万が一のためにいつも持ち歩いている一品だ。まさか、コイツを使う機会が来るとはな。いつもはポケットが一つ使えなくなるから持ち歩くのも少し億劫

だったそれだが、まさか今日使うことになるとは思ってもみなかった。人間万事塞翁が馬、転ばぬ先の杖とはよく言ったものだ。
そして、考える。奥の手を使う最高のタイミングを。
――俺と真戸呉緒との間にある力の差は極めて大きい。例え、逆立ちしても俺は真戸呉緒には勝てない。
なら、どのタイミングで奥の手を使うのが正解か？　力量差があるのなら、時間が経てばたつほど不利になる。それは少しでも荒事に首を突っ込んだことのある人間ならよく知っている事だ。なら、どうするか――。
――初手だ。真戸呉緒の初撃を躱して、その隙に使う。
長引けば不利になるのなら、長引く前に決めるほかない。ならば初め、一番初めの一太刀にカウンターの様に合わせればいい。それが現状における最適解だ。
グッとナイフを握りしめた俺を見ながら真戸呉緒はスンスンと鼻を鳴らした。
そして、そのまま少し動きを止めると大きくその両目を見開いた。
「こ、この匂い！　雨でかき消され、薄くなっていたが、この匂いはまさか……！」
まるで長年追い求めていたものを見つけたように歓喜に震えた声で雨の中叫ぶ。
「この匂いは間違いない！」
――真戸呉緒の瞳に恨みの念がより強く現れた。
「探したぞ！　探し求めていたぞ！」
――今の真戸呉緒は恨みと殺気に囚われている。
「ハッハッハッハ！　貴様が何者かは知らん！　そしてどうでもいい！　だが、貴様には聞きたい事がある！　その体中から匂うその匂い！」
――そうか……。真戸呉緒が前線に立ち続けるその理由は……。妻の敵討ちだったな。
「うっすらとしか匂わないが俺の鼻がこの匂いを間違える筈もない

！」

――真戸呉緒の妻を殺したのは……。

「――貴様、〝梟〟と関係あるな？」

――確か、キミだったな。

刹那だった。俺が真戸呉緒の問答に答える間もなく、彼はアタッシュケースからクインケを取り出し、それを振るう。「フエグチ壱」。真戸呉緒が普段から愛用している多関節の変幻自在なクインケ。それがまるで鞭のようにしなりながらこちらへと振り落とされる。

その動きは速い。避けるだけでも一苦労だ。しかし、動きは速いが、それでも今の真戸呉緒は興奮状態であり普段よりも思考能力は劣っており動きは単調だ。偶然の産物とはいえ、この好機を逃すような勿体ない真似は出来ない。

右手に持ったナイフでその一撃を受け止めつつ、左手のポケットからある物を取り出す。細長い角ばった形式のそれは既に安全ピンを抜いてある。そして、それを下手投げの要領で真戸呉緒の顔に向かって投げ出す。

そして、後ろに向かって走り出す。振り向くことはしない。

――刹那。

背中越しでまるで全てを呑み込まんとするような光の爆発が起こった。

「ぐぅっ!?」

真戸呉緒の唸り声が背後から聞こえた。特製の閃光弾。喰種ですら2，3秒目を使えなくするほどの威力を持ったそれだ、いくら真戸呉緒が歴戦の喰種捜査官だとしても確実に数十秒は目が使えなくなる。その数十秒があれば十分だ。俺がここを逃げ出すのには十分お釣りがくる時間だ。

足を止めることなく走り続ける。一歩、そして二歩足を踏み出す。それは四歩目を踏み出した瞬間だった。

「――逃がすか！　逃がしてなるものか！」

後ろから声が聞こえ、そして背中を嫌な感覚が襲った。

瞬間の後、

「ぐうっ！」
右肩をまるでバットに殴られたような鈍い痛みが走った。痛みで思わずうめき声が出た。しかし、数歩よろめきながらもその足を止めることなく走る。ここで足を止めたら間違いなく捕まってしまう。右腕を庇うように押さえながら走り出した俺に二度目の追撃が来ることはついになかった。

「はぁはぁ……まじかよ、さすが要注意人物だけあるな」
未だに強い雨が降りしきる中、俺はようやく仮面を外し、ビルの外壁に体重を預けた。真戸呉緒を撒いて既に十分以上、ひたすらに裏路地から裏路地へと人目に付かない道を走り抜けここにたどり着いた。恐らくもう心配はいらないだろう。
激しい雨に打たれて服はこれ以上にないというくらいに濡れ鼠であり、絞ればバケツ一杯分の水がでそうだ。
息を整えながらさきほどの真戸呉緒の一撃について考える。
――目は確実に使えなかったはずだ。だとすれば音か匂いか……。
例え瞬時に目を瞑ったとしても瞼越しでさえあの閃光弾は数秒の間その視界を奪う。となると真戸呉緒は視覚を使えない状況で俺に攻撃を当てたことになる。俺からすればとんでもない化け物だ。
あのままともに戦闘をしていたら、きっと数秒で俺は輪切りにされているだろう。
「にしても、愛支さまさまだな……」
右の袖を捲ると攻撃を受けた部分が真っ青に変色していた。鈍い痛みと腕が動かしにくいところを見るに下手をすると骨が折れているかもしれない。しかし、逆を言えばそれまでだ。
喰種ですら切り裂くクインケの直撃を受けてもなお、骨が折れただ

けかも知れない、という被害で済んでいる。通常の服なら間違いなく腕どころか上半身と下半身がきっぱりと切断されていただろう。少なくとも俺はこの世にはいなかったはずだ。

――今回ばかりは愛支に助けられたな。

「〝私の〟だから並みの防護服よりかよっぽど丈夫だよ、その服」とは彼女が俺に服をプレゼントしてくれた時に言っていたことだが、まさかここまでとは思っていなかった。恐らく家で俺の帰りを待っているであろう友人に心の中で礼を言う。そして同時にどう言い訳をすればいいのかを考える。

――愛支に正直にいう訳にもいかないだろうし、それに真戸呉緒にも確実に目をつけられたよな……いや、下手をすると白鳩全員が俺を探す可能性もあるな……。

「はぁ……どうするかね」

一難去ってまた一難とは言うが、危機が過ぎ去っても考えなければいけない事が山積みな状況に思わずため息が出るのを止められなかった。

おまけ

アイコントーク。

――ねぇ、先生。右腕を庇っているけどどうかしたの？

いや、別に何でもないよ。少しばかり派手に転んで打っただけさ。

――ふーん。

な、なんだよ。そのジト目は……。

――いーや、何でもないよ。ただ……

いっつ！　何しやがるんだ！　急に叩きやがって！

――ふむふむ、先生。上を脱いでみて。（〝私の〟が表面だけとは

いえ傷つけられている？）
はぁ、何を急に。
――いいから早く早く！
ちょっと、おい！
――ふむふむこれは折れてはないにしてもヒビでも入っていそうだね。まぁ、その辺りは先生の方が詳しそうだけど……。（そして、この痣から考えるに長物の横からの一撃、そしてそれは純粋な刀系のクインケではない）
……。どうして急に黙り込んで？

――いーや、何でもない。何があったのかは聞かないけど、先生も気を付けないといけないよ。暫くは腕も使えないみたいだし、私が食べさせてあげるね。（一応服とは言え、〝私の〟を傷つけるだけの威力をもち尚且つ変則的な長物のクインケを持つ人物……）

なんだか目が笑ってないんだけど……この怪我は本当に気にしなくて……。
――ほら、先生。今日も美味しくできたから味わって食べてね。はい、あーん。（長物をもつ喰種捜査官はちらほら知ってるけど、条件を全部満たす捜査官は……うふふふふふ）
いや、別に俺は左手でも飯は食えるから……。
――うふふふふふ。気にしなくていいよ、ほら、あーん（うふふふふふ、真戸呉緒。まどくれお……）
とりあえず、ありがとう。色々とたすかった。
――ううん、気にしないで。先生は何も気にしなくていいよ。全ては私に任せてよ。うふふふふふ。（ふうふ　は　いっしょ　のほうが　いいよね♡）
……。

# 第十六話

真戸呉緒という男について考える。喰種捜査官であり、その腕は一流。純粋な白兵戦であるならば特等捜査官ともやりあうであろう力を持つ。

真戸呉緒は喰種を恨んでいる。心の奥底から。

彼と対峙したからこそ分かる。彼の恨み、憎しみ、怨恨は本物であり、『喰種は悪であり、屑である。そこに個人の人格が入り込む余地は欠片もない』 彼の哲学はこれで完成されている。あの笛口リョーコを襲った時も、そして、今回俺が対峙した時もそうだ。彼の瞳にはただただ復讐すべき憎むべき相手が映っていただけだった。だからこそ、彼はまるで息を吐くかのように俺たちを抹殺しようとした。そこに躊躇いも躊躇もない。何故なら、それが彼の哲学であり、彼の正義だからだ。

――一度完成された哲学、思想は並大抵のことでは崩れない。

何故ならそれが人格や生きる指針を決定しているからだ。それは人間も、そして喰種も同じことだ。

そして考える。

――真戸呉緒をどうするべきか。

先日の友人との会話。俺の友人は俺と違って頭がいい。だからこそ、あの俺の腕の傷を見て、誰が犯人かなんていうのは辿り付いているはずだ。そして、アイツが犯人を特定したのならばきっと……。

先日、友人がぽつりと漏らした言葉を思い出す。

『生きていたことを後悔するような、本当の地獄を味わわせてあげるヨ……』

彼女はそう言ってケタケタと笑った。我が友人との付き合いは長い。お互いに下の毛も生えそろわない内からの腐れ縁だ。だからこそ、彼女がどう出るのかは分かる。分かりたくても否が応にも分かってしまう。

――真戸呉緒は喰種にとっては悪だ。

無差別に喰種を狩る真戸呉緒は喰種たちにとって恐怖の代名詞で

あり、悪である。特に大切な人たちを、夫を、妻を、恋人を、娘を、息子を、そして両親を殺された喰種たちは真戸呉緒を恨んでいる。そんな喰種を俺は何人も知っている。

――しかし、

とも考える。確かに喰種の立場からすれば、真戸呉緒は悪だ。でも、ここで人の立場に立って彼のことを見て見ればどうだろうか。

――人間にとっては、真戸呉緒は……きっと正義だ。

喰種は悪だという大衆的意見を信仰する者にとっては、真戸呉緒は正義に他ならない。親の仇、子供の仇を真戸呉緒が討ったという人も多い。そんな人間にとっては、真戸呉緒は恨みを晴らしてくれた恩人であり、正義の執行者だ。

それに真戸呉緒自身も、過去に愛すべき人を失っている。真戸呉緒の哲学が完成したのもその事件が切っ掛けだ。そして、その人物を殺したのは……。

――分かり合うって難しいな……。

ふぅ、とため息に似た息を吐き出す。いつかの日に考えたことが再び頭の中に浮かんだ。正義や悪というのは相対的なものだ。どちらの立場に立つかによってそれはまるで万華鏡を覗いているかのようにコロコロとその見た目を変える。だからこそ、戦争も争いも無くならない。人間同士ですら分り合えず争うのだ。これが、人間と喰種とならその溝も一層深まる。

――人間を食べる喰種に、喰種を殺す人間。

分かり合えっていう方が不可能だ。どうしようもなく憎しみ合う様に出来ている。

――人と喰種がいる世界か……。あぁ、この世は狂っている。

もしも、もしも神とよばれる存在が実在して、その神がこの間違った世の中を作ったとするならば、きっと、ソイツは歪んだ奴に違いない。

歪んだ世界で、この間違った世界で、俺に出来ることは何か。

彼女は言った。

『先生、私はこのくそったれ世界を滅茶苦茶に直してやりたいんだ』

その考えが正しいとは思わないが、間違っているとも思わない。ただ、俺がするべきことはなにか。
――ただ、キミの行きつく先に幸福を。キミに幸あれ。
それが俺の哲学だ。

体がまるで鉛の様に重かった。体を動かそうとしても指の一本すらも動かず瞼すら動かなかった。まるで夢と現の狭間の様にただ意識だけが漂ってるような感覚だった。
――あれ？　俺昨日は何してたっけ？
ぼんやりとした意識の中でふと考える。昨日のことを思い出してみる。
――確か昨日はいつも通りアイツと一緒に飯を食って、それで飯の後に痛み止めを飲んで……。
別に特筆して語るようなことは何もないただの平日だった。いつも通り友人が我が家に遊びに来て、いつも通り雑談し、一緒にご飯を作り食べる。そんな何気ない日に一つだけ付け加えるとすれば、先日訳あって少しだけ骨にひびが入った右手が思う通りに使えずに、日常生活でちょっと苦労した程度だろう。
楽しく飯を食べて怪我をした右腕の痛み止めを飲んだところまでは覚えている。しかし、それ以降の記憶がない。
現実と夢との狭間、少し気を抜けばすぐに夢の世界に落ちてしまいそうな中で頭を巡らせる。
そして、出た一つの結論は、
――盛りやがったな、アイツ。

一緒に作った夕食では可笑しな行程も、可笑しな行動もなかった。でも、この体の状況が自然に起きたとは考えにくい。いつ、どの時かは分からないが、友人が何かをしたのは殆ど間違いないだろう。かれこれ友人とは長い付き合いだ。お互いの心情は知れている。だからこそ昨日から警戒していたのだが、アイツには可笑しな点は何もなかった。でも、逆を言えば、彼女にとっても俺の心情など手に取る様にわかることであり、俺を出し抜くことなど簡単だったのかもしれない。（友人の呼び方は統一した方が良いと思います）

――あぁ、くそ……どうにか電話さえ出来れば……。

電話を掛けようにも、腕どころか指や口、瞼すらも動かない状況だ。そして、俺の意識はどうしようもなく闇に沈んでいった。最後に頭の中によぎったのは先日、彼女が言っていた言葉だった。

『私は、キミを傷つけた人間を許さないよ。うふふふふふ、地獄ですら生ぬるい本当の絶望をみせてやる』

次に俺が目を覚ましたのは、全てが終わった次の日の朝だった。

大粒の雨粒が大量に降り注ぐ中、彼女は一人ビルの屋上に立ち、街を見下ろしていた。空を重い鉛色が覆い、耳に入るのは当たり一面を海にでも変えんとばかりに降り注ぐ雨音だけ。斜めに走る銀箭の水墨画の世界で彼女は一人笑う。

「Ｗｅ　ｌｏｏｋ　ｂｅｆｏｒｅ　ａｎｄ　ａｆｔｅｒ」

言葉の継ぎ目に笑い声を滲ませながら彼女は続ける。

「Ａｎｄ　ｐｉｎｅ　ｆｏｒ　ｗｈａｔ　ｉｓ　ｎｏｔ」

琳瑯璆鏘として鳴るようなどこまでも美しい、しかしどこまでも冷たい声で

「Ｏｕｒ　ｓｉｎｃｅｒｅｓｔ　ｌａｕｇｈｅｒ．　Ｗｉｔｈ　ｓｏ

me pain is fraught; Our sweetest songs are those that tell of saddest thought」

彼女は笑っていた。その笑顔は、時には美しくまるで画に描いた様な美人のようであり、また時にはどこまでも狂った殺人鬼が獲物を追い詰めた時の様に歪んでいた。そんな相反する笑顔で彼女は笑う。

――あはははははは！　真戸呉緒！　お前にはこの世の地獄を見て貰うよ！

まるで自ら雨に当たりに行くように彼女は大きく両腕を広げた。そして次の瞬間、ふと、まるで蝋燭の火が消えるように、音もなくいつの間にか消えた。

重い雨の中、彼女の片目は確かに赤く、紅く光っていた。

昨日とは打って変わり、雲一つなくどこまでも続く晴天が頭上を覆っていた。そんな青空の下、俺は携帯を耳に当てる。

「そうか、やっぱりそうなったか」

昨日から友人とは連絡が取れない。もともと気まぐれな猫のような性格の奴だ。連絡がとれなくなることもよくある。例えば原稿を書き上げているときなんていうのがそうだ。しかし、今回に限っては色々と事情がありそうだった。

「郊外にある廃倉庫群がほとんど全壊か……。そして、真戸呉緒が行方不明」

それに付け加えて我が友人は音信不通と来たのだ。以上の情報が示すことなんて誰にでも分かる。
「真戸呉緒を追跡した者はいるか？」
俺はどうするべきだったのだろうか？　本当にこれでよかったのだろうか？
「それはよかった。もしも彼女にばれたとしたら、きっとソイツは骨すら残らずこの世から消え去るだろうからな」
――あぁ、これでよかった。これで間違いなかったんだ。
そう心の中で呟いたのは誰に言い聞かせた言葉だったのだろう。
結果としてはただ一つ。この日から、真戸呉緒という男を見た人は一人もいない。

おまけ　アイコントーク
ん？　偶然だな、こんなところで合うなんて。久し振りだな。
――久し振りだね、先生。十日ぶりくらいかな？　それと、偶然？
本当にそう思っているんだったら辞書を引くことをお勧めするよ。私も先生と街中で合えるなんて嬉しいんだけどね。でも私は作家だから言葉を訂正させてもらうよ。この場合正しいのは偶然ではなく必然だろうに。
じゃあ、運命とでも言っておこうか？
――運命……。確かに運命と言った方が面白いね。作家的に……うふふふふふ。まぁ、いいやそれで要件は何かな？
真戸呉緒が行方不明になった。知っているか？
――へぇ、あの真戸呉緒がねぇ……。彼ほどの喰種捜査官が行方不明とは、世の中物騒になったね。

それに死体はまだ出てきていない。考えられる一番候補は喰種に食われた可能性だ。
――真戸呉緒は喰種捜査官。そして彼に恨みを抱いている喰種は非常に多い。まぁ、そんな喰種が報復のために彼を襲うことは十分にあるだろうね。そして、喰種に襲われて殺されたとすれば……。
彼は喰種に食われ、その肉体は出てこないってわけだ。
――なるほどなるほど、考えうる限りでは一番可能性の高い見事な推理だ。
それでお前はどう思う？　真戸呉緒の行方不明について。
――さぁ、それはどーだろうね？　私には分からないよ。でも、何となくだけど、地獄にでも落ちたんじゃないの？
そうか……。
――それよりも、先生怪我はどうだい？　まだ痛む？
まぁ、少しな。軽いヒビだと言ってもまだ完治にはかかりそうだ。あぁ、それと、今度から痛み止めは自分で取り寄せることにするよ。とある病院で貰った奴にはとんでもない混ざりものが入ってるって噂を聞いたしな。
――うふふふふふ、そうだね。それがいいと思うよ。

# 第十七話

「うん、ここはやっぱりいいね」
　それは秋もずっと深まり紅葉の季節も後わずかで終るであろう頃だった。彼女は高台にある転落防止用のガードレールの傍に立ちその下を見下ろしながら言った。腰まである長い特徴的な翡翠色の長髪が秋風に吹かれながらサラリと揺れる。右手には飲みかけの缶コーヒーが握られていた。
　何時もとは違いキャップを深く被る訳でも、サングラスをしている訳でも、マスクをしている訳でもない我が友人は素顔のまま、心地い音色を奏でながら楽し気に笑う。そう、彼女は今、外にいると言うのに変装していなかった。
　外に出る時に彼女が変装をしない数少ない場所が俺達が今現在立っている場所だ。
　東京にあるとある公園。俺たちが今いる場所は、ちょうどその公園が見下ろせる高台だった。
『たまには散歩でもしようよ』
　という、彼女の言葉をうけ、思いついた場所がここだった。
「うん、確かにここはいい。俺も好きだよ」
　彼女に習いガードレール一杯まで近づくと公園を見下ろす。何分、小さい公園だ。中央にある大きなドーム状の遊具とその周りを囲う様に公園の隅にブランコと砂場後は、植えられた木々と倉庫そして、公衆トイレがあるだけの公園。それでも、住宅街にあり、家から近いと言うこともあってか子供たちには人気らしく、五、六人の子供たちが元気に駆け回っているのが見えた。元気な子供たちの笑い声がここまではっきり聞こえてくる。
「久しぶりに来たけど何も変わらないね、ここは」
　彼女はガードレールにその両腕を置き、体重を預けるとしんみりとそう呟いた。ここには以前から彼女とくることがよくあった。ふと、時間が空いた時に散歩と称してこの公園まで足を運んだことはそれこそ指の数では足りないだろう。

「そうだな。ここは何も変わらないな」
そう言って友人に笑いかける。
最近は色々とあり足を運べなかったが、久しぶりに訪れたこの場所は何も変わっていなかった。時折優しい風が吹き抜け、子供たちの無邪気な笑い声が聞こえてくる。
――人間も、喰種も、恨みも、怨恨も、殺意も、因縁も、組織も、何もかもと切り離された世界がここにはあった。
ここにあるは、そんなドロドロと頭を悩ませるようなことではなく、ただの日常があるだけだ。
「うん、ここは何も変わらない。だから、いい」
友人はそう言うと優しく微笑んだ。それは久しぶりに見る心からの笑みだ。
――もしも、この世界に理想郷があるとするならば、ここなのかもしれないな。
ここに足を運ぶたびにこんなことを思う。人間も喰種も関係ない世界、因縁や執着など頭を悩ませる物のないこの空間が永遠に続くのであればそれは間違いなく理想郷と呼べるものだろう。
「子供は好きだよ」
彼女はコーヒーを一口飲むと、公園で遊ぶ子供たちから目を逸らさずに言った。
「俺も好きだよ」
「うふふふふふ。同じだね」
彼女はただ楽し気に笑うと続ける。
「彼らは純粋だからね、大好きだ。それは喰種だろうと、人間だろと同じ。純粋なうちは喰種に対する恨みも、人間に対する食べるべき餌という概念もない。ただただ、あるがままに暮らしを謳歌するだけ」
「……そうだな」
「ねぇ、先生」
彼女は視線を動かさず吐き出すように言葉を続ける。
「ヒトの成長って往々にして獲得よりも破棄の割合が多いと思うんだ。色々なことを知るにつれて、色々なことを経験するにつれて、か

つての自分を捨てていく。ただ、何も考えずに友人と笑っていた自分を、喰種なんていうものを知らなかった自分を、喰種に恨みなんてなかった自分を、自身が食べている人間というものが自分達と殆ど同じような肉体をしていることを知らなかった自分を、その人間を狩るのに罪悪感を感じていた自分を――」

ゆっくりと彼女は言葉を続ける。その様子はまるで、俺だけではなく、

「――そして、喰種と人間に恋なんてものが成就しないと知らなかった自分を……」

自分自身にも言い聞かせているかのようだった。

「そんな自分自身を捨てていく。言うなれば純粋さを捨てていくわけだよ。そして、一度捨てた純粋さは二度と返ってこない。死んだ者が生き返らないように永遠に……」

薄く微笑みながら話す彼女の言葉に、何と返せばいいのか考える。

「確かに、成長するということは破棄の側面もあるのかもしれない。でも、成長するということは獲得することでもある。色々な知識を獲得し、色々な体験をしていく。そして、様々なことを得ることで、獲得することが出来るかも知れない」

「――かつての自分を、純粋だったころの自分をね。確かに、死んだ者は生き返らない。でも、まだ俺たちは生きている。生きているなら、きっと取り戻すことも出来る筈さ。悲観的に考えるよりこうやって楽観的に考えた方が人生楽しいだろ？」

そう言った俺に、彼女は、

「確かにそうだね。絵空事だとしても、そう考えた方が楽しそうだね」

そう言って笑うのだった。そして笑いながら続ける。

「ねえ、先生」

「何だ？」

「I have a dream that one day on the world, the sons of "Human" and the sons of "Ghoul" will be able to sit down together a

ｔｈｅ　ｔａｂｌｅ　ｏｆ　ｂｒｏｔｈｅｒｈｏｏｄ！」
流暢な英語で彼女はそう言って、ほほ笑んだ。
「そうなるといいな」
友人の言葉をうけて俺もそう言って笑った時だった。
「あっ！　兄ちゃん！　お姉ちゃんじゃん！」
そんな元気な声が下方より聞こえてきた。声の方角を見下ろせばそこには先ほどまで走り回って遊んでいた子供達がこちらを見ていた。どうやら気付かれたみたいだ。
「やぁ、久しぶりだね！」
彼女はそう言うと子供たちに大きく手を振ると、こちらを向いた。
「それじゃあ先生行こうか」
俺の返事を待たずして友人は公園へと足を進める。その足取りは軽い。そんな友人の後を俺もゆっくりと追いかけるのだった。

「いずみお姉ちゃんだ！」
「最近来てなかったけどどうしたのー？」
「そんなことより遊んで遊んで！」
友人の後を追いかけて公園内に足を踏み入れた時には、彼女は既に子供たちに取り囲まれてもみくちゃにされていた。先ほども言ったように俺と友人がこの公園を訪れるのはこれが初めてではない。それなりの頻度で訪れている。だからこそ、いつの間にか子供たちの知り合いも出来て、いつの間にか一緒に遊ぶこともそれなりの回数あった。
「いずみお姉ちゃんもお兄ちゃんもどうして最近来なかったの？」
友人に抱き着いていた少女が首を傾げる。
――いずみお姉ちゃん。
子供達は彼女のことをこう呼んでいる。それは彼女が、いずみと自分の名前を紹介したからだった。名前の由来は恐らく、高槻泉の訓読みだろう。作家高槻泉でもなく、本名である愛支でもなく、ただのい

ずみとして彼女は子供たちの前に立つ。
「うーんとね、少し忙しくてね、最近。しばらく来れなくてごめんね」
彼女は集まった子供たちの頭を撫でながら笑う。何分、身長が小さく、顔も童顔なため、その様子はまるで姉弟や姉妹のように見えた。
――もしかしたら、彼女にもこんな日常がありえたのかもしれない。
Ｉｆを考えてもどうしようもない。Ｉｆはいつだって、Ｉｆであり、現実ではありえない。そんなことは分かっている。分かってはいるがそのことを考えずにはいられない。
――もしも、人も喰種も関係ない世界があるとすれば……そんな世界は歪み何てないのだろか？
「もしかして、お兄ちゃんと何かあった？」
「うん？　どーしてそう思うのかな？」
「だって、いずみお姉ちゃんとお兄ちゃんいっつも一緒にいるから、二人に何かあったのかなーって思って」
少年が我が友人に訪ねる。
「別に何もないよ。私も、彼もいつも通りさ」
少年の短い髪を撫でながらそう笑う彼女に、
「あぁ、そうだな」
俺は素直にうなずいた。
「そう言えば、いずみおねーちゃんとお兄ちゃんの関係ってどんな関係？」
「えー、そんなことも知らないの？」
少年がぽつりとつぶやいた言葉に隣にいた少女が反応した。
「私、知ってるよ！　いずみお姉ちゃんとお兄ちゃんは恋人同士なんだよ！　間違いないよ！」
「えー、恋人ってあれだろ？　彼氏とか彼女とかいうやつだろー。俺は違うと思うなー。だって、いずみお姉ちゃんはこんなに優しくて綺麗なのに、お兄ちゃんは冴えない顔してるし、釣り合ってないじゃん」
「えーでも、お母さんが言ってたよ。いつも一緒にいる男の人と女の人はカップルって言って恋人同士なんだって！」

「俺は認めねえぞ！」
「和樹君は、いずみお姉ちゃん大好きだもんね！」
「あ、こら！　それは言わないって約束しただろ！」
　和樹と呼ばれたツンツン頭の少年は顔を林檎の様に真っ赤に染めるとからかった少女に向かって走りだす。
「きゃーお兄ちゃん助けてー！」
　追われた少女は叫びながら俺の後ろに回り込む。どうやら俺を盾にするつもりらしい。
「な、なんだよ！」
　和樹君は顔を赤らめたまま俺の前で立ちどまった。興奮してるのかその息遣いは荒い。
「いや、何でもないよ」
　そう言って彼の頭を撫でる。友人とは違い男らしい固い髪質が手のひらにあたり少しこそばかった。
　――願わくば彼女を好きだと言った彼の純粋さが失われないように。
「ほーら、喧嘩しないの！　皆仲良くね！」
　友人のその言葉に子供たちは元気に「「はーい」」と頷いた。不服そうな和樹君も小さな声で「うん」と頷いたあたり子供たちの彼女に対する信頼の高さがうかがえる。
「じゃあ、久し振りにみんなで遊ぼっか！　みんな、何がしたい？」
「俺、缶蹴りがいい！」
「私は鬼ごっこ！」
「かくれんぼがいいな！」
「うーん、やっぱり縄跳びかなー」
「縄跳びは昨日やっただろ！　やっぱり大人数いるんだしドッチボールだろ！」
　彼女の言葉に子供たちは各々応える。
「はいはい、じゃあ隼人くんが早かったから今日は缶蹴りをしよっか！」

「えー、かくれんぼがいい！」「いや、鬼ごっこ！」「縄跳びだよ！」「ドッチボールだ！」
「はいはい、喧嘩しないの！　かくれんぼも、鬼ごっこも、縄跳びも、ドッチボールも、今度また遊びに来た時にしよっか」
　彼女はパンパンと手を叩き、子供たちの注目を集める。
「えー絶対だよ！」
「うん、絶対だ。それじゃあ最初の鬼はいずみおねーさんがするから、みんな逃げろー！」
　彼女はそう言うと飲み干して地面に置いてあった缶コーヒーの周の地面に足でラインを引いた。
「じゃあ俺が最初蹴る！」
　活発そうな少年が缶を思いっきり蹴とばす。甲高い音を立てて黒い缶が空を舞う。
「きゃー、隠れろー！」「逃げろー！」
　缶が空を舞うのと同時に子供たちはきゃーきゃーと叫びながら四方へ散らばる。その様子を満足げに眺めながら彼女が、
「じゃあ今から１０数えるよー！」
　そう言ってしゃがみ込み目を隠そうとした時だった。彼女は後ろを向いた。
「なぁ、いずみお姉ちゃん」
　そこには彼女の服の袖をつまんでいる和樹君の姿があった。
「ん？　どうした和樹君？　何かあったのかな？」
　和樹君は少し躊躇いの表情を見せたが、それを首を左右に振ってふっきると、
「――いずみお姉ちゃんとお兄ちゃんが恋人同士って本当か？」
「――うふふふふふ。さぁ、どうだろうね？」
　彼女はその問いに答えることはなく、ただ微笑みながら俺を見るのだった。

おまけ　アイコントーク
――お兄ちゃん、久しぶりー！
久し振りだねヒナミちゃん。元気だった？
――うん、元気だよ！
そうか、それは良かった。
――お久しぶりです、ドクトルさん。
リョーコさんもお元気そうで何よりです。
――本当にあの時はありがとうございました。この恩は感謝してもしたりません。
いえいえ、気にしないでください。それよりも不便はないですか？生活は？
――ええ、芳村さん達の協力もあって不便はしていません。前のようにとは私は行きませんが、ヒナミは何時も通りの生活を送れそうです。それこれも全部……。
辛気臭い話は止めましょう、ヒナミちゃんもいますし。
――そうですね。
――あぁ！　お兄ちゃんまたお母さんとばっかり話してる！　ずるい！
ごめんごめん。
――そんな子供みたいに頭を撫でられても嬉しくなんかないんだからねっ！
そっか、ヒナミちゃんはもう大人だもんね。
――で、でもお兄ちゃんが撫でたいっていうなら、と、止めないよ

！

あはははははは。そうか、じゃあもう少しこうしておこうかな。あぁ、そう言えば遊びいく約束していたけどどこがいい？

――え？　お外にいってもいいの？

うん、勿論（真戸呉緒は行方不明。気がかりは亜門鋼太朗くらいだが、出くわしてもはぐらかして逃げる事くらいは簡単だろう）

――えー、じゃあ水族館がいい！　ペンギンさんが見たいの！

分かった。じゃあ、来週の日曜日にでも行こうか！

――うん、約束だよ！

あぁ、約束だ。

# 第十八話

「へぇー、話では知っていたけど、ここまで人が多いとはねぇ」
普段よりも何十倍の人口密度を誇っている人の波を眺めるようにして彼女は感慨深そうにそう言った。場所は俺たちの住んでいる四区のボロアパートから十五分ほど歩いた場所にある神社。普段は参拝客何て欠片も見かけることない寂れた神社だが、今日は人が溢れんばかりに押しかけていた。境内に上がるための石段にも多くの人が見て取れる。
「まぁ、今日は元旦だしな。そりゃ、多いよ」
言葉と共に出た息は白かった。確か早朝のニュースで寒波が来ていると言っていた事を思い出す。最高気温、最低気温共に昨日よりも二度は低かったはずだ。まぁ、しかし気温が低かろうと雲一つない空から降り注ぐ陽の光のおかげで体感気温の方は随分とましだった。新年から青一面の空模様、なんとも幸先のいいスタートとなった。この調子で今年一年も何事もなく過ごして行きたいものである。
「ふーん、元旦からこんなワイワイと集まるなんて人間ってのはやっぱりよく分からないね……」
白い息を吐き出しながら彼女は言う。去年からさっぱりと身長の伸びていない彼女は見慣れた冬服に身を包み、首元には白いマフラー、頭にはニット帽、手には手袋の完全防備だった。ちなみ彼女が今しているマフラーは一昨年のクリスマスに俺からプレゼントしたもので、手袋の方は去年のクリスマスにプレゼントしたものである。気に入ってくれてるようで何よりだ。
ちなみに俺がいましているマフラーと手袋も彼女からプレゼントされたものだったりする。
「にしても、いきなりどうしたんだ？　初詣に行こうだなんて」
炬燵でのんびりとコーヒーを飲んでいる最中に、急に、「先生、初詣に行って見たい」と来たものだ。少しばかり面を食らってしまった。
「いや、色々と話には聞いていた初詣なるものが見たくなってね。それに、取材も兼ねてる」

彼女は幼さの残る顔出立ちで笑った。端正な顔をしている彼女は見た目だけならはっきり言って可愛らしい。恐らく待ちゆく人にアンケートを取ったとすれば、十人中九人は美少女と太鼓判を押してくれるだろう。恐らくこのままいけば将来的にも美人街道まっしぐらだろう。何とも今から将来が楽しみなやつである。

しかも、顔が良いというのに加えてその実頭まで良いと来ている。何といっても、今話題になっているとある小説の作者様だったりするのだ。天は二物を与えずとはよく聞く諺だが、彼女を見ているとそれは間違いだということがよく分かる。天は与える者には二物も三物も与えるようだ。出来れば何も与えられていない俺に、何かを与えてほしいものだが、ない物を強請ってもしょうがないと諦めることにする。

彼女がいう取材とは大方、今執筆中の二作目の小説のことだろう。どんな作品を書くのかは聞いていないがきっと彼女の作品がそれがどんなものでも面白い作品になるのは間違いない。何とも今から楽しみである。

「へぇー取材も兼ねてんのか……。それじゃあ実際に色々と見て回りますか」

「うん、そうだね。そう言えば境内に出店が出ているんだよね？　今日は」

「例年通りなら境内の方に数軒あったはずだ」

「へぇ、それは楽しみだ。じゃあ、行こうか先生」

彼女は一歩足を踏み出して振り返り際にそう笑うと、小さな手をこちらに差し出した。差し出された手がどういう意味か分からず頭に疑問詞をうかべている俺を見て、彼女は更に続ける。

「新年の始めだし、たまには手でも繋いで仲良く回ろうよ、先生」

――先生。

彼女は俺の事をこう呼ぶ。その理由は何となくわかる。きっと、文字や言葉の意味、人間の常識などを俺が彼女に教えているからだろう。まぁ、もっとも彼女は天才だ。既に現代文だけ切り取れば、彼女の方が先をいっている。

そんな、情けない話は置いておくが、ある事件以来彼女は俺のことをずっとそう呼んでいた。
――俺と彼女の関係は何だろうな……。
複雑怪奇に絡まり合った彼女との関係性を言葉にする適切な言葉が思いつかない。恋人とも違う、家族でもない、友人と言うべきか、もしくは恩人と言うべきか……それとも……。
「あぁ、そうだな」
そう言って小さな手を握り返す。言葉では上手く表せないが、手を繋いで歩くくらいには彼女との距離は近かった。

「愛支は何かお願いごとしないのか？」
缶コーヒーを飲みながらぼんやりと雑踏を眺める彼女にそう聞いてみる。場所はヒトの流れから少し離れた境内の隅。視界の先には神社の本堂がみえ、多くの人が賽銭を投げ込み手を合わせては去っていく光景が映る。人の雑踏で賑わう境内にて、形式通りに手と口を清め、しばらく境内をウロウロとした後、こうして人気の少ないところに落ち着いたという訳だった。
「……お願い事？　誰に？」
俺の言葉に彼女は首を小さく傾げた。
「そりゃ、神社なんだから神様に決まってんだろ。人ごみにもまれるのが嫌なら、絵馬でも書いてみたらどうだ？　二作目のヒットでも祈願してさ」
そう言って俺たちの目の前にある竹で出来た枠を顎で指す。そこには数は少ないが数枚の絵馬とおみくじが結ばれていた。大方、人混みが嫌になった連中がここに吊るしたのだろう。
「前々から疑問に思ってたんだ。人間ってのは何で神に願うんだろう

と……」
「ん？　そりゃどういうことだ？」
「ほら、例えばさ」
　彼女はそういうと吊るされていた絵馬を一つ右手で掴む。そこには油性マジックで『志望大学に合格できますように』と力強い文字で書かれていた。
「そもそもの話だけど、試験なんていうのは勉強をすれば受かるし、お金は働いたら溜まる。一年の健康は本人が体調管理に気を使えばいいだけの話だし、それでも病気になったのならそれは防ぎようがない。叶い様がないようなことは神様だってそもそも叶えられないだろう。例えば喰種から人間になりたいとかね――それにね、先生。小説何てものはね。面白いものを書いたから売れるだけの話だよ。単純だよね？　じゃあ一体何を神に願えばいいんだろうね」
「……」
「結局思うんだ。神様に祈る、願うって言うのはつまるところ逃げなんだ。受験に失敗した、神様が悪い。お金が溜まらない、神様が悪い。病気になった神様が悪い。直接的にそう思っている人間は少ないと思うけど、こうやって往々にしてお参りに来る人間って言うのはその願いがかなわなかったときに少しでも責任を転嫁できる先が欲しいだけなんだ、言い訳が欲しいんだよ」
「ほら、トラストラムシャンディでも言うじゃん。最初の一文はひねり出して書いて、後は神に念じて書くってさ。あれもようするに出来上がった作品がもし駄作だったときに神様のせいにする予防線みたいなもんじゃん」
　彼女はそう言って薄く笑うと、さらに続ける。
「それに先生。私は思うんだ。こんなくそったれな世界を作るような神様だ。きっと願いを聞いてくれたとしてもそれは飛んでもなく歪んだ形で実現されるに決まっている。だから、私は神には願わない」
　――あぁ、愛支。キミは強いんだな。
　心の底からそう思った。小さな目の前の少女の言葉に本気でそう思った。

彼女はそう言い終えると手にもった缶コーヒーを勢いよく飲み干した。
「さぁ、先生。取材も終わったし、今日はもう帰ろうか」
これ以上ここに居るつもりはないとばかりに彼女は軽快な足取りで歩き出す。その小さな背中に声を掛けようと口を開いた。しかし、口の間から言葉が出ることはなかった。数々の言葉が頭の中に浮かんでは消えていく。それは彼女のセリフが往々にして正しいと思ってしまったからだった。
「ほら、帰るよ先生、私たちの家に！　今日は私が先生の晩御飯作るんだから」
先ほどの会話が嘘の様に満面の笑みを浮かべて彼女は言う。その言葉に今日は愛支がご飯を作る日だったと思い出す。
――あぁ、神様。新年くらいまともなものを食わせてください。
愛支、神頼みって言うのはこういう時に使うもんだ、というセリフは言える訳がなかった。

# 第十九話

死のうと思った。全てがばれてしまった。もう私に希望はなかった。ふと、右を見た。

急に足を止めた私を怪訝に思ったのか、私の数歩前で彼が止まっていた。彼と目が合った。

――今の私はどんな顔をしているのだろうか。

きっと、酷い顔に違いない。死刑囚が処刑される瞬間の顔かも知れないし、信じていた人に裏切られた人の顔をしているかも知れない。どちらにしても、絶望の二文字が顔面を覆っていることには違いない。

――彼は今どんな顔をしているのだろうか？

怖い。ただただ怖い。

「あ、……あ、あ」

言葉にならない思いが零れる。

――死のう。

はっきりとそう思った。

「なにそんな顔してんだよ？」

彼はそんな私に一歩足を近づけると、笑いながら言った。その笑顔は、いつも通りの笑顔で、私の知っている笑顔で、そしてもう二度と私に向けられることはないと思っていた笑顔だった。

「な、なんで……？」

私には分からない。私には理解できない。私には想像できない。彼が笑える訳を、彼が私にほほ笑む理由を、彼が私と一緒にいてくれるその心を。

――だって、私は彼とは違う。私は彼とはもう一緒にいられない。彼の家族を襲ったのは私の同胞――

「わ、わたしはアイツと同じ――」

――そう、私は喰種だ。

私の言葉を塗りつぶす様に先に彼が口を開いた。いつも通り穏や

か口調で、優しくまるで小さな子供に話しかけるように。
「なに驚いてるんだ？　まさか、俺があんな些細なことを気にすると思ったか？　それなら心外だなぁ」
　西日に照らされながら彼は続ける。清々しく堂々と。
「俺にしてみればお前が何物だろうと何だろうと関係ない。これまで少なくない時間をお前と過ごしてきた。お前のことはそれなりに知っているつもりだ。俺にとって大事なことは君が君であるということだけだ。俺にとってみれば、お前が人間だろうが喰種だろうがそんな物は些細な問題だよ」
　彼はここで一度言葉を区切ると、さらにゆっくりと言葉を吐き出した。
「喰種だの、人間だの言う前に君は〝芳村　愛支〟だ。そして、〝芳村　愛支〟は俺の親友だ。大事なのはそれだけだろ？」
　彼はそう言って笑顔をつくると、私よりも一回りは大きな左手で私の右手を握った。彼の体温が握られた右手から全身に伝わってくる。一回りしか変わらない筈なのに、その手は大きく……本当に大きく感じられた。
「ほれ帰るぞ、愛支」
　彼と一緒に生きたいと思った。

　都内のあるとあるマンションの一室。俺の住んでいるボロアパートよりも何倍も小奇麗なそこのインターホンを押せば返事はすぐに返ってきた。
『あ、ドクトルさんですね。お待ちしてました。今開けますね』
　インターホン越しに聞こえる声は聞き慣れた声だった。無機質な機械越しからでも分かる穏やかそうな声は、そのまま声の主の性格を表しており、事実今まで出会ったヒトたちの中でも一二を争うほど温

厚なヒトだった。
インターホンが途切れて数秒後、ガチャリと鍵が開けられ扉が開かれる。
「おはようございます、ドクトルさん」
扉の向こうには柔和な笑みを浮かべた美人がいた。癖のない綺麗な茶色の長い髪が特徴の彼女は笛口リョーコさん。俺がバイトがてら行っている家庭教師の親御さんであり、またそれ以外にも色々と縁があるヒトだ。最近は色々とあって家庭教師に行けていないため、こうして会うのは久しぶりとなる。
「おはようございます。リョーコさん、ご無沙汰しております」
「いえいえ、こちらこそご無沙汰してます。ささ、まずは上がって下さい、ヒナミも少し時間が掛かりそうですので」
「それではお邪魔します」
笛口さんのお言葉に甘えて玄関に足を踏み入れる。綺麗に靴が並べられ整理整頓されたそこはウチの友人の家とは多く異なった印象を受けた。
――アイツの家の場合、玄関から本だの原稿用紙だのが散乱しているからなぁ。比べる相手が悪いか。
他人の家は勝手に掃除していくのに自分の家になると無頓着になりすぐに汚部屋になるアイツと笛口さんを比べるのは悪いとすぐに考えを改めて口を開く。
「どうですか、生活は？　不便をおかけしてますが、何か困ったことはないですか？」
「ええ、芳村さん達や〝木〟の方々のお陰で以前と同じとまでは勿論行きませんが、それでも不自由なく暮らせています。本当にその節はドクトルさんにお世話になりました」
そう言って頭を下げようとするフエグチさんを静止する。
「止めて下さい笛口さん。お礼なら十分に言っていただきましたし、何より私たちは私たちの存在意義を果たしたまでに過ぎません。だから、頭を下げる必要なんて何一つないんですよ。それに、笛口さんには私の方こそお世話になってますし、頭を下げるのなら私の方です

よ」
　そう言って俺も頭を下げる。そう俺は、俺たちは何も褒められるようなことをした訳ではない。ただただ自分たちの存在意義を果たしたに過ぎないのだ。自己満足をしたに過ぎないと言っても過言ではない。
「そんなやめて下さい、ドクトルさん」
「じゃあお互いさまという訳で」
「そうですね」
　そう言って二人で笑う。笛口さんは優しく温和な笑みで、俺の方はいつも通り不器用な笑顔で。
　会話が一つ途切れたところで、そう言えば、と俺は切り出した。
「実はもうすぐ試作品が出来るのでまたよろしければお願いしてもいいですか？」
　俺の言葉を聞いた笛口さんは、
「まぁ、それは楽しみですね！　もちろん喜んでお手伝いさせていただきますよ」
　と笑顔のまま快諾してくれた。
「毎回毎回笛口さんにはお世話になります。あと、そう言えばヒナミちゃんは一体？」
　先ほどから一向に姿を現さないヒナミちゃんについて聞いてみる。いつもだったら玄関を開けるとすぐ目の前にいるのに今日に限っては声すら聞いていない。
「あー、それなんですが……」
　笛口さんはその笑みを少しだけ苦いものに変えるとさらに続けた。
「実は、今日の事がよっぽど楽しみだったのか昨日の夜に寝れなかったらしくてですね。さっき起こしたんですけど……二度寝しているのかも」
「あぁ、そう言う訳ですか」
「何でも、お兄ちゃんとデート！　お兄ちゃんとデート！　ってずっと言ってましたし、よほど楽しみみたいです」
「楽しみにしてくれているなら誘ったかいがこちらもありましたね」

それだけ楽しみにしてくれているならこちらとしても誘ったかいがあったというものだ。あぁ、ちなみに言っておくけど、今日のこれは別にデートでも何でもない。いくら彼女のいない歴＝年齢だとしても、教え子に手を出すほど人間をやめてはいない。俺としては妹を遊びに連れていくような感覚だ。

ほら昔の作家も言っているだろ。

――あなたもご存知でしょう、兄妹の間に恋の成立した例のないことを、ってね。

まぁ、兄妹云々の前に俺は少女に欲情するような変態ではないのでそこは悪しからず。

「でも、本当に出てこないわね、あの子。すみません、ドクトルさん迎えに来ていただいた挙句にお待たせしてしまって、もう一度部屋を覗いて来ますね」

そう言って笛口さんが立ち上がろうとした時だった。玄関から見て一番奥の部屋からドタバタという音と声が聞こえてきた。

『ね、ね、寝坊！　寝坊！　あぁあああああ！　何で今日に限って寝坊するかな!?　あわわわわわ！　どうしよう!?　どうしよう!?』

そんな声が扉越しに聞こえてきたと思ったらガチャリと勢いよく扉が開かれ、一人の少女が飛び出してきた。少し寝癖が付いたショートヘアに、ピンクの可愛らしいパジャマを着たヒナミちゃんは笛口さんを見るなり叫ぶように口を開いた。

「お母さん！　どうして起こしてくれな――――――――――」

そこまで言ってようやく俺が居ることに気が付いたのか、捲し立てていたヒナミちゃんと目があった。

「――――――っ!!!!!!」

瞬間言葉を止めて、口をパクパクさせるヒナミちゃん。その顔に浮かぶは驚愕の色。

「……お兄ちゃん？」

あわあわと目を回しているヒナミちゃんに片手を上げて挨拶をする。

「おはよう、ヒナミちゃん」

そして、数刻後、
「きゃあああああああああああああ!!!!!」
ヒナミちゃんの絶叫が響き渡った。

おまけ　アイコントーク
――ねぇ、先生久しぶりだね。
久し振りか？　一昨日も顔を合わせただろうに……。
――いやいや、私の見立てが正しければ、約半年ぶりに感じるけど……？
おい、馬鹿それ以上はやめておけ、お互い不幸になるぞ。
――うふふふふ、まぁ冗談は置いておいて……ねぇ、先生。
ん？
――先生ってロリコンなの？
ぶっはっ！　いきなり何言ってんだよ!?
――うふふふふふ。いやなに、年端もいかない少女とデートしたって小耳に挟んでね……。
お前のその情報網の広さはどこから来るんだよ……。
――今度一緒に水族館行こうよ、行くよね先生？

# 第二十話

その日は特筆して語るべきことは何もないある休日の晴れた日だった。敢えて何かを書き加えるすれば、朝から雲一つない晴天で気温も高く春先にも関わらず少し運動すれば額に汗が滲んだくらいだろう。昼間は確かに暑かったが夜の帳が降りきった現在では気温もだいぶ下がり、涼しく過ごしやすい。開けっぱなしにしている窓から春風が絶え間なくやって来てはカーテンを揺らす。今夜は随分と風が強い。

優しい春の夜風に吹かれながら本を片手にコーヒーを一啜り。

私専用の赤いマグカップに入ったホットコーヒーは確かな苦みとうま味を私の舌に伝えた。いつも通りの味だ。

――あぁ、やっぱりここで飲むコーヒーは美味しい。

マグカップに入っているのは何も変哲もないただのインスタントコーヒー。しかも安物だ。喫茶店と比べるどころかそこいらのコンビニのコーヒーすらにも劣るであろう安っぽい味。でも、私はここで飲むコーヒーが大好きだった。

絵画はそれを飾る額縁によって価値を変えるし、料理は盛り付けかたによって味が変わる。同じようにただ安物のインスタントコーヒーでも状況によってはどんな高級なコーヒー豆よりも勝る味になるのだ。

最早見慣れた狭い部屋。今どき珍しい木造のアパートは劣化が激しく台風が来ると屋根が飛びそうになる。冬はどこからか入り込む隙間風で寒いし、夏場は蒸し風呂のように暑くなる。部屋に備え付けてあるエアコンは型が古く付けると変な音がするし、台所の横からはとうとう雨漏りが発生したらしい。もちろんＷｉ―Ｆｉなんて言うものも存在しない。ついでに言えばテレビだって最近までなかった。

立地も最悪で暮らして行くには不便な部屋だ。でも、私はこの部屋が好きだった。思い出が詰まっているこの部屋が好きだった。何の暖かみもないあの無機質な自室よりもこのボロアパートの一室が好きだった。彼がいるこの部屋が何よりも、どこよりも落ち着いた。

ユートピア、天国、楽園、林檎の生る島などこの世の中には多くの理想郷を現す言葉は存在するけども、まさしく私の理想郷はここだ。そう私は胸を張って断言できる。

コーヒーを啜りながらテーブルの向かいを見る。

何時もとは違い難解そうな顔をした彼がＡ４サイズのコピー用紙と睨めっこしていた。彼の目の間には湯気が昇っている青いマグカップ。中身は同じ安物のインスタントコーヒーだ。

「ん……？　どうかしたのか？」

私の視線に気づいたのか彼は顔を上げてこちらを向いた。持っているプリントには難解な数式やらグラフが印刷されてあった。一応私もそれなりに本などを読みこんできたが、数学やら物理やらは一般教養レベルしかない。彼が格闘している紙を横から見て見ても大雑把な事しか分からない。

「いや先生が家でも仕事なんて珍しいなぁって思って」

読みかけの本をパタンと閉じて言った私に対して、彼は苦笑いを浮かべながら眉間を揉む。最近はどうやら睡眠不足なようでその顔にはクマが出来ていた。

「いやぁ、もう少しでキリがいいからさ。そこまではやっておきたいと思ってね」

「仕事熱心なのはいいけど、ちゃんと体調管理はしないとだめだよ。最近寝てないでしょ、クマ酷いよ」

私の指摘に彼は罰が悪そうに後ろ頭を掻いた。

「お前に体調管理について言われるとは……」

「うふふふふ、昔あれだけ睡眠は大事だからしっかり寝るんだぞ、とか言ってたのは先生だったじゃない」

言外に早く寝ろと言った私に、

「そのセリフを言われると俺も痛い」

彼は苦笑いを浮かべながら柱に掛かっている時計を見た。私もつられて時刻を確認する。二十二時を少し回ったところだった。寝るには少し早いがどうせ研究熱心な彼の事だ。私が来なかった三日間ろくに睡眠も食事もとっていないはずだ。今日くらいゆっくり寝て

も罰は当たらないだろう。
「まぁ、確かに睡眠不足ではロクなアイデアも出ないと思うし、これ飲んだら寝ますか」
どうやら私の苦言は彼には効果覿面だったようで、彼はマグカップに入ったコーヒーを飲みながら書類を片づけ始める。
「うんうん、それがいい」
「そう言えば、今日は泊まっていくのか？」
何気ない世間話を振るかのように彼は言う。
「暫く何もないし、泊まっていくよ」
その質問に私も気軽を装い応える。
「そうか、なら自由にしていけ」
「そうだ、先生一緒に寝る？　安眠できるかもよ」
「何言ってんだ」
彼はそう言って笑った。まるで冗談をあしらう様に、まるで意にしていないかのように……。
――あぁ、やっぱりか……。
その反応だけで分かってしまう。彼が私の事をどう思っているのかが分かってしまう。夏目漱石は名作こころの中でこう言った。『あなたもご存知でしょう、兄妹の間に恋の成立した例のないことを』
分かっていた。勿論分かっていた。これまでも何度も同じような会話を繰り返して来た。そしてその度にうんざりしてきた。彼の中での私の存在はもう既に随分と前から決まっているようだった。
――全く恋や愛だの。惚れた腫れたの歳ではないんだけどなぁ……。
自分自信で勝手に期待して、自分自身で勝手に絶望する。そんないつも通りが何よりも嫌になる。はぁ、と一つ内心で大きなため息をつき、そんな顔がばれない様にコーヒーを飲むようにして顔を隠す。
「――っ」
残り少ないコーヒーを胃の中に一気に流し込んでいた時だった。彼の息を飲む音が聞こえてきた。
「どうしたの？」

そう言って視線を彼に向ければ、
「いや、書類整理してしまおうと思ったら、これだよ」
油断した、そう言って笑う彼の右手、人差し指からは紅い液体が滲みだしていた。そして風によって運ばれてくる血の匂い。
彼の血だ。他の誰でもない彼の血だ。それを意識した瞬間、トクントクンと早くなる鼓動。あぁ、どうしたのだというのだろう。体が熱をもつ。心臓は早く鼓動を打つ。
――どうして、どうして!?
私の混乱をよそに、トクントクンと心臓の音は大きくなり、呼吸が荒くなる。体中が発熱を感じ、顔が火照る。
今まで多くの血の匂いを嗅いできた。多くの人間を殺してきた。多くの血肉を食らってきた。
――分かってる！　私は分かっている！
彼もまた一人間だ。多くの有象無象と同じような体だ。だから、〝味〟も私が知っている味に違いない。それは分かっていた。分かっているのに、
――なんでっ!?　なんでっ!?
逸る鼓動を止められない。体中をうずく熱を抑えきれない。
とくとく、と血が溢れてくる彼の人差し指から視線が離れない。
「ん？　どうしたんだ？」
私の異変に気付いたのか彼が立ち上がり私に近づく。きっと、洗面台で指を洗う為だろう。
しかし、何を思ったのか彼は私の横を通り過ぎることはなく。私の横で立ちどまると、
「ほれ、別に浅い傷だし、心配するな」
そう言って、傷口を私に近づける。血の匂いが一気に濃くなる。濃厚な血の匂いが鼻孔をくすぐる。
酔った。彼の血に酔っていた。こんな感覚、自我が生まれて初めて人間を食べた時以来だ。
――あぁ。
そう思うのと同時に彼の指をパクリと咥えていた。理性が本能に

あっけなく負けた。
――あぁ……あぁ……あぁ。
味は言葉にならなかった。だって私は喰種だ。人間の美味い不味い基準なんて分からない。ただ、それを言葉にするなら今まで食べたことのない味だった。今まで食べたどんな人間よりも味が濃かった。美味しかった。今まで飲んだどんな血酒（ワイン）よりも酔えた。甘美だった、うま味だった、芳醇だった、コクがあった。およそ今まで私が体験したことのない味が全て圧縮されてあった。
――目がちかちかする。頭がくらくらする。心臓がうるさい。
もう私は自分で自分を止めることが出来なかった。
――もっと、もっと食べたい。
本能が訴える。
――ダメだ。それだけはダメだ。
理性がそれを止めようとする。
脳だけでなく、体も分かっている。今口に入っているのは彼の指だということを。もっとも傷つけたくない。最も大切にしたい彼のものだ。噛み切るなんて事は絶対に出来ない。
――でも、少しくらい傷をつけるくらいなら……。
私の舌なら痛みなく傷口を増やせる。あぁ、それくらいなら、それくらいなら……。
回らない頭でそんなことを考えていた時だ。頭の上に暖かい感覚が現れた。
「人のこと心配する前に自分のことを心配しろよ」
くしゃりと少し乱暴に、しかし温かく大きな手で彼が私の頭を撫でた。
ぼんやりとした覚束ない思考で、口を開けて彼の指を出す。
「お前こそ、体調わるいんじゃないの。紅眼出てきてるぞ」
そう言って彼は何でもない様に笑う。
「……え？」
彼の言葉にようやく少し素面に戻った私はぺたぺたと顔を触る。別に顔を触らなくても分かっていた。伊達に長年喰種として生きて

いない。今の私の右目はどうしようもなく真っ赤に染まっているだろう。
――あぁ、酔っていた。柄でもない、彼の血に酔ってしまった。
「何だ、空腹か？　人の飯にあれだけ文句つけといて自分は空腹状態でした、じゃ笑えないぞ」
――そんなはずはない。
彼の言葉を心中で否定する。彼の家に来るときは常に満腹状態かそれに近い状態の時だ。空腹のときに来るなんてことは死んでもしない。今日だってそうだ。ここに来る前にしっかりと家で食事はとってきた。
なのになぜ……。
分かってる。そんなことは分かっている。疑問にするまでもない。
彼だから。彼の血だからだ。
絵画はそれを飾る額縁によって価値を変え、料理は盛り付けかたによって味が変わる。安物のインスタントコーヒーでも状況によってはどんな高級なコーヒー豆よりも美味しくなる。他の誰でもない。〝彼の血〟だからこそ、私は酔った。自分を見失った。その魔力が彼にはあった。
「まぁ、少しくらいなら血、飲んでいいぞ。しんどいんだろ？　本当なら腹いっぱい食べてもいいと言いたいんだがな。俺にはまだ少しだけやることがあるんでな、今死ぬのはちょっと困る」
彼はそう言って自分の腕を差し出す。
――齧り付くなら齧り付け。
彼の目はそう語っていた。
――食べたい。今すぐに齧り付きたい。
本能がそう訴える。しかし、口から出た言葉は、
「いや、いいよ。味見は出来たし」
「そうか」
彼は一言そう言うと、洗面台に向かうために足を進める。
その背中に言葉を投げかける。
「先生……先生の血は本当に不味かったよ。これ以上血を啜ったらお

腹を壊しそうだ」
そう力なく言った私に、彼は振り向きも足を止めることもせず、
「そうか、それは残念だ」
ただ乾いた笑い声を出すばかりだった。

# 第二十一話

――先生、私は思うんだ。『Ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ　ｉｓ　ａ　ｆｉｎｅ　ｐｌａｃｅ　ａｎｄ　ｗｏｒｔｈ　ｔｈｅ　ｆｉｇｈｔｉｎｇ　ｆｏｒ』

今は昔、かの大文豪、ヘミングウェイはこう言ったけど、それはある意味で間違いだったってね。だって世界はこんなにも汚れていて、こんなにも歪んでいるんだ。人間がいて、喰種がいる。こんな可笑しな世界が美しいわけない。世界はどこまでも腐っている。

――だから、私は戦う。こんな世界を壊すために……。

――世界は素晴らしい。戦う価値がある。……後半部分にだけは賛成かな……。

――でも、私は思うんだ、先生……。唯一人、ただ一人この地球上の誰でもない貴方だけでいいから心の底から『Ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ　ｉｓ　ａ　ｆｉｎｅ　ｐｌａｃｅ　ａｎｄ　ｗｏｒｔｈ　ｔｈｅ　ｆｉｇｈｔｉｎｇ　ｆｏｒ』と確信して欲しい。それが私の願いだよ。

今は昔のとある人物の言葉。

「むぅ……」

空を見上げればよく晴れた秋の空が頭上を覆っていた。バケツ一杯の水に青の絵の具をこれでもかと言うほど溶かし、それを巨大な画用紙にぶちまけたような空の色は何だか夏よりも空気が澄み空が高く見える。秋の空は高い、昔からそう言われるがこの空を見ると確かに高く見えると納得する。

青く塗られたキャンパスの上には申し訳ない程度に鱗雲が見える

だけで、見事なまでの秋晴れが広がっていた。本日は晴天なり。
そんな天気もよく、お出かけ日和だと言うのに、俺の横を歩く少女はむすっとした表情。頭には黄色リボンがトレードマークの純白のハットを被り、お気に入りのピンクの花柄のワンピースを着ているのと言うのに気分は斜めのままなのか家を出てからずっと頬袋を膨らませていた。まぁ、ずっとと言ってもまだ五分と経っていないが……。
「ほら、ヒナミちゃん機嫌直してよ」
リスのように頬を膨らませて不機嫌さをアピールしているヒナミちゃんに声を掛ける。
「別にお兄ちゃんに怒っているんじゃないもん……」
起きた後のヒナミちゃんの慌て様は凄かった。まるで幽霊でも見たかのような悲鳴を上げた後、跳ねるような勢いでそのまま部屋に戻っていった。
――そんなに俺に寝起きを見られるのが嫌なのかなぁ……。
生憎さま女性の知り合いが少ないため、その辺りの女心はイマイチ分からない。知り合いの筆頭として上げれられるのは我が友人の愛支だし、その愛支に関していえば寝顔を見られて悲鳴を上げるどころか酔いつぶれた俺の布団に入ってきて、朝逆に俺が悲鳴を上げる羽目になるし、愛支以外で付き合いが深い女性と言えば、大変不本意ながらイトリになる。イトリに関していえばその実あんななりでも実は結構ズボラであり、たまに店に行くと机に突っ伏して寝てたり、自分から飲もうと誘ったくせしてさっさと俺の横で寝息を立ててたりする。
イトリと付き合いの深い四方さん曰く、警戒心の強い奴らしいのだが、無防備に寝息を立ててる姿を見るとどうも警戒心が強いとは思えない。警戒しなくてもいいと安心されているのか、それとも警戒するまでもないと相手にされていないのか、いや、間違いなく後者だろう。何かしようと思ってもイトリに勝てるビジョンが俺には思い浮かばない。あんな奴だが、奴は喰種の中でも強者だ。下手に藪をつついていい相手ではない。藪を突いて出るのが棒ならまだいいが、蛇や鬼

だったら笑えない。
――イトリかぁ……。アイツらも一応警戒しておかないとな。
俺の前では警戒心のけの字も見えないが、それでも彼女が掴みどころのない胡散臭い奴だと言うことは短くない付き合いの中で十二分に知っている。彼女の所属している組織自体、胡散臭さの塊だ。調べてもロクな情報が出てこない。イトリ自身色々とおしゃべりなため様々な情報を落としてくれるがそれもどこまでが本当か分からない。ただ要注意な団体人物だというくらいは分かっている。
「お母さんも、もう一回起こしてくれればよかったのに……」
どうやら、ヒナミちゃんは笛口さんがもう一度起こしに来てくれなかったことに拗ねているみたいだ。
少しだけ頬を膨らませて拗ねる少女を見て思わず、笑みが零れる。
――寝坊をして、母親に拗ねる……か。
その行動が何だか普通の子供の様で、その行動を喰種である彼女が行っている。その子供っぽさが、その振る舞いが……。何だかそれが無性に嬉しくなった。
――俺たちは間違っていないんだ。
小さな事だが、俺たちが行っていることが間違ってはいない事だと確かな確信を抱かせてくれる。
「もう、お兄ちゃん、何笑ってるの！　私、本当に驚いたんだよ！」
どうやら笑っていた顔を見られてたみたいで、ジト目でみられてしまった。
ショートヘアにワンピース、それに平均よりも低い身長。ヒナミちゃんを見ていると何だか昔の愛支の事を思い出すときがある。今ではあんなに髪を伸ばしているが、昔はショートヘアで随分と短かった。それに今では見る影はないが、愛支も昔は可愛らしい時があったりする。俺の後ろをおっかなびっくりについてきたり、俺のシャツツの袖をずっと掴んだまま街中を歩いていた時代も確かにあった。まぁ、その話をすると今の彼女は直ぐにへそを曲げるため、誰にも言う機会はないのだが……。
ヒナミちゃんの姿と昔の愛支の姿があまりにも似ていたせいか、つ

い無意識の内に白い帽子の上から彼女の頭を撫でていた。昔の愛支はこうすると少しは機嫌がよくなったのだ。
「むぅ……お兄ちゃんはすぐに私を子供扱いする」
しかし、どうやら子供時代の我が友人とヒナミちゃんは違うようで、ますます頬を膨らませてしまった。きっとヒナミちゃんにとってすれば不機嫌さをアピールするための行為だろうが、残念なことに元々の顔が可愛らしく愛嬌のある顔なため、怖いというよりも可愛いらしいという印象を受けてしまう。まるで頬袋一杯に餌をため込むハムスターやリスの様だ。
「ごめんごめん」
帽子から手を離しつつ、先ほどの笛口さんとの会話を思い出す。
――『実は、今日の事がよっぽど楽しみだったのか昨日の夜に寝れなかったらしくてですね。さっき起こしたんですけど……二度寝しているのかも』
――『何でも、お兄ちゃんとデート！　お兄ちゃんとデート！　ってずっと言ってましたし、よほど楽しみみたいです』
ヒナミちゃんにとっては今日この日をずっと待ち遠しにしていたようだ。それなら俺も全力にその期待に応えなければいけない。
未だにぷくりと膨れ頬のヒナミちゃんに左手を差し出す。
「お嬢さん、手を繋いでくれませんか？　折角のデートなんだ、機嫌直して、楽しんで行こうよ」
全く似合わないセリフだとは理解している。でも、今の俺に出来ることはこれくらいだろう。
「お兄ちゃんはヒナミと手を繋ぎたいの？」
「それは勿論、こんな可愛い子がいるんだ。男なら誰でも手を繋ぎたいと思うよ」
気障な笑顔を浮かべる俺を見て、ヒナミちゃんは少し考える素振りをした後、少し顔を赤らめて、
「お兄ちゃんがどうしてもって言うなら繋いであげるっ！」
笑顔で俺の手を取ってくれた。
――やっぱり彼女には笑顔が似合う。

「見て見てお兄ちゃん、凄く大きなお魚さんだっ！」
水族館に着くころにはすっかり機嫌を戻したヒナミちゃんに半ば引っ張られるように足を進める。駆け足のような状態で足を進め、水槽の前に着くと、ヒナミは俺の左を離し、ガラスに両手をつき、食い入るように水槽の中をのぞき込む。この水族館の売りとなる巨大水槽は、建物の一階から三階部分まで中央部分を突き抜けるような形で作られており、中には多くの魚が悠々自適に泳いでいた。
流石に休日と言うこともあって人も多い。やはり水族館という場所のせいか、子供連れの家族やカップルが多く見えた。
はぐれない様に一歩ヒナミちゃんに近づく。どうやら、彼女はこの水族館の一番の目玉であるジンベイザメに興味深々なようだ。
「ほぇー、とっても大きいよ、お兄ちゃん」
感嘆の声を上げながら、ジンベイザメの泳ぎを見つめるヒナミちゃん。視線の先のジンベイザメは多くの視線を物ともせず、ただゆっくりと泳いでいた。
「あぁ、あれはジンベイザメといって鮫の一種だよ」
「へ!?　あれ、鮫さんなの!?」
「まぁ、鮫と言っても、ヒナミちゃんが想像している鮫とは違って温厚な奴だからね。主食もプランクトンなんだ」
「プランクトン……？」
「そう、プランクトンって言うのは、海月や魚の小さい時のことを言うんだよ」
「へぇー」
俺の説明で理解できたのか分からないが、ヒナミちゃんは巨大な水

槽に張り付いたままだ。この分では暫くは動きそうにない。
――良かった。そこまであの時の事はトラウマになってないみたいだ。
今日一日のヒナミちゃんの様子を見て、小さく胸を撫で下ろす。思い返すはあの時の事、笛口さんとヒナミちゃんが白鳩に襲われた時のことだ。
大事には至らなかったとはいえ、捜査官に襲われたのだ。こんな小さな子供がトラウマにならない筈はない。きっと、心のどこかで傷になっていることは間違いない。しかし、今日の行動や発言を見ている限りではまだ大丈夫ではあるようだ。勿論だからと言って気が抜ける状況ではない。これからも心のケアは大事になって来る。
――もっとやりようがあったはずだ。
ガラスの中を我が物顔で泳ぐ魚の群れを見ながら、考える。
あの時、あのタイミングで真戸呉緒と亜門鋼太朗を止めるのが精一杯だった。しかし、前から亜門が墓を暴いたという情報はあったんだ。あの時点で、襲撃を止める方法は考えれば何処かにあったはずだ。
今回はたまたま、上手くいった。しかし、次は分からない。どうしても受け身にならずを得ないのは分かっている。それでも、理想を追い求めるのは間違えだろうか……。
――失敗は許されない。
自分でも知らぬ間にいつの間にか俺は右手で力強く拳を握っていた。

「ふっふーん、ふふっふーん」
辺りが西日に包まれ、街が茜色に染まるなか、少女の明るい鼻歌の

音が響く。俺の数歩前を歩く少女はくるりと振り返ると、ニコニコした満面の笑みを浮かべる。
「お兄ちゃん、今日はありがとう」
　水族館からの帰り道、そうほほ笑むヒナミちゃんの手には二つの少し大きなぬいぐるみが抱えられてあった。一つは、ペンギン、もう一つは本日見て気に入ったらしいジンベイザメ。可愛くデフォルトされた二つにぬいぐるみを胸に抱きかかえて歩く彼女はどこからどう見ても年相応の少女だった。
「ううん、気にしないで、俺も今日はとても楽しかったよ」
　ヒナミちゃんの歩幅に合わせてゆっくりと歩きながら応える。ここ、最近仕事ばかりしたため、こうやってゆっくりと休日を過ごすのは久しぶりだった。
「えへへへ、お兄ちゃんも楽しかったんだ……」
「うん、とてもね」
「えへへへ、そっかー、そうなんだ」
　夕日により顔を朱に染めた少女は恥ずかしさを隠す様に口元をぬいぐるみに埋めながら前を向き直し、足を進める。その足取りは軽く、機嫌よさが伝わってくる。
　そして、そのまま暫く足を進めた時だった。彼女の家まで曲がり角二つといった所、すれ違う人もまったく居なくなった路地にて、また、少女がくるりとこちらに体の正面を向けた。
「ねぇ、お兄ちゃん。少し聞いてもいいかな？」
　その声色は今までとは違い、真剣さを帯びていた。
「なんだい？」
「勉強って何でしないといけないのかな？　お母さんは勉強しないさいって言っている。お兄ちゃんとの勉強は楽しいし、嫌いじゃない。でも……」
　そこで少女は言葉をきった。
　暫くの静寂が辺りを包む。その間はきっと、少女が言葉を考える時間でもあり、覚悟を決める時間でもあった。数秒か数十秒かそれとも数分か、少女の体感ではそのどれかだった気もするし、そのどれでも

無かった気もする。兎も角、いくばくかの時間が確かに流れた後ゆっくり言葉を紡ぐ。
「結局、私は人間の子達みたいに学校には行けないし、勉強をしても友達が増えるわけでもない。勉強すればするだけ、周りの子達と違いがより分かってきて……」
愛支は言った。成長とは何かを捨てることだと……。
俺は言った。成長とは何かを得ることだと……。
きっと、彼女は悩んでいる。学ぶにつれ、外の世界を知るにつれ、そして成長するにつれ、嫌顔でも分かって来る様々なことについて悩んでいる。自分のこと、他人のこと、そして世界のことを知るにつれ彼女は色々なことを理解してしまった。聡明な彼女だからこそ、大きな壁に直面してしまったのだ。
彼女が成長をどう感じるかは分からない……。しかし、俺は思う。
――いつか君にも確信してほしい。『世界は素晴らしい』と……。
「――ねぇ、お兄ちゃん喰種って悪なの……。私たちって本当に悪い存在なの？」
そう言った彼女の姿は何時もよりもさらに小さく見えた。

おまけ　アイコントーク
――おっひさーっ！
げっ、イトリ……。
――げって酷い反応だなぁ、傷ついちゃうなぁお姉さん。
嘘をつけ、お前がこんなんで傷つくたまかよ。
――相変わらず女心が分かってないなぁ……そんなんじゃモテないよ。
……。
――あれ拗ねちゃった？　大丈夫大丈夫、行き遅れたら、お姉さんが責任をもって貰ってあげるからさ。

ふざけたこと言っていると愛支に言いつけるぞ。
――あはははは、それは勘弁してほしいかな。あの子の相手は少しばかり骨が折れるからさ。
で、要件はなんだ？
――なんもなしに君の所に来ちゃだめなの？　やっぱりロリコｎ
おい、誰から聞いたその情報!?
――さぁ、誰だろうね、気になるね！
……
――あぁーちょっと無言で帰らないでよ！
だから、要件はなんだよ
――久しぶりに店で飲まない？　今日は定休日だし貸し切りだよ。久し振りに飲もうよ。
何企んでる？
――別に何も企んでないよ。今日は本当に純粋に飲みに誘っただけだって！
ふーん……
――あー、その顔信じてない顔だね。まぁいいよ来ないなら来ないで……でも来なかったら……
来なかったら何だよ？
――いつの間にか、君が年端もいかない少女とデートするロリコンだっていう情報が出回ってるかも知れないねっ！
……一つ貸しだぞ
――あはははは、何だかんだ言いつつ、来てくれる君の事は大好きだよ。
はいはい、お世辞として受け取ってやるよ。
――あはははは。

# 第二十二話

――ねぇ、先生。今は昔かの大文豪はその著書で『Ｙｏｕ　ｃａｎ☒ｔ　ｇｅｔ　ａｗａｙ　ｆｒｏｍ　ｙｏｕｒｓｅｌｆ　ｂｙ　ｍｏｖｉｎｇ　ｆｒｏｍ　ｏｎｅ　ｐｌａｃｅ　ｔｏ　ａｎｏｔｈｅｒ』こう書いたよね。

――私はこの格言は本当だと思っているんだ。例え、世界を旅して回ったとして、他の喰種や人間から逃げ続けたとして、自分自身からは絶対に逃げられない。そして、自分から逃げられない奴は世界からも逃げられない。

――だから私は戦うよ。この腐った世界を叩き壊して、そして全ての人間の前にありのままの世界を、現実を叩きつけてやるんだ。

――分かっているよ。何も言わなくていい。先生と私の理想の形が違っていることなんて分かっている。だから、決定的に袂を分かつまでは、こうやって〝何もないぬるま湯〟に浸かっていたいんだ。

――そう思うことは怠惰で傲慢だろうか？　先生

今は昔のとある人物の言葉

その日は特筆するようなことが何もないある冬の一日になる予定だった。勿論、予定だったと書いた手前特筆するべき日になったのだが、その特筆すべき事情とやらが俺にとっては大きな問題だった。

「うふふ、結構寒くなってきたね」

何時ものように急に部屋に上がり込んできた友人は楽し気に笑う。手に持つのは何時ものコーヒーカップではなくワイングラス。そしてその中には彼女が持ってきた〝ワイン〟。右手でワイングラスを回しながら、左手は炬燵に突っ込むという完全防備をした彼女は、そのままワインを一口口に含んだ。

「そうだな。天気予報ではこれから今日はさらに寒くなって雪まで降るらしいからな……。全く厄日だよ今日は」

愛支のいうように先ほどよりも幾分と気温が下がった部屋で愛支と同じく俺用のワインが入ったグラスを持ちながらこうなった原因を見上げた。

目線の先、年季の入った壁に取り付けられているのはこれまた年季の入った一台の機械。通常室内機と呼ばれるその機械はいつもの異音はもとより電源のランプすら付いてない完全な沈黙状態となっていた。

そうつまり、俺が冒頭で述べた特筆すべきことというのは真冬の凍えるような寒さの日にエアコンがついにサボタージュを飛び越えストライキを決行したということに他ならない。

「しかし、とんでもないタイミングで壊れたね。エアコン」

飲み初めに脱いだ上着をまた羽織直した愛支はワインを飲みながら楽しそうにそういった。ワインを飲んでいるためか真っ赤に染まった右目を細め、嬉しそうに口端を上げる彼女の様子はかなり機嫌が良い時のものだ。

「全くだ。どうせ壊れるなら秋か春にしてくれればいいものを……」

愛支のセリフに頷きながらワインを一口含む。今日彼女がお土産がてらに持ってきてくれた一本なのだが、やはり彼女の選んだものだけあってかなり美味い。俺がいつも飲んでいる安酒とは大違いだ。

その実、ワインの美味さと値段は比例の関係にあるので、この一本がいかほどの値段がするのか恐ろしくて聞けやしない。きっと聞いた瞬間に緊張のあまりワインの味がわからなくなること間違いなしだ。

「まぁ、でもよく持ったほうだと思うよ。私は」

まるで懐かしむかのように壁に取り付けられた室内機を愛支は見る。その目に映るのは懐古か憧憬か。

――まぁ、確かにこいつとは長い付き合いだったな。

思い返せばここに引っ越してきたときから取り付けてあったため相当な付き合いになることになる。両手の指を足しても足りないくらいの年数だ。今年の夏も猛暑となりいつものように彼を酷使してしまったため、ここらでいい加減ストライキを起こしたくなる気持ち

も非常によくわかる。
――しかしなぁ、エアコンの修理、最悪付け替えとなると幾らいるんだ？
そう考えながら、自分の口座に今いくら入っていたのか思い出してみる。
そして、出た結論は――。
無理だ。どうあがいても金が足りん。今月色々と出費が嵩んだから食費だけでカツカツだ。
――はぁ。
自分の甲斐性のなさにため息が出た俺に、
「何、ため息なんてついてるの？　幸せ、逃げちゃうよ？」
と、笑いながら突っ込んだあと、ふと何かに気づいたのかさらに口を開いた。
「あー、なるほど。お金貸そうか？」
いつのまにか台所事情だけでは財政状況まで愛支に知られていたらしい。
「いや、結構だ。我慢する」
いくら俺が甲斐性がないとはいえ、友人である愛支に金を借りるわけにはいかない。本人は気にしてないだろうが、俺にも意地ってものがある。愛支に借りるくらいならいっそ、イトリに……。
いや、イトリに金を借りようものなら巡りに巡って身ぐるみ？がされそうなため、やっぱり駄目だ。
昔、イトリに借りを作ったお陰で偉い目にあったことを思い出す。
「本当にいいの？　このアパート隙間風とか凄いけど……」
「……」
痛い所を突かれたため、返答に一瞬戸惑った。その外見から愛支にお化け屋敷と称される我が家はそのまま築うん十年のボロアパートだ。内装は頑張って取り繕って小奇麗にはしているものの、やはりボロは隠しきれず、隙間風は吹くわ、とうとう台所の横では雨漏りが発生するような場所だ。
いくら炬燵があるとはいえ、この冬を炬燵だけで乗り切れるかと聞

かれれば返答に少しばかり困ってしまう。
「うふふふふふ、、先生も意地を張らなくてもいいのに。どーせ私のほうが今では稼いでいるんだしさ」
「これはそういうことじゃ……」
まるで俺の言い訳を聞かず愛支はさらに続ける。
「あ、そうだ。じゃあ先生が私の部屋に来るっていうのはどう？　ほら、前みたいに一緒に住もうよ。この冬だけでも」
確かにこの極寒地獄に比べて愛支の部屋は何十倍も何百倍もましだろう。まずボロアパートと高級マンションという時点で比べることが烏滸がましい。愛支が俺の部屋のように気を使って掃除でもすれば桃源郷のような部屋になるだろう。
「何馬鹿な事言ってんだよ。俺はこの部屋を気に入ってんだ」
軽口を叩く友人に俺もこれまた軽口で返した。あの日この部屋を出ていった愛支の背中を見送ってから俺と彼女の関係は劇的なまでに変わってしまった。あの日のことを俺は生涯忘れることはないだろう。
「……そっか、そうだよね。私の部屋は先生が住むには少しばかり物足りないよね」
俺の軽口に彼女は逡巡し、少しばかり間を取ったあと口を開いた。その表情は何かに納得しような表情だった。
そして、彼女はワインをくっと一気に飲み干すとさらに続ける。
「うん、やっぱり先生にはこの部屋が似合うよ」
そう言った彼女の右目は赤く紅く光っていた。

既に夜の九時を数分回っていた時間帯だったため室内機の修理等を完全に諦め愛支と飲み明かすと決めて数分が立った時だった。エアコンが天寿を全うし、時間がそれなりにたったからか部屋の温度はかなり低くなっていた。
いくら炬燵があるとはいえ暖かいのは下半身のみ、ワインを飲んで

多少は酔ってはいるものの寒いものは寒い。外出用のコートを俺が羽織ろうと立ち上がろうとした時だった。
体面に座る愛支が何か考えついたのか、口を開いた。
「ねぇ、先生。随分寒くなったね」
「そうだな。今晩は今年で一番の冷え込みらしいからな。明日の朝には表に雪が積もっているらしぞ」
愛支が来る前にテレビで見た天気予報の内容を伝えてやる。
「ふーん、そっか……」
彼女はそういうとニヤリと口端を上げた。
――あぁ、これは絶対に禄でもないことだ。
愛支との付き合いは長い。お互いの表情で言葉にしなくても何を考えているかくらいは分かる。間違いなくあの顔は禄でもないことを思いついた顔だ。
愛支は笑いながら立ち上がると俺の部屋に勝手に持ってきた彼女専用の掛け布団を手にとり、
「先生、少し詰めてね」
その横までやってきたと思ったら、そのまま俺の隣に入り込んだ。そして、手にもつ掛け布団を自分と俺にまるで羽織るかのような形で掛けた。有無も言わさない早業であり強行であった。
「……」
文句の一つでも言ってやろうかと思っている俺に、
「ね、暖かいでしょ？」
彼女はそういってカラカラと笑って言うのだった。全く今日も今日とてよく笑うやつである。何がそんなに楽しいのか、その楽しさの一欠けらでも分けてほしいものだ。
「何がいつも、そんなに楽しいのやら」
「Ｗｈｏ　Ｃａｒｅｓ？　Ｉ⊠ｍ　ｈａｐｐｙ　ｊｕｓｔ　ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｈｅｒｅ　ｎｅｘｔ　ｔｏ　ｙｏｕ」
そう言った俺に帰ってきたのはネイティブもかくやというくらい発音の奇麗な英語だった。仕事で必要なために英語の読み書きは出来るようになったが、なにせん聞くことと話すことは大の苦手な典型

的日本人である俺である。彼女の流暢すぎる英語は1ミリも理解できなかった。
しかし、そんな俺にも分かることがある。
――まぁ、いいか。
別に彼女が何と思っていようが俺にはあまり関係ない。この場合大切なことはたった一つだけだ。
――よく分からんが、あいつは楽しいわけね。
彼女が嬉しそうに笑っている。
俺だって男だ。美人が笑顔で横にいるだけで嬉しかったりする。そして、美味い酒もある。エアコンの修理費ではお釣りがくるだろう。
「まぁ、確かに一人でいるよりかは暖かいな」
高級布団と横に引っ付く愛支の体温のお陰でコートを取りに行く必要はなくなりそうだ。
そう笑った俺の横で彼女は笑顔でワインを口に運ぶのであった。

おまけ　アイコントーク
――いぇい！
……。
――ちょっと、無言で回れ右しないでよ！
イトリ、お前最近こっちに来すぎていないか？　大人しく店に籠っていろよ。
――全くいつも通り私への扱いが酷いな、キミは……。
んで、今日は何の用だ？
――素っ気ないな……相変わらず。まぁでもそう言うところもキミらしいよ。後、話は戻すけど今日付き合わない？
この間も付き合わされた気がするんだが……。
――気にしない気にしない。キミの好きなお酒手に入ったし、それに少しばかり金木君の情報をね、知りたいでしょ？　彼の情報。

今晩だけだぞ。
――そう言って付き合ってくれるキミのこと好きだよ。
勝手に言ってろ